

東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (3)

尾	崎	遺	跡
清	水	遺	跡
新	田	遺	跡
川	野	遺	跡
久	木	野	遺
平	岩	遺	跡

2002

大分県教育委員会

跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡
遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺
崎水田野野野野野野野
尾清新川久平
木小岩



清水遺跡空中写真（南上方向から）

序 文

本書は、大分県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて平成7年度から実施した、東九州自動車道(米良～津久見間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。当事業に係る発掘調査は平成10年度完了し、発掘調査の成果については、順次報告書としてとりまとめ刊行しているところです。

今回の報告書には平成7～10年度に調査を実施した遺跡のうち、大分市尾崎遺跡・清水遺跡・新田遺跡、臼杵市川野遺跡・久木小野遺跡、津久見市平岩遺跡を収録しました。本書がこの地域の歴史・文化を形づくる資料として、また埋蔵文化財に対する理解を進める上で役立てば幸いです。

最後に、調査のご指導を頂きました諸先生方をはじめ、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝を表しますとともに厚くお礼申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石 川 公 一

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（米良～津久見間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成7～10年度に調査した大分市尾崎遺跡・清水遺跡・新田遺跡、臼杵市川野遺跡・久木小野遺跡、津久見市平岩遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、日本道路公団の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆者は、次のとおりである。
 - 第1章 小林昭彦
 - 第2章 小林
 - 第3章 小柳和宏
 - 第4章 小林
 - 第1節
 - ）
 - 第4節
 - 第5節 パリノサーヴェイ株式会社
 - 第5章 小林
 - ）
 - 第7章
 - 第8章 永井 実
 - 第9章 田崎博之（愛媛大学法文学部教授）
 - 第10章 清水宗昭
- 4 遺構及び遺物の実測・写真撮影・製図は、調査担当職員及び嘱託職員等が行った。
- 5 本書で使用した座標系は、昭和43年建設省告示第3059号の規定による第II座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
- 6 本書の作成にあたり、清水遺跡の水田跡については愛媛大学の川崎先生に現地指導から原稿執筆まで行って頂いた。また大分市教育委員会塔鼻光司氏、臼杵市教育委員会神田高士氏及び県文化課の諸氏から多くの協力、助言を得た。
- 7 出土遺物および関係資料は、大分県教育庁文化課資料室で保管している。
- 8 本書の編集は栗田・小林が行った。

目 次

序文	
例言	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	2
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第3章 尾崎遺跡	8
第1節 遺跡の立地と概要	8
第2節 遺構	11
第3節 出土遺物	24
第4節 小結	35
第4章 清水遺跡	40
第1節 調査の概要	40
第2節 遺跡の層序	40
第3節 遺構	45
第4節 出土遺物	50
第5節 自然科学的調査 一 清水遺跡の古環境変遷と稲作の様態一	59
第5章 新田遺跡	102
第6章 川野遺跡	104
第7章 久木小野遺跡 (久木小野神社)	153
第1節 遺跡の概要	153
第2節 遺構と遺物	153
第3節 小結	156
第8章 平岩遺跡	161
第9章 考察	163
大野川下流域における水田開発の動向	
第10章 まとめ	213

挿 図 目 次

第1図	東九州自動車道と調査遺跡位置図	1
第2図	調査遺跡及び周辺遺跡分布図(大分市域)	5
第3図	調査遺跡及び周辺遺跡分布図(臼杵市域)	6
第4図	調査遺跡及び周辺遺跡分布図(津久見市域)	7
第5図	尾崎遺跡位置図	8
第6図	遺跡立地模式図	8
第7図	尾崎遺跡及び周辺遺跡分布図	9
第8図	調査区概要図	10
第9図	第1地区遺構配置図	11
第10図	第1号住居跡	12
第11図	第2号住居跡	13
第12図	土坑	13
第13図	第2地区遺構配置図	14
第14図	第3号住居跡	15
第15図	第4号住居跡	16
第16図	第5・6号住居跡	17
第17図	円形土坑	18
第18図	第3地区遺構配置図	18
第19図	第7号住居跡	19
第20図	土器焼成坑	20
第21図	第4地区遺構配置図	20
第22図	一字一石経碑	22
第23図	一字一石経埋納状況	23
第24図	尾崎遺跡出土遺物(1)	25
第25図	尾崎遺跡出土遺物(2)	26
第26図	尾崎遺跡出土遺物(3)	27
第27図	尾崎遺跡出土遺物(4)	29
第28図	尾崎遺跡出土遺物(5)	30
第29図	尾崎遺跡出土遺物(6)	31
第30図	尾崎遺跡出土遺物(7)	32
第31図	尾崎遺跡出土遺物(8)	32
第32図	尾崎遺跡出土石器(1)	33
第33図	尾崎遺跡出土石器(2)	34
第34図	尾崎遺跡出土石器(3)	35
第35図	清水遺跡位置図	40
第36図	清水遺跡周辺地形図	41
第37図	清水遺跡遺構分布図	42
第38図	遺跡内土層断面図	43
第39図	竪穴1・2実測図	78

第40図	竪穴3実測図	79
第41図	竪穴4実測図	80
第42図	竪穴5実測図	81
第43図	竪穴6実測図	82
第44図	竪穴7実測図	83
第45図	建物1・2実測図	84
第46図	甕棺実測図	85
第47図	土坑・焼土範囲実測図	85
第48図	西部水田域実測図	86
第49図	東部水田域実測図	87
第50図	竪穴1・2(1)出土遺物実測図	88
第51図	竪穴2(2)出土遺物実測図	89
第52図	竪穴2(3)・3出土遺物実測図	90
第53図	竪穴4(1)出土遺物実測図	91
第54図	竪穴4(2)・7(1)出土遺物実測図	92
第55図	竪穴7(2)出土遺物実測図	93
第56図	竪穴7(3)・建物1出土遺物実測図	94
第57図	小児甕棺	95
第58図	土坑1出土遺物実測図	96
第59図	土坑2・5(1)出土遺物実測図	97
第60図	土坑5(2)・水田跡出土遺物実測図	98
第61図	各地区(1)出土遺物実測図	99
第62図	各地区(2)出土遺物実測図	100
第63図	各地区(3)出土遺物実測図	101
第64図	新田遺跡位置図	102
第65図	新田遺跡及び周辺地形図	103
第66図	遺構実測図	104
第67図	遺跡周辺地形図	105
第68図	草標配置図及び変遷図	106
第69図	墓標実測図(1)	139
第70図	墓標実測図(2)	140
第71図	墓標実測図(3)	141
第72図	墓標実測図(4)	142
第73図	墓標実測図(5)	143
第74図	墓標実測図(6)	144
第75図	墓標実測図(7)	145
第76図	墓標実測図(8)	146
第77図	墓標実測図(9)	147
第78図	墓標実測図(10)	148
第79図	久木小野遺跡周辺地形図	154
第80図	久木小野遺跡出土縄文土器(1)	157
第81図	久木小野遺跡出土縄文土器(2)	158

第82図	久木小野遺跡出土縄文土器(3)	159
第83図	久木小野遺跡出土中世土器	159
第84図	久木小野遺跡出土石器	160
第85図	平岩遺跡周辺周辺図	161
第86図	平岩遺跡出土遺物実測図	161
第87図	遺構分布図	162
第88図	土坑実測図	162
第89図	地形分類図	175

第4章

fig. 1	第1・2トレンチの模式柱状図と分析試料採取層位	60
fig. 2	第1・2トレンチの層序対比	61
fig. 3	第2トレンチの主要珪藻化石群集	67
fig. 4	第2トレンチの主要花粉化石群集	69
fig. 5	第1トレンチの植物珪酸体群集	70
fig. 6	第2トレンチの植物珪酸体群集	71

第9章

図1	大野川下流域の低位段丘～沖積層の分布	164
図2	清水遺跡周辺の微地形	165
図3	清水遺跡の土層断面図	166
図4	1914(大正3)年測図の地図に示された大野川下流域の土地利用状況	171

表 目 次

第3章

表1	尾崎遺跡出土一字一石経 経字数	23
表2	尾崎遺跡出土礫石経(1)	36
表3	尾崎遺跡出土礫石経(2)	37
表4	尾崎遺跡出土礫石経(3)	38
表5	尾崎遺跡出土礫石経(4)	39

第4章

表1	珪藻の生態性	62
表2	第1・2トレンチの植物珪酸体分析	64
表3	第2トレンチの珪藻分析結果(1)(2)	65,66
表4	第2トレンチの花粉分析結果	68

第6章

川野遺跡墓標一覧表1	149
川野遺跡墓標一覧表2	150

川野遺跡墓標一覽表3	151
川野遺跡墓標一覽表4	152

写真目次

巻頭カラー 清水遺跡空中写真(南上方向から)

第4章

Phot. 1	珪藻化石	75
Phot. 2	花粉化石	76
Phot. 3	植物珪酸体	77

第9章

写真1	清水遺跡周辺の1961年撮影航空写真(約1/10000)	174
写真2	西部水田域と狭間川が乙津川に合流する地点に造る沖積低地(南から)	175
写真3	第1トレンチ(西部水田域)の西壁土層断面(東から)	176
写真4	第2トレンチp-v区西壁土層断面	177
写真5	第4トレンチ北壁土層断面	177

写真図版

図版1	尾崎遺跡全景 第1号住居跡 第2号住居跡
図版2	第3号住居跡 第4号住居跡 第5号住居跡
図版3	第7号住居跡 土坑 土器焼成坑遺物出土状況
図版4	土器焼成坑堆積状況 土器焼成坑完掘状況 第4地区
図版5	一字一石経石碑(調査前) 一字一石経石碑除去後 一字一石経基壇の状況
図版6	一字一石経出土状況 一字一石経土坑半截状況 一字一石経土坑完掘状況
図版7	尾崎遺跡出土碑石経(1) 尾崎遺跡出土碑石経(2) 尾崎遺跡出土碑石経(3)
図版8	尾崎遺跡出土碑石経(4)

- 「為」の各種字体
「尊」「皆」の各種字体
- 図版9 「仏」「何」「便」の各種字体
「作」「之」「子」の各種字体
- 図版10 尾崎遺跡出土遺物1
- 図版11 尾崎遺跡出土遺物2
- 図版12 清水遺跡西部水田域(南上方向から)(カラー)
清水遺跡西部水田域(西方向から)
- 図版13 清水遺跡東部水田跡第2トレンチ土層断面(南側)(東方向から)(カラー)
東部水田跡全景 疑似畦畔検出状況
東部水田跡第2トレンチ(北側)(東方向から)
- 図版14 竪穴1遺物出土状態(南方向から)
竪穴2遺物出土状態(南方向から)
竪穴1・2完掘状態(南方向から)
- 図版15 竪穴3遺物出土状態(北東方向から)
竪穴3カマド完掘状態(北東方向から)
竪穴4遺物出土状態(北西方向から)
- 図版16 竪穴4完掘状態(南東方向から)
竪穴5(西方向から)
竪穴7・建物2(東方向から)
- 図版17 建物1(南方向から)
小児カメ棺、焼土範囲(北方向から)
小児カメ棺
- 図版18 清水遺跡出土遺物(1)
- 図版19 清水遺跡出土遺物(2)
- 図版20 清水遺跡出土遺物(3)
- 図版21 清水遺跡出土遺物(4)
- 図版22 清水遺跡出土遺物(5)
- 図版23 清水遺跡出土遺物(6)
- 図版24 清水遺跡出土遺物(7)
- 図版25 清水遺跡出土遺物(8)
- 図版26 新田遺跡全景(西方向から)
溝1(北方向から)
溝2(西方向から)
- 図版27 川野遺跡全景(北方向から)
墓地全景(西方向から)
- 図版28 墓地北半部の墓標(南西方向から)
墓地南半部の墓標(北西方向から)
- 図版29 川野遺跡墓標(1)
- 図版30 川野遺跡墓標(2)
- 図版31 久木小野遺跡全景
久木小野遺跡全景

久木小野遺跡作業風景

図版32 平岩遺跡全景

土坑1(南方向から)

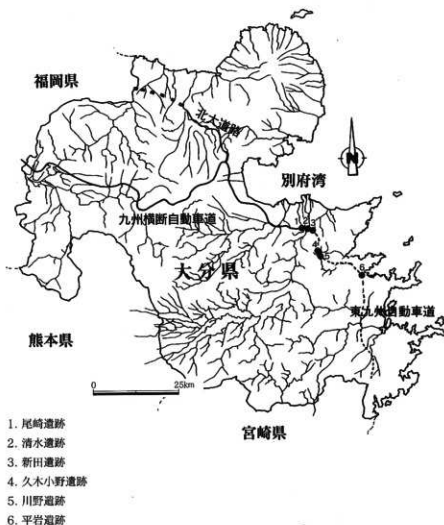
土坑2(南方向から)

付図 清水遺跡地形断面図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

東九州自動車道は、北九州市から大分を経由し宮崎県北郷までの全長約440kmにおよぶ九州東海岸を結ぶ高速自動車道として計画された。大分県内の路線としては、平成3年12月に米良（大分市）－津久見間27.5kmの整備計画が決定、平成5年11月に施工命令が出された。これを起因として路線内に所在する遺跡の分布調査を実施し、16箇所を調査した。その後の確認調査により明らかとなった本調査を必要とする10箇所について順次調査を進めてきた。今回報告する6遺跡は、平成7年度から平成10年度に本調査を実施したものである。平成7年度は大分市尾崎遺跡・清水遺跡の調査を開始し、年度内に終了した。平成8年度には大分市新田遺跡、津久見市平岩遺跡の調査を行い、平成9年度に臼杵市川野遺跡、平成10年度には久木小野遺跡の調査を実施した。



第1図 東九州自動車道と調査遺跡位置図

第2節 調査の組織

今回報告する遺跡調査の組織は以下のとおりである。

平成7年度

調査主体	大分県教育委員会
教育長	田中恒治
文化課長	末広利人
調査主任	渋谷忠章 (大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長)
調査員	小林昭彦 (大分県教育庁文化課主査) 小柳和宏 (大分県教育庁文化課主任)

平成8年度

調査主体	大分県教育委員会
教育長	田中恒治
文化課長	後藤一郎
調査主任	渋谷忠章 (大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長)
調査員	小林昭彦 (大分県教育庁文化課主査) 甲斐 猛 (大分県教育庁文化課主査) 横山明代 (大分県教育庁文化課嘱託)

平成9年度

調査主体	大分県教育委員会
教育長	田中恒治
文化課長	後藤一郎
調査主任	清水宗昭 (大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長)
調査員	坂本嘉弘 (大分県教育庁文化課副主幹) 小林昭彦 (大分県教育庁文化課主査) 甲斐 猛 (大分県教育庁文化課主査) 松本康弘 (大分県教育庁文化課主任) 衛藤麻衣 (大分県教育庁文化課嘱託) 野崎哲司 (大分県教育庁文化課嘱託) 横山明代 (大分県教育庁文化課嘱託)

平成10年度

調査主体	大分県教育委員会
教育長	田中恒治
文化課長	後藤一郎
調査主任	清水宗昭 (大分県教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第二係長)
調査員	栗田勝弘 (大分県教育庁文化課主幹) 永井 実 (大分県教育庁文化課主任) 上角智希 (大分県教育庁文化課嘱託) 豊田徹士 (大分県教育庁文化課嘱託) 野崎哲司 (大分県教育庁文化課嘱託)

第3節 調査の経過

平成7年度調査

調査は、平成7年6月から平成8年3月まで実施した。尾崎遺跡では弥生時代中期の円形住居跡貯蔵穴、古代の土師器焼成坑、近世から近代にかけて使用された溝、ピットなどが発見された。また江戸時代の一字一石経塚とそれに伴う経碑の調査を行った。清水遺跡では、弥生時代中～後期及び古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、水田跡などが発見された。このうち水田跡は調査区の東西2箇所を確認された。特に西部水田跡は土層断面と平面で確認できた小区画水田であり、注目された。

平成8年度

調査は、平成8年7月から平成9年3月まで実施した。平岩遺跡では14世紀～15世紀の土坑を発見した。新田遺跡では近世から現代に継続して営まれた水田と水路が確認された。

平成9年度

調査は平成9年の後半から平成10年3月まで川野遺跡について実施した。近世墓地において、18世紀初頭から19世紀末に造られた250基の墓標調査を行った。

平成10年度

久木小野遺跡は、平成10年6月から平成10年8月まで調査を行った。調査地区から縄文前期～後期にかけての土器、石器、中世の土器類、銭貨が出土した。

第2章 遺跡の立地と環境

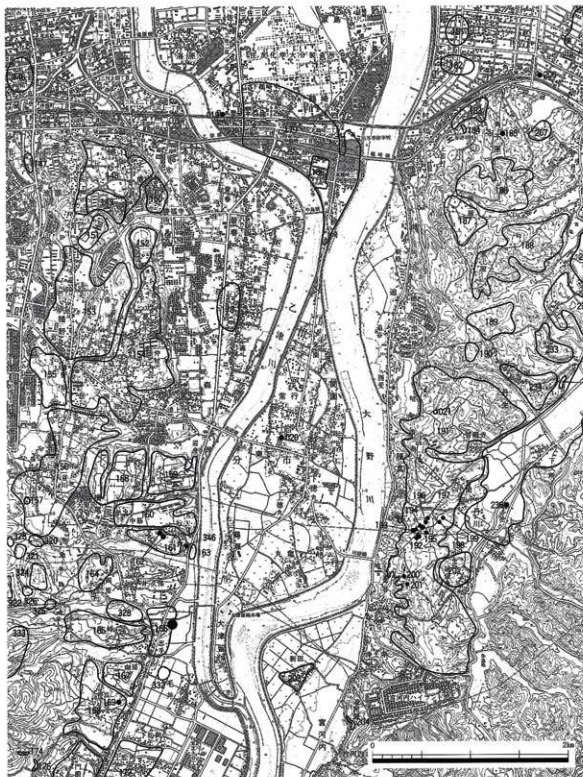
今回の調査地は大分、臼杵、津久見の各市におよぶため各地域ごとに概観する。

【大分市域】

尾崎遺跡・清水遺跡・新田遺跡が所在する大分市東部の大野川流域には大規模な台地が広がっており、左岸の台地を鶴崎台地、右岸を丹生台地と称している。城原面と呼ばれる地形面は丹生台地の城原を中心に分布する段丘面であり、40m前後の標高である。対岸の鶴崎台地では大野川沿いの横断面の東側に連続し、31m～39mの高度となる。尾崎遺跡はこの地形面に立地する。一方清水遺跡は大野川の下流域の沖積低地に立地している。この低地は「大野川デルタ」と称され、河川の分流が顕著であり、遺跡に近接する乙津川もそのことを示している。大野川の河谷全体の河道変遷は自然堤防の形成を促し、下流の高田輪中では特にその形成が顕著である。清水遺跡の内容はこのように自然地形をよく反映したものと見える。対岸となる大野川右岸の新田遺跡では東部の丘陵裾部に至るまで砂層・小礫を主体とする堆積がみられ、明確な遺構は少ない。

周辺の遺跡をみると、尾崎遺跡・清水遺跡が所在する鶴崎丘陵周辺に旧石器時代から近世におよぶ様々な遺跡が分布している。各時代にそって遺跡の分布を概観したい。まず旧石器時代では尾崎遺跡の北西0.5km～1kmの丘陵上に一方平Ⅰ～Ⅲなど6遺跡がある。スポーツ公園建設に伴い県教育委員会が主体となって調査を実施した。後期旧石器時代の豊富な流紋岩質石器に特徴がある。縄文時代では、一方平Ⅰ・Ⅱ遺跡などで早・前期、後期・晩期の土器、石器が発見されている。清水遺跡の北0.8kmには前期～後期に形成された横尾貝塚が位置する。平成13年5月、早期の建築部材が発見され注目を集めた横尾遺跡は、横尾貝塚の西側に近接する丘陵裾部付近に位置する。弥生時代の遺跡としては、一方平Ⅳ遺跡で前期の土器の出土が確認されている。鶴崎丘陵の北部では猪野中原遺跡、米竹遺跡、小銅鐸が出土した多武尾遺跡、銅矛が出土した二目川神社出土地などが位置する。南部では京ヶ尾銅矛出土地が知られている。古墳時代の遺跡としては、丘陵南部に顕著な分布が確認されている。小牧山古墳群では6基の墳丘が確認された。方形墳3基、円墳2基、前方後円墳1基が造られており、4世紀前半～末におよぶ連続的な造営は注目された。有田古墳群では円墳2基がある。1号墳は鉄剣や玉類が発見されており4世紀後半～5世紀初頭、2号墳は5世紀後半とされている。横穴墓では一の谷横穴墓群、一の谷横穴墓群が所在する。古墳時代の集落跡としては、北部の地蔵原遺跡を挙げることができる。住居跡が60軒以上確認されている。

古代の遺跡では官衙遺跡として、8世紀末～9世紀初頭の大規模掘立柱建物群や東西方向の道路遺構が発見された猪野新土井遺跡、古墳時代と8世紀末～9世紀代に形成された80棟以上の掘立柱建物群や道路遺構がみられる地蔵原遺跡が丘陵北部の平坦面に所在する。生産遺跡では、尾崎遺跡西部のやや急峻な頂部付近に松岡古窯跡群が位置し3基の須恵器窯跡が発見、調査された。井ノ久保遺跡A地区は尾崎遺跡の北東500mに位置し、東九州自動車道に伴い調査された。東に流れる狭間川の右岸に掘立柱建物跡と共に2基の9世紀前半とされる土師器焼成坑が発見された。尾崎遺跡・清水遺跡とは大野川を挟んで東部の右岸に位置する新田遺跡周辺では、丹生丘陵上に旧石器の研究史上著名な丹生遺跡群や野間古墳群が所在する。また丘陵の裾部付近には阿蘇入横穴墓群、大内古墳群なども知られている。しかし沖積地には新田遺跡以外の遺跡は現在のところ確認されていない。

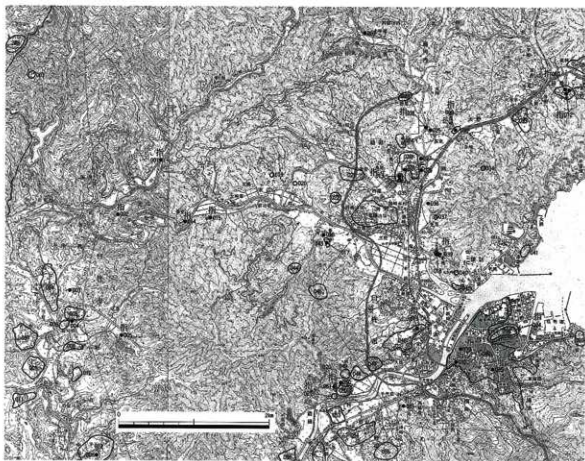


145	原町線有馬塚遺跡出土土層	158	徳成下堀遺跡	171	第1丸屋字出土土層	184	堀の腰穴遺跡	197	野間古堀6号溝	322	一方平屋遺跡
146	西北変遺跡	159	多美北西跡	172	ノ海蔵跡穴遺跡	185	下堀石塔	198	野間古堀7号溝	323	一方平尺遺跡
147	小島原瓦跡	160	新小北西遺跡	173	小島山古墳跡	186	南上ノ原北遺跡	199	野間古堀8号溝	324	丸堀遺跡
148	家竹遺跡	161	杉屋遺跡	174	一の谷堀穴遺跡	187	上ノ原北遺跡	200	野間古堀9号溝	325	数石の内遺跡
149	堀尻瓦遺跡	162	杉屋小堀	175	一の谷堀穴遺跡	188	南上ノ原遺跡	201	野間古堀10号溝	326	跡田遺跡
150	千原遺跡	163	藤原瓦屋	176	門前遺跡	189	岡遺跡	202	延命寺遺跡	328	舟ノ久保遺跡
151	塔崎遺跡	164	岡原遺跡	177	上松岡遺跡	190	清水辺平形堀出土層	203	新田遺跡	332	毛井遺跡
152	北の崎遺跡	165	松岡遺跡 (堀崎遺跡)	178	赤松寺遺跡	191	丹生遺跡			333	松岡古遺跡
153	渡野遺跡	166	清水遺跡	179	鶴崎町遺跡	192	野間古堀1号溝	233	丹波寺遺跡		
154	藤牛遺跡	167	内原遺跡	180	鶴崎跡茶屋跡	193	野間古堀2号溝	234	下堀跡		
155	藤原早遺跡	168	西宮遺跡	181	天満町茶屋跡	194	野間古堀3号溝				
156	二軒川遺跡	169	西宮石塔	182	下志村遺跡	195	野間古堀4号溝	330	一方平1遺跡		
157	二軒神社跡出土土層	170	松岡堀跡	183	工藤遺跡	196	野間古堀5号溝	321	一方平2遺跡		

第2図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図 (大分市域)

【臼杵市域】

川野遺跡、久木小野遺跡の所在する臼杵市は、大分県東部に位置し、その東に豊予海峡を望む。市の北部を占める佐賀関山地は400m～500mの高度をもち、佐賀関町との境となる樺ノ木山地から西南の大分市側に位置する九六位山まで続く。南部は鎮南山・姫岳など500m～650mの高度をもつ鎮南山地が広がる。この南北2つの山地に挟まれた間に河川が山地や台地を開析し、複雑な地形を形成している。このうち川野遺跡・久木小野遺跡は、臼杵湾から約7km東の中臼杵川の中流域に位置し、大分市との境に近い。周辺の遺跡をみると、同一の台地上に川野石塔群、縄文時代などの散布地として周知されている板川野遺跡、上臼杵川を挟んで対岸となる西の台地上には吉小野遺跡、井ノ上遺跡が位置する。また県指定文化財である久木小野マングラ石・王座石幢、市指定文化財川野石幢などが近隣に所在する。



周知の埋蔵文化財包蔵地

003	八天宮土塔	027	鎮野古墳	050	門前地下式墓穴
004	久木小野遺跡	028	丸山古墳	051	門前地下式墓穴
005	川野遺跡	029	岩崎古墳	052	門前寺遺跡
006	中野六石塔	030	五郎崎墓穴	053	神倉遺跡
007	中野寺遺跡	031	中野遺跡	054	野村台遺跡
008	板川野遺跡	032	平尾遺跡	055	野山遺跡
009	井ノ上遺跡	033	大野遺跡	056	東田台遺跡
010	久保遺跡	034	竜平山遺跡	057	新野遺跡
011	栗舟遺跡	035	日塚古墳	058	赤井遺跡
012	平三遺跡	036	柳下山古墳	059	藤原遺跡
013	正額遺跡	037	柳山遺跡	060	下平尾遺跡
014	正額遺跡	038	野中遺跡	061	臼杵古川野稲垣遺跡
015	正額遺跡	039	下石古墳	062	新井遺跡
016	伏見遺跡	040	廣田山遺跡	063	深田遺跡
017	小畑遺跡	041	岩崎山台遺跡	064	深田地下式墓穴
019	小沢沢ノ遺跡	042	堀部山遺跡	065	藤原寺遺跡
020	高小野遺跡	043	東山墓穴	066	臼杵川下野
021	藤原遺跡	044	赤土敷遺跡	067	野原野台遺跡
022	前平山遺跡	045	水ヶ崎遺跡	068	臼杵遺跡
023	藤原遺跡	046	戸家台遺跡	069	藤巻ヶ鼻台遺跡
024	堀部遺跡	047	赤坂遺跡		
025	長倉古墳	048	中平尾遺跡		
026	三原野遺跡	049	藤原寺遺跡		

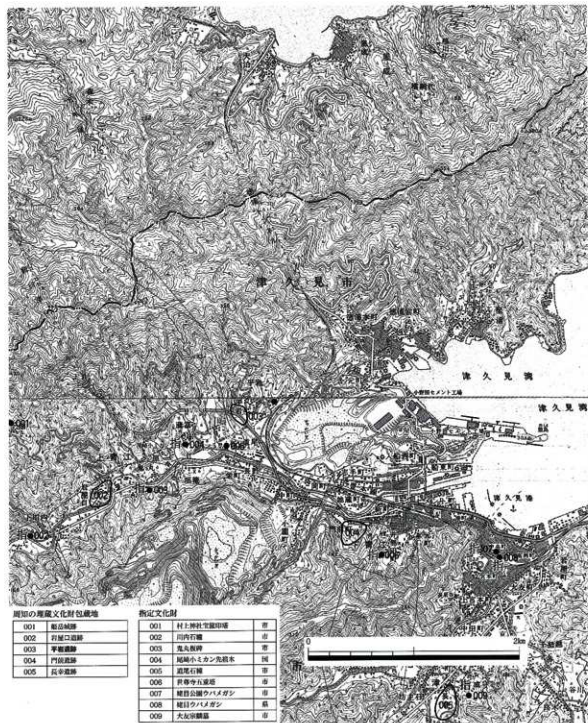
指定文化財

001	鎮の車輪	市	023	藤原寺リナンシキ	県
002	丸山三重石塔	市	024	岩田古墳	県
003	久木小野マングラ石	県	025	五輪石(之部)	県
004	川野石塔	市	026	白石石塔	市
005	王座石幢	県	027	白鳥五輪塔	県
006	平三石幢	市	028	藤原地下式墓穴	市
007	野井寺家屋跡	市	029	安藤古墳	市
008	長倉遺跡	市	030	高小野山遺跡	市
009	京東崎墓穴	市	031	堀山古墳群	県
010	平尾石幢(仏十王圖)	市	032	藤原寺	市
011	平尾石幢(阿弥陀)	市	033	台塚内古墳	市
012	石塔(一石五輪塔)	市	034	臼杵遺跡	市
013	日塚古墳	市	035	臼杵寺住宅	市
014	藤原寺家屋跡	市			
015	平尾寺	市			
016	丸山古墳	市			
017	赤土敷墓穴	市			
018	下石古墳	市			
019	一石五輪塔	市			
020	藤原地下式墓穴	市			
021	臼杵遺跡(北)	市			
022	藤原寺(北)	市			
023	藤原寺(南)	市			

第3図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図(臼杵市域)

【津久見市域】

津久見市は九州山地の北東端部、祖母・傾山から派生した丘陵が豊後水道に接する位置にある。市街地の北から西にかけて石灰岩が分布、胡麻柄山から西方一帯にカルスト地形が形成されている。海岸線はリアス式海岸で傾斜の急な山地が海に迫り、平野部は遺跡の所在する青江川流域、津久見川流域の他に堅浦、徳浦に小規模な平地がみられる程度である。集落などが形成される環境には乏しいといえよう。平岩遺跡は津久見湾に近い丘陵上にあり、かつて弥生後期の長頸壺が出土したことで知られている。周辺には南西1.5kmに古墳時代の岩屋口遺跡、南東1.5kmに弥生時代の包蔵地である門前遺跡が所在するが、現在知られている遺跡の分布は希薄である。



第4図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図（津久見市域）

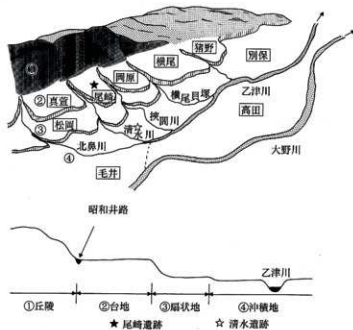
第3章 尾崎遺跡

第1節 遺跡の立地と概要

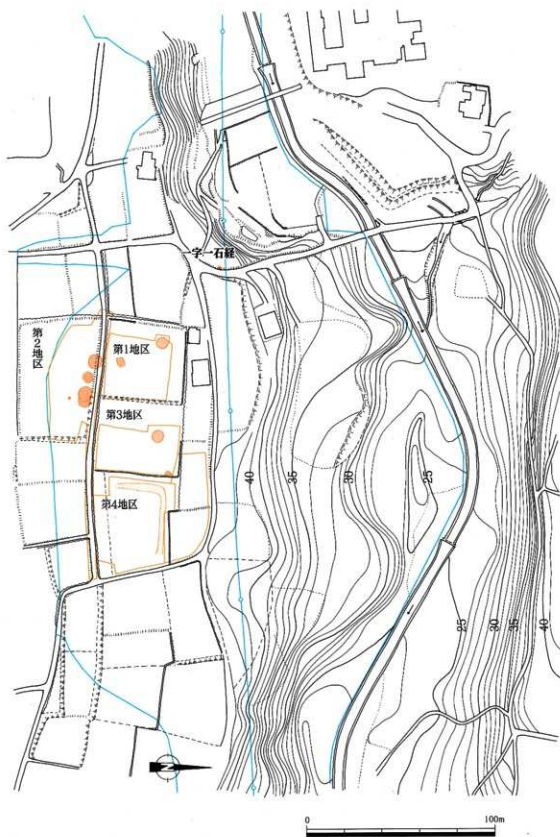
遺跡は大野川左岸の洪積台地上に位置する。標高は30mから40mである。台地は北を狭間川、南を清水川に挟まれ、東は松岡の丘陵によって画されている（第5図参照）。現在の尾崎の集落は比高差8mの一段下の扇状地（③）上に立地しており、台地上には数軒しか家がなく、大部分は水



第5図 尾崎遺跡位置図



第6図 遺跡立地模式図



第7図 尾崎遺跡及び周辺遺跡分布図

田および畑地となっている。ただし、水田化は山裾部を貫通する昭和井路（昭和29年完成）ができた以後であり、それ以前は畑地であったと考えられる。また、④の沖積地も昭和井路以前はごく狭小な水田が営まれていたのみであった。この点は第4章清水遺跡を参照されたい。

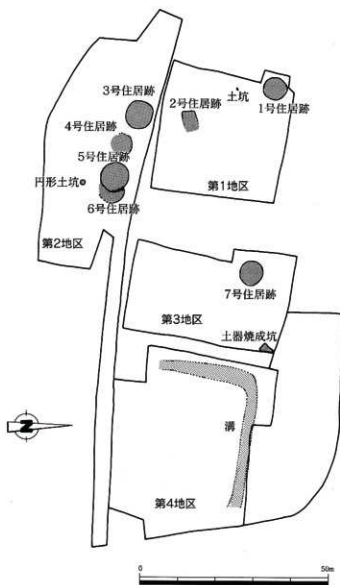
尾崎は江戸時代には行政単位として独立しておらず、真賀村に属しており、岡原以北の横尾村との接点であった。

調査は、工事によって影響の及ぼされる約5千万平米を対象に行った。そのうち、本調査は試掘調査によって遺構が確認された4調査区（第8図参照）において実施した。各調査区の詳細については第2節で触れるが、時代を追って概略を記すと、まず旧石器時代の遺物が第4地区で表採されている。すでに削平を受けており、包含層は確認できなかった。次いで縄文時代は若干の石器を除いては遺物もまとめて検出されず、遺構はまったく検出されなかった。弥生時代になると、台地上の中央部に近い第1から第3地区で中期の集落が確認された。弥生時代後期から古墳時代にかけては全く遺物・遺構とも検出されなかった。

古代は第3地区で土器の焼成坑が検出された。この土器焼成坑は狭間川が扇状地に開析する狭小な谷底平野でも見つかっており（井ノ久保遺跡）、それらとの関係が注目されるが、台地上では土器焼成坑以外の明確な遺構は確認できなかった。

中世の遺物は若干出土したが、遺構は検出されなかった。近世になると第4区でL字状に延びる溝が確認され、さらに台地北西端で一字一石経が埋納されているのが確認された。近世になって台地上の利用が進んだことが考えられる。

このように、尾崎遺跡のある台地上の開発は、弥生時代と近世という2時期に大きな画期が認められた。



第8図 調査区概要図

第2節 遺構

(1) 第1地区

この第1地区からは円形住居跡1基、方形住居跡1基、土坑1基が検出された。それ以外にもピットが確認され、そのうちの1つから下城式土器の甕が出土している。

また調査区は水田によって東側半分が削平されており、方形住居跡も削られている。

第1号住居跡

直径約6mの不整円形で、残存する深さは10㍍。柱穴は6カ所確認されたが、いずれも主柱穴をなすものではない。また、北西部からは床面に焼土があるのが確認された。

遺物は、多くが小破片で図示できるものではないが、第24図1と2の甕底部が復元できた。いずれも弥生時代中期のものである。

他の小破片も弥生時代中期を下るものではなく、住居跡の時期は弥生時代中期と考えられる。

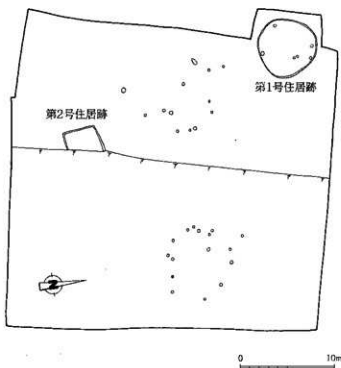
第2号住居跡

南北3.5mで東西は3m以上の方形の住居跡で、東側は水田の段差によって削られている。残存する深さは20㍍である。この住居跡には床面に木炭の入った焼土が広がっており、火災を受けたことが想定できる。柱穴は全く確認されなかった。

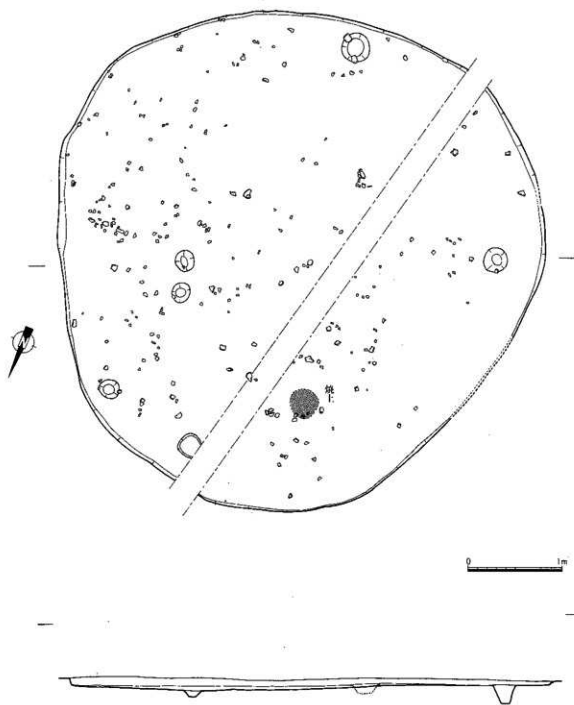
遺物は、小破片ばかりで、唯一第24図3の甕底部のみ図示できた。弥生時代中期のものである。他の小破片も弥生時代中期を下るものではなく、この住居跡の時期も弥生時代中期と考えられる。

土坑

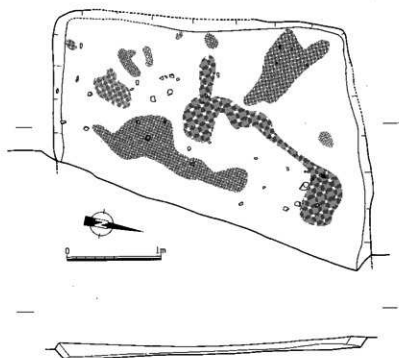
長径1.4m、短径1m、残存する深さ20㍍の岡丸の長方形である。内部からは第24図4、5の土器が出土している。同一個体と思われ、本来小児甕館を埋納していたものが、上部の削平により破片となった可能性が考えられる。



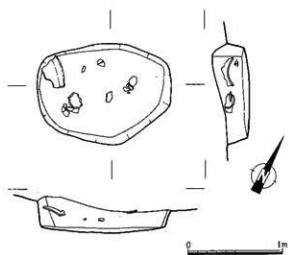
第9図 第1地区遺構配置図



第10图 第1号住居跡



第11図 第2号住居跡



第12図 土坑

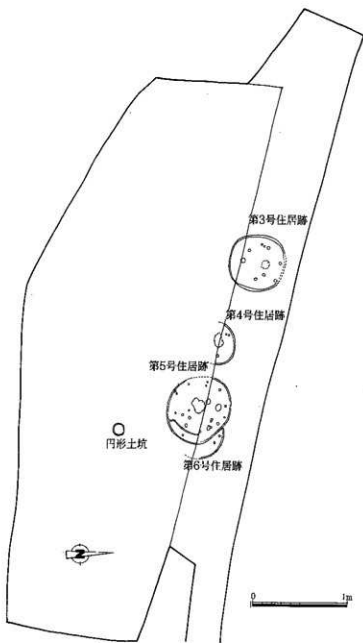
(2) 第2地区

この地区は平成8年度（調査区南側水田部分）と9年度（調査区北側道路部分）の2カ年にわたって調査を行った地区である。水田部分は道路下に比べ削平を大きく受けており、遺構の残り具合も良くない。この地区では、円形住居跡4基と円形土坑1基が検出されている。

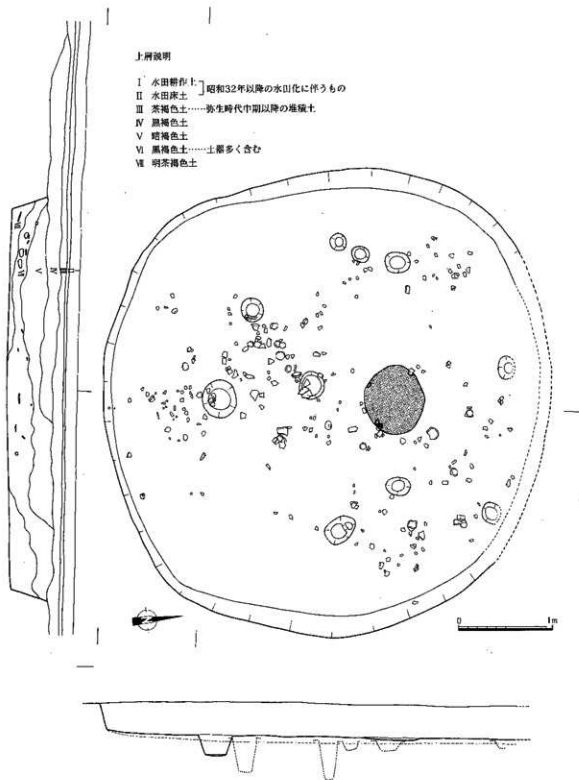
第3号住居跡

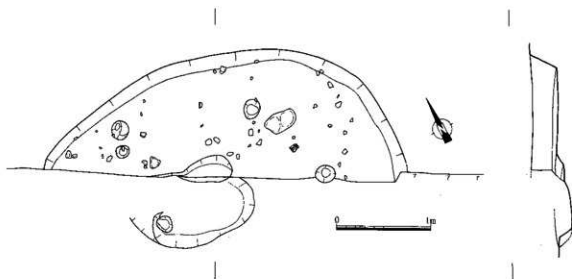
直径約6mの円形住居跡で、残存する深さは約50cmである。柱穴は10カ所確認されているが、明確に主柱穴をなすものは認められない。中央やや北側で床面が焼土化した部分が確認されたことからここが炉跡と考えられる。

遺物は、床面よりやや浮いた状態で比較的多くに出土している。第24図6から第27図55まで図示している。器種は壺、甕、高杯で、それぞれ在地系統と外米系統の土器が混在する状況を呈して



第13図 第2地区遺構配置図





第15図 第4号住居跡

いる。いずれも弥生時代中期中頃から後半のものであり、住居跡の時期も同時期に比定できる。

第4号住居跡

水田部分では完全に削平を受け、ごく一部が道路下部分で残存していた。楕円形を呈する可能性があるが全体の形状は不明である。残存する深さは約30㎝である。支柱穴は不明である。

遺物は小破片のみで図示できるものはない。

第5号住居跡

東側にベッド状施設を持つ不整形の住居跡で、長軸は7.5m、短軸は6.5mである。残存する深さは、よく残っているところで30㎝ほどである。

中央には炉跡があるが、その部分が大きく攪乱を受けており、旧状は不明であるが、約30㎝の掘り込みを伴うものである。ベッド状の施設は、壁に沿って幅80㎝、高さ15㎝で弓状に回るが、北側は丁度未調査部分があり、全体の長さは不明である。柱穴は壁に沿って巡る10カ所がこの住居跡に伴うものである。また、南側から住居跡廃絶後に焼土が流れ込んでいる。

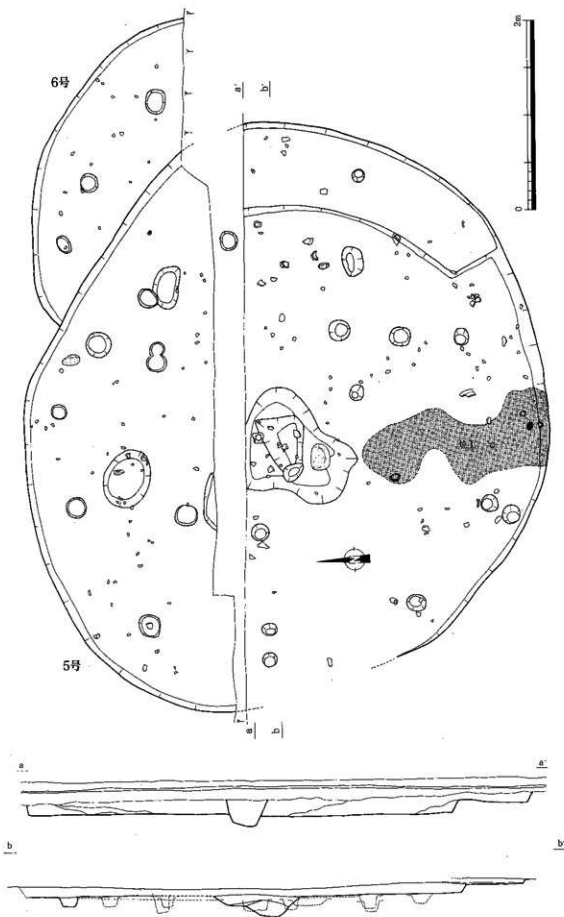
遺物は少ないが、第28図56から63に図示している。弥生時代中期中頃から後半のものである。

第6号住居跡

第5号住居跡によって壊されており、さらに水田の開削によって大部分が削平されていることから、全体の形状は不明である。柱穴は3カ所確認できたが、この住居跡に伴うものであるかどうかは判断できなかった。遺物も小破片のみで図示できるものはない。

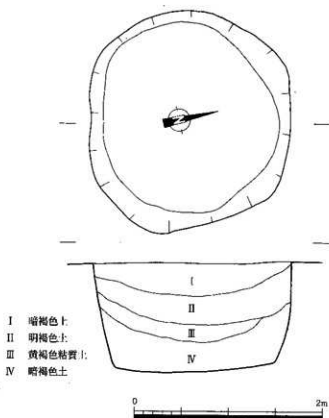
円形土坑

第5、6号住居跡の南側に位置する。直径1.2mで深さ60㎝のはば円形で、土層は4層認められる。本来は、フラスコ状を呈する袋状貯蔵穴であったと考えられるが、上部の削平で当初の形状は不明である。



第16図 第5・6号住居跡

出土遺物は、図示できるものは
1点(第28図64)で、弥生時代
中期後半の壺の口縁部である。



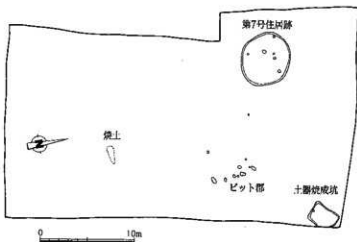
第17図 円形土坑

(3) 第3地区

円形住居跡1基と方形の土器焼成坑がある。東側と北側は近代の水田化に伴い低い段差が生じており、土器焼成坑も一部削平を受けていた。

第7号住居跡

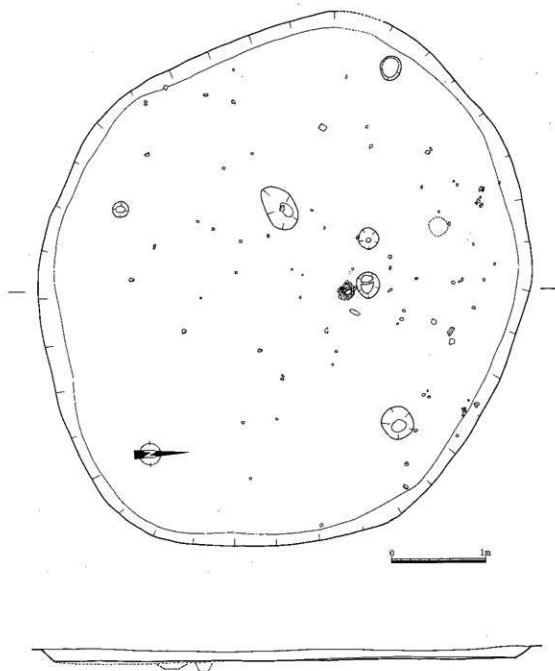
6.8m×6mの不正円形の竪穴で、柱穴は6箇所で見つかったが、主柱穴を構成するものとは考えがたい。焼土が北西隅部で検出されたが、広がりや位置から炉とは考えがたい。遺物は覆土から出上しているが、図示できる個体は高坏(第28図65)のみである。



土器焼成坑

本調査で検出された唯一の古代

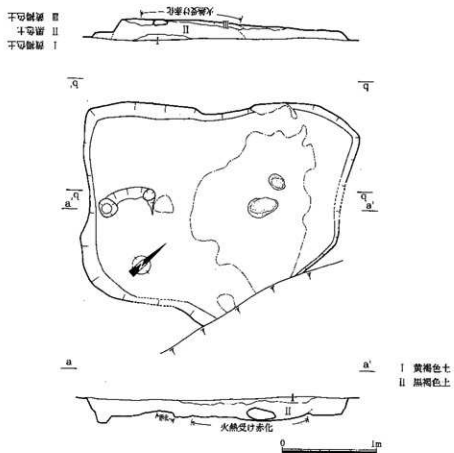
第18図 第3地区遺構配置図



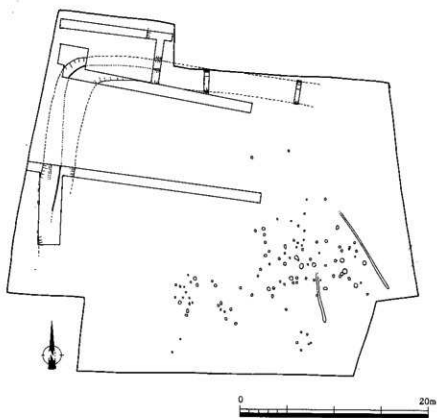
第19図 第7号住居跡

の遺構である。3位×2.5位の長方形で、現存する深さは20%である。床面は一点鎖線の範囲がやや皿状に焼けており、壁に向かって立ち上がっている状況が窺える点から考えて、本来の土器焼成坑は現状で窺える長方形ではなく、被熱で焼土化した範囲を囲む円形に近い形に復元できる可能性が高い。

遺物は、長方形の掘り込みの全体からまんべんなく出土しており、不良品等を廃棄する段階ですでに長方形の掘り込みは形成されていた。製品を取り出す段階で拡張されたものである可能性もあるだろう。



第20图 土器焼成坑



第21图 第4地区遺構配置図

(4) 第4地区

調査区北側と西側で、幅3~4位、深さ50字ほどの溝がL字状に曲がって延びているのが確認された。溝は、一部川原石積み石垣(石列)で土留めされているなど、複数回の改修が窺える。しかし、全体の形状は不明である。内部からは近世陶磁器の小破片や寛永通宝が出土しており、近世の所産である。

この溝で囲まれた内部については、柱穴や小さな直線的な溝は検出されたが、建物跡などは存在しなかった。よって、この区画の性格については不明であるが、屋敷等を考えるよりも、畑地を害獣から守る施設と考えた方が良いのかもしれない。

(5) 一字一石経塚

尾崎台地の北西の隅にある一字一石経塚。調査に入る前は、1.5位四方で、高さ40字の石積み基壇上には老穴を穿った60字角の台石を据え、その上にほぞを持った経碑を立てていた。経碑の正面には「大乘妙典一字一石」、右側側面には「文政二卯三月日」、左側側面には「万人講願主首座ヲサキオエミ世話人清藏」と刻字していた。また、正面上部には観音像と思われる仏像を浮き彫りしている。石材は凝灰岩である。

基壇は概ね川原石を2段に積み上げた上に、内部に川原石を敷いているが、台石を除去した中央部は皿状に窪んでいた。その中に、第22図で黒く塗りつぶしたように礫石経が10点出土した。そのため、この一字一石経塚は、調査当初は多量の礫石経を伴わず、一部の経文で代表させたものかと考えられたが、基壇の石を除去すると第22図の基礎石と思われる石列と、内部に礫石経を充填させた土坑が出土した。

第22図でわかるように上部の基壇と下部の石列、および礫石経の充填された土坑は位置がずれており、3時期の変遷が考えられる。特に土坑については、第23図のように一度の掘り返しが認められ、1回目の埋納→2回目の埋納→それに伴う下部の石列(基壇)→現存経塚の築造、という流れを想定できる。現存経塚の築造に際しては、以前の埋納坑から概わずかの礫石経を拾い上げ、経碑下部に埋置したものと考えられる。

つまり、経碑の示す年号が1回目の埋納に伴うものであるかどうかは決定し得ないが、少なくとも、2回目の埋納には立てられたと考えられる。そして、最終的な姿に移築されたものであろう。

下部の土坑から出土した礫は合計79,214個であり、その内36,423個に文字の痕跡が認められた。その割合は46%にのぼる。墨書の認められた36,423個の内、文字種まで判明できたのが9,125個であることを考えると、本来全ての礫に墨書があったと考えると良いのかもしれない。

文字種の判明したものの文字種数は950であった。最も数が多かったのは「仏」で出現率は2.6%、次いで「是」で2.2%、「諸」の2.1%となる。その他「衆」、「生」、「所」、「人」、「無」、「得」、「於」、「説」、「法」、「我」などが1%程度で続いている。その出現率を法華経の字種の出現率と比較したのが表1である。尾崎遺跡の一字一石経の方が1.5倍ほどの出現率があるが、これは字種の判別の際、多量にある字種の方が少数しかない字種より字種の判定をし易いということに原因があると考えられ、概ね減少曲線の相似は有意なものと判断できる。つまり、尾崎遺跡の一字一石経は「法華経」の8巻全てを記したものであったと判断できるのである。

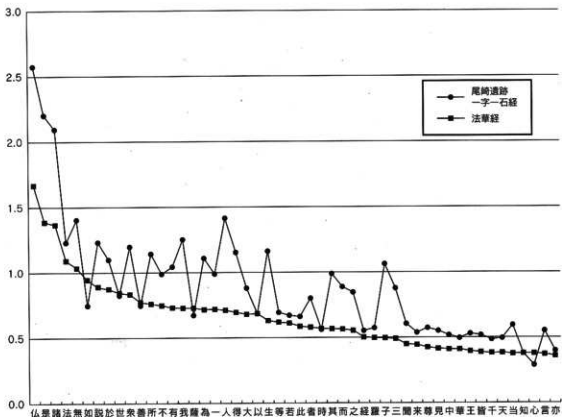
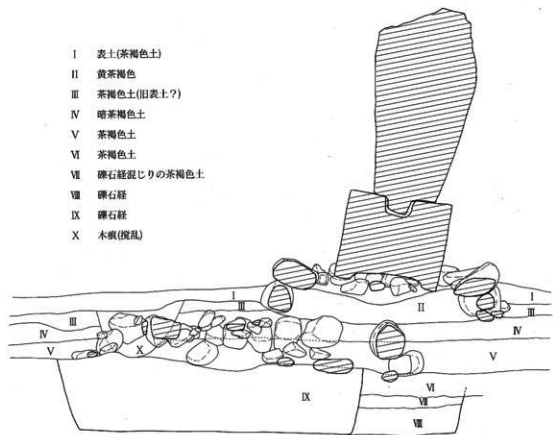


表1 尾崎遺跡出土一字一石経 経字数



第23図 一字一石経埋納状況

第3節 出土遺物

弥生土器

1、2は1号住居跡出土の甕底部。1は外面の調整は不明であるが、2は外面ハケ調整。いずれも弥生時代中期。3は2号住居跡出土の甕底部。外面は磨滅のため調整不明。4、5は土坑出土の甕。同一個体と思われる。口縁端部をつまみ上げるもので、胴部はあまり張らない。

6から53は第3号住居跡出土。6は須玖系の壺。7、8は頸部に一条の突帯を巡らせる壺。9、10、12も同形態の壺と思われる。11は鋤先状の口縁部をなし、上面に浮文を付すもので、外面には刻みを入れる。13から15は壺の底部。16から21は高坏、または脚付きの鉢。18は3箇所に透かしの入る長脚の高坏。22から30は下城式土器。22は胴部中位に二条の刻み目突帯を持つ珍しいタイプ。23、24は突帯と口唇部に刻みを入れる。25から29は一条の刻み目突帯を巡らせる。口縁部は29が外反するが、他は概ね直口である。30は二条の刻み目突帯を巡らせるもの。いずれも内外面ともハケ調整。31から36は口縁端部を上方につまみ上げる、いわゆる跳ね上がり口縁の甕。いずれも胴部の張りは小さい。

37から41は内湾する口縁部の端部を小さく外方に突出させるもので、基本的に外面はナデ、内面は一部ハケ調整があるものの基本的にナデ調整である。42から52は甕底部。45、46、48などのハケ調整を持つものは下城式土器、47や49など一度強くくびれるものは跳ね上がり口縁の甕になろう。53から55は住居跡埋土上面からの出土で、54は底部糸切りである。55は把手。いずれも古代のものである。

56から63は第5号住居跡出土の遺物。56は胴部上位に突帯を巡らせる。57は壺の底部。58は下城式土器、59は口縁端部を強くつまみ上げる甕。60から63は甕底部。64は円形土坑出土。壺の口縁部で、外面に一条のヘラ描き波状文を施す。65は第7号住居跡出土の高坏。内外面ともハケ調整。66、67は第1区ビット出土のもので、同一個体と思われる下城式土器。

古代の土器

68から98は土器焼成坑からの出土。68は小型の壺。外面ハケ、内面ナデ調整。砂粒、角閃石多い。69から74は鉢。69は深めの鉢で、外面下半はヘラケズリ、内面ナデ。口縁部を若干つまみ上げる。70から74は浅めの鉢。72は口縁部が直線的に伸びる。75は壺?の底部。底部付近はヘラケズリ。76は高台付きの皿。高台部は剥離している。外面ヨコナデ。77から80は蓋。天井部は回転ヘラ切り。外面ヨコナデ、内面は不定方向ナデ。いずれも胎土に砂粒を多く含み、橙色を呈する。81から86は皿。いずれも底部ヘラ切り。外面ヨコナデ。内面は84と85はヘラミガキ。胎土に砂粒多いが、83は精選されている。色調はいずれも橙色を呈する。

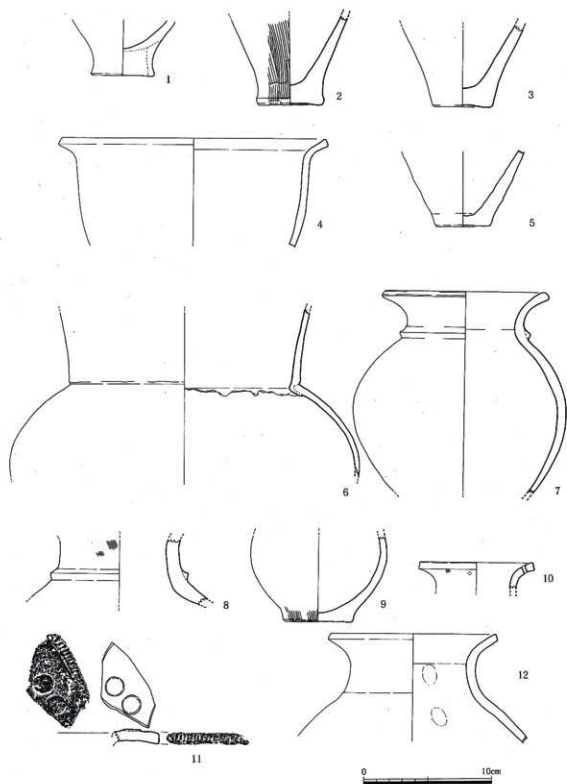
87から95は坏。いずれも底部ヘラケズリ。外面は、87のみヘラミガキを施す。他はヨコナデ。いずれも砂粒を多く含み、橙色から黄褐色を呈する。96から98は高台付きの碗。96は内外面にヘラミガキ、97は内面にヘラミガキが見られる。98はヨコナデ調整。

その他の遺物

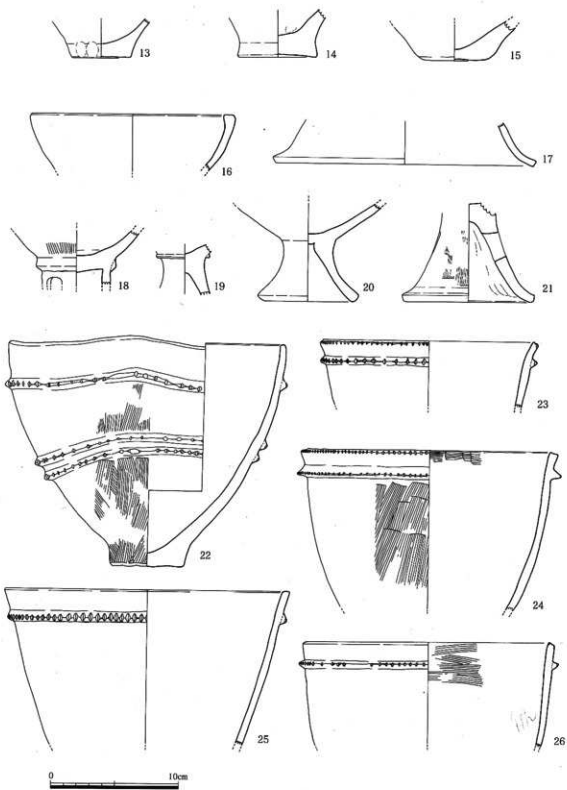
ここでは本来の遺構から遊離した遺物を報告する。遺物は旧石器時代から縄文時代・弥生時代にかけての遺物が含まれていると考えられるが、明解な区分のできないものがある。

縦長剥片

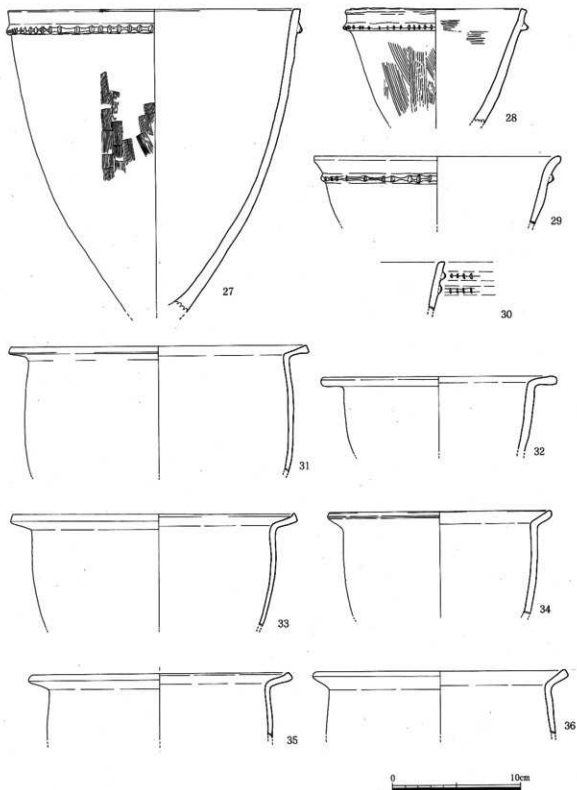
長さ7.4cm、幅3.2cm、厚さ2.1cm、重さ46.1g、の規模を有する例である(第33図110)。打面は数面の剥離痕からなり、若干の起伏がある。表面側は石核時の側面方向からの大きな剥離痕と、本例と打面が同一と考えられる上方からの剥離痕がある。末端部ほど厚くなる状況がある。裏面の



第24回 尾崎遺跡出土遺物 (1)



第25図 尾崎遺跡出土遺物 (2)



第26回 尾崎遺跡出土遺物 (3)

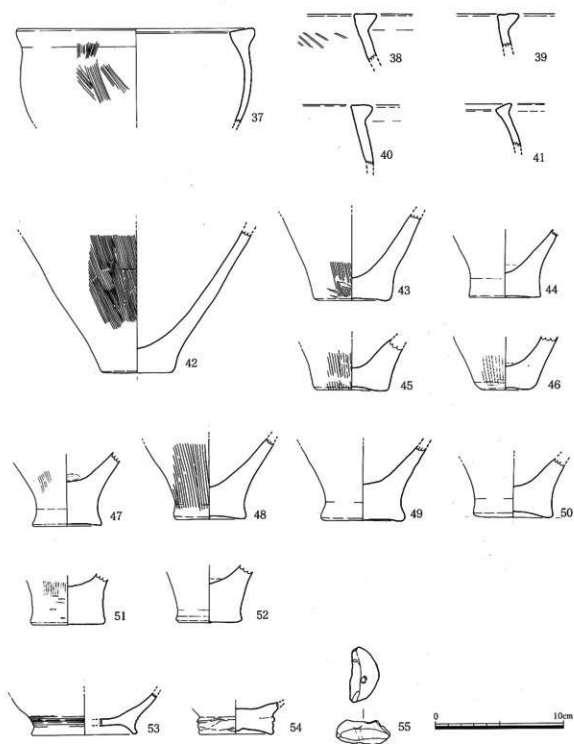
上端には、幅0.6cmのコーン（円錐体）が観察される。おそらく大きな石による打撃であろう。上端近くと下端近くの打面形を比較するとねじれが観察される。石材は流紋岩を用いている。

石核

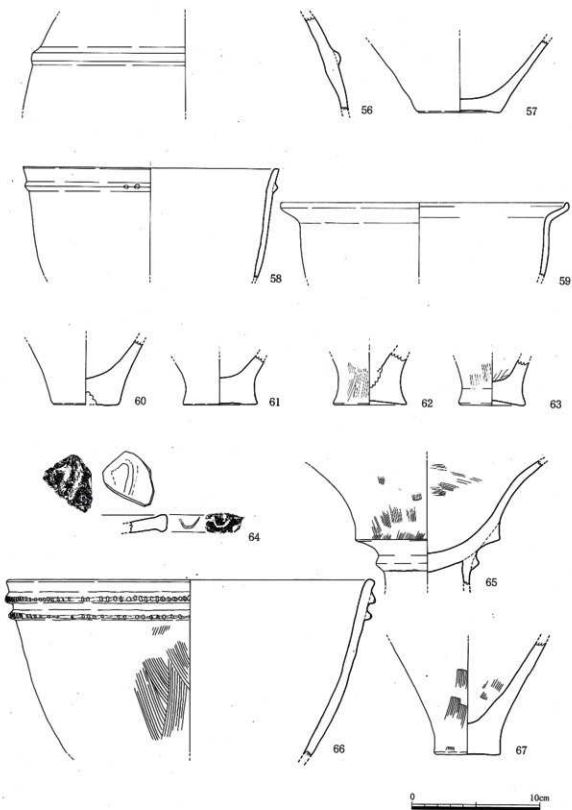
石核は三点あり、二種類に区分される。一つは上下両端に打面を有し、正面上から下方向への剥離痕と、裏面下から上方向への剥離痕を有する例である（第33図111）。高さ9.0cm、幅7.7cm、厚さ4.2cm、重さ289.1g、の規模を有する。正面側の剥離痕が概ね古い剥離痕で、後に打面を下端に設定し、裏面の下方向から上方へ向う剥離痕が残る。裏面の半分は礫面であることから剥離された剥片にも大きく礫面が取り込まれたことが判る。剥離痕からみて、剥離された剥片は整ったものではなかったようだ。二つ目は楕円礫の上端に打面を作出し、ここから下へ剥離作業を行った例である。この為には下端部付近と、裏面に礫面が大きく遺存している。このような特徴を持った石核は、大小二点ある。大きい例は、高さ7.7cm、幅5.7cm、奥行き3.9cm、重さ181.4g、の規模を有し（第33図112）、小さい例は、高さ5.7cm、幅5.8cm、奥行き4.6cm、重さ160.0g、の規模を有する（第33図113）。

石斧

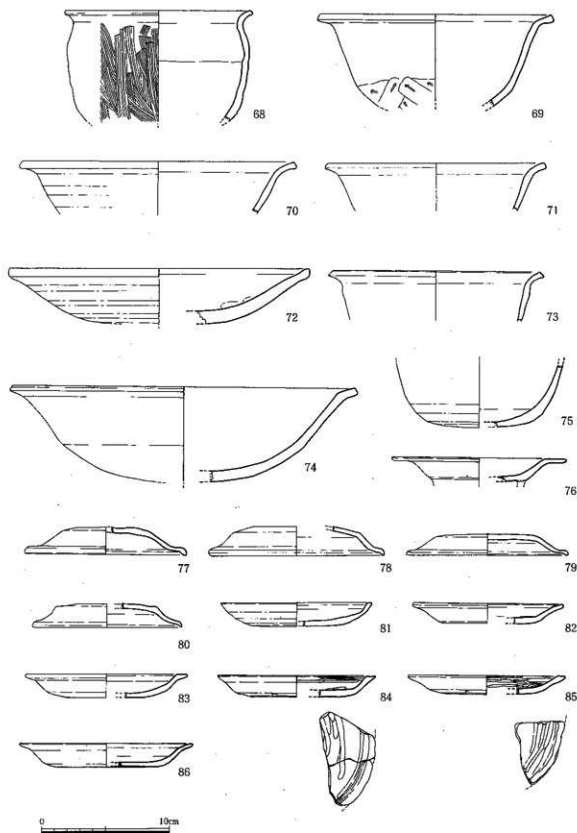
石斧は三点と一点の未成品からなる。一例は形態が均整のとれた小型品で、刃部が蛤刃の例である（第33図114）。長さ11.9cm、幅4.4cm、厚さ2.6cm、重さ212.2g、の規模を有する。玄武岩を石材に用いている。身の中心部のやや刃部よりの部分を挟んで上が敲打と若干の研磨、下が敲打後の研磨で整形されている。二例目も形態が均整のとれた小型品であるが刃部を僅かに欠く（第33図115）。押回の向かって左側の面の下方には鑄を形成している。側面から見るとこの部分の角度が急であることから後主面、もしくは右主面ということになる。概ね斜め方向の研磨によって調整しているが、後主面側が僅かに厚みを持った凸レンズ状の断面となっている。しかし両側縁の一部には表裏両面に対して急角度の面が遺存しており、擦切り技法による分割の痕跡と推定できる。石材は軟質で研磨のしやすい蛇紋岩を用いている。なお、上端部も側面から観察すると刃部のような鋭い縁が形成されており、リダクション、あるいは双刃石斧の可能性はあるのだろうか。長さ9.7cm、幅4.7cm、厚さ1.4cm、重さ92.8g、の規模を有する。以上、全体的な特徴から縄文時代後期の作と見られる。三例目は小型品で、刃部が蛤刃の例である（第33図114）。長さ12.4cm、幅4.9cm、厚さ3.2cm、重さ229.1g、の規模を有する。玄武岩を石材に用いている。c面側は長い間地表面上の上を向いていたのかかなり風化が進んでいる。この為に玄武岩内の硬い粒子部分が浮き出た状況となっている。石材の質としては良質とは言えない例である。整形は上端部側面に僅かに敲打痕が観察されることから、敲打によって整形している。その後研磨の調整を経たであろう。更に柄に装着しやすくするためか、a・cの両面に涉って剥離を部分的に行い、器体に凹凸とうねりを持たせている。この作業によって柄に装着した際の向きを考慮にいらしたのであろう。ただし基部・上端の両面に見られる剥離痕は両側縁にほぼ直交する階段状の剥離痕であり、その意図ははっきりしないが破損による再成形であろうか。四例目は大型の磨製石斧の未製品である（第34図117）。長さ13.7cm、幅7.6cm、厚さ4.0cm、重さ484.4g、の規模を有する。玄武岩を石材に用いている。ほぼ全面に敲打痕が観察されるが、a面の一部に素材獲得時の際の剥離痕、もしくは礫面と考えられる平坦面が残っている。これは平坦な面での他の部分より低い位置にあった為と考えられ、その為か周囲を敲打している。分厚い為か素材を作るのに擦切り技法は使われていない。玄武岩を石材としたこの未製品は、破損によって石斧として完成することはなかった。破損部は風化が新しいようにも見えるが、同じ面に古い色をした部分もあるので、基本的には製作途上の破損と見たい。弥生時代の大型蛤刃石斧の製作途上品であろう。



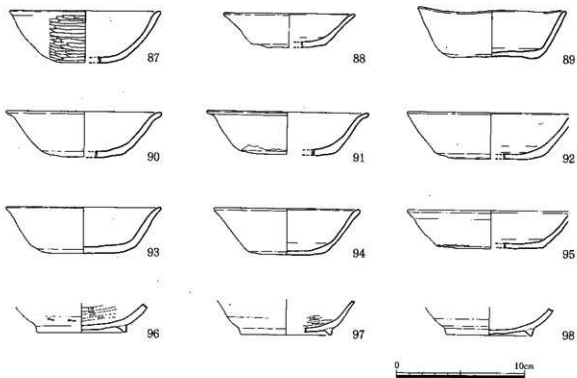
第27図 尾崎遺跡出土遺物 (4)



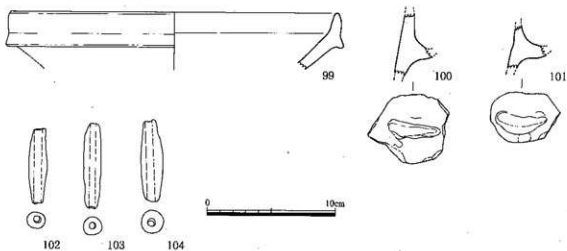
第28図 尾崎遺跡出土遺物 (5)



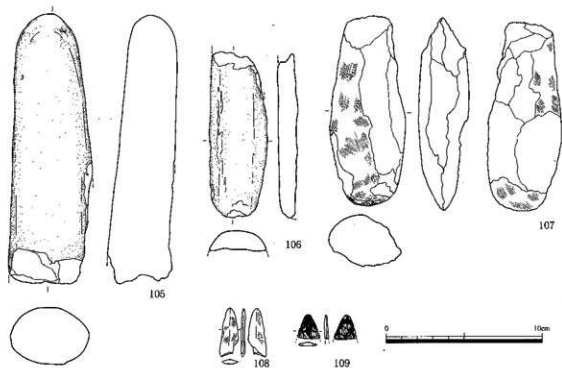
第29図 尾崎遺跡出土遺物 (6)



第30図 尾崎遺跡出土遺物 (7)



第31図 尾崎遺跡出土遺物 (8)



第32図 尾崎遺跡出土石器(1)

扁平打製石斧

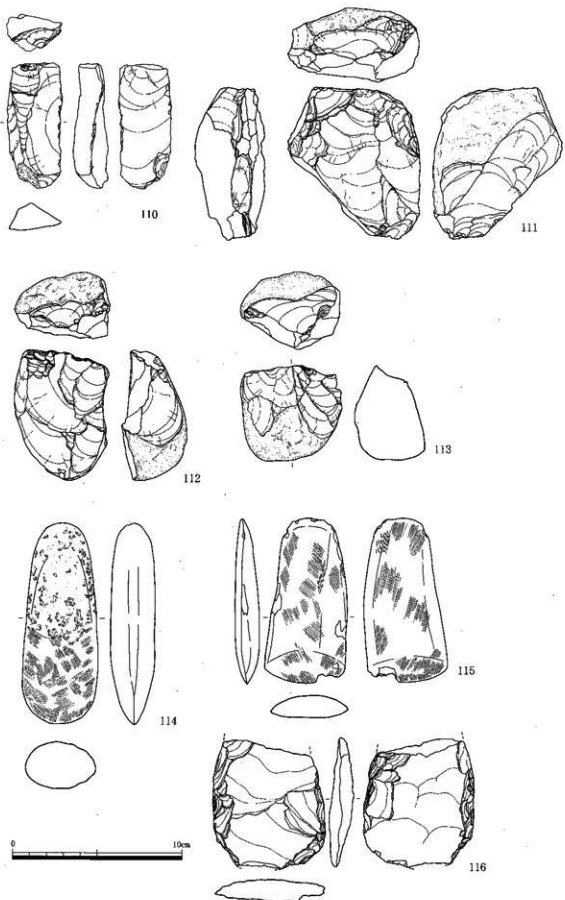
扁平打製石斧は一例のみである。節理の多い結晶片岩を石材とし、横広大型の剥片を素材としている(第33図116)。奥行きのない剥離作業を表裏全面に施すことで整形する。身の上部が破損しているが、残った部分の形から製作当初は楕形であったと思われる。長さ7.7cm、幅6.6cm、厚さ1.3cm、重さ90.8g、の規模を有する。扁平打製石斧は縄文時代後期・晩期に盛んに製作されたもので、本例もこれにもれないであろう。

石棒・その他の石製品

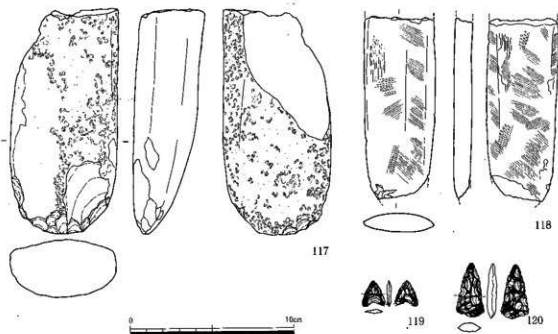
いずれも結晶片岩を石材とするもので、三例を図示する。一例は断面が分厚い楕円形になるように棒状に研磨加工している(第32図105)。長さ12.3cm、幅5.1cm、厚さ4.1cm、重さ486.9g、の規模を有する。折損している。二例目は棒状研磨加工後、縦方向に破損したことによって断面が半円形となっている(第32図106)。したがって剖面以外の面は全面研磨が残っている。その後、剖面の半分近くを研磨しており、下端部の平面形が半円形となっている。長さ10.6cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm、重さ63.9g、の規模を有する。三例目(第34図118)は石剣状に薄い凸レンズ状研磨加工をしている。上端・下端が折れているが、下端部は比較的近年の折れである。下端部付近の輪郭線から、下端部は半円形～尖塔アーチ形となっていたことが推定される。長さ11.1cm、幅4.5cm、厚さ1.1cm、重さ94.5g、の規模を有する。以上の例は縄文時代後期・晩期の作と考えたい。この他、図示はしていないが、長さ12.2cm、幅4.0cm、厚さ0.75cm、重さ63.9g、の規模を有する板状に研磨した石製品がある。この例の上部付近に両面から粗く穿孔した痕跡の残った例がある。弥生時代の石包丁の未製品であろうか。大きく破損した例でもあり、割愛した。

石鏃

石鏃は四例ある。一例は結晶片岩の磨製石鏃で、弥生時代の作である(第32図108)。長さ3.1cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.3g、の規模を有する。二例目は姫島産黒曜石を石材とする打製石鏃で、欠損しており製作時期は不明(第32図109)。長さ1.6cm、幅1.5cm、厚さ



第33图 尾崎遺跡出土石器(2)



第34図 尾崎遺跡出土石器 (3)

0.25cm、重さ0.5g、の規模を有する。三例目は金山産サスカイトを石材とする打製石鏃で、浅い抉りがある(第34図119)。長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4g、の規模を有する。製作時期は不明。四例目は姫島産黒曜石を石材とする打製石鏃で、抉りはない(第34図120)。長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.55cm、重さ2.8g、の規模を有する。製作時期は不明。

第4節 小結

尾崎遺跡は、弥生時代中期の台地上の集落の様相と、古代律令時代の土器作りのあり方、そして江戸時代のムラ境のあり方といった主に3点について資料を得ることができた。

まず、第1点目については、この地域において清水遺跡(第4章参照)や毛井遺跡などの様相を考えると、弥生時代中期後半まで台地上で集落を営んでいたものが、中期末から沖積地に展開するようになる。土器様相も、後期に豊後の主流となるいわゆる安国寺式土器の祖形が出現を始める時期であり、ここに大きな画期が存在した可能性が高い。おそらく沖積地の安定化など、自然的要因が大きいと考えられる。

2点目は、隣接する井ノ久保遺跡などで多くの土器焼成坑が検出されていることから、この地域の特殊性が浮かび上がってきている。尾崎遺跡においては、他に同時期の遺構は出土しなかったので、集落との関係など全体の中での位置づけについては不明であるが、いずれにしても大野川下流域左岸一帯での技術者集団の集住が想定でき、隣接する横尾地区における大型建物跡や部衝推定域である下部地区との間をつなぐ古代官道の存在など、この地域の重要性が浮かび上がってくる。

3点目は、江戸時代のムラ境を考える資料としての一字一石経の存在である。行政単位としての尾崎は「真置村」に属しているが、石碑の銘文に見られるように、“自然村”としては「ヲサキ」として認識されていた。この“自然村”は、ムラーノラーヤマという明確な領域概念を有していたと考えられる。つまり、尾崎においては現在十分に把握できないが、周辺の“自然村”については、ムラの角々に石幢を建て、境界を明示していたのである。その「ヲサキ」では、ノラの虫をこの一字一石経の所まで追いやっていた(虫送り)といい、ノラとヤマ、あるいはノラと隣接する村の境を明瞭に認識していたことを表している。

表2 尾崎遺跡出土碑石經(1)

文 字	數	文 字	數	文 字	數	文 字	數	文 字	數
佛	235	何	37	價	20	盡	13	興	9
是	201	復	36	令	20	白	12	共	9
請	199	方	36	土	20	下	12	精	9
無	128	亦	36	嘉	19	婆	12	文	9
我	124	善	35	妙	19	閉	12	義	8
說	112	間	35	廣	19	尼	12	通	8
法	112	難	35	六	19	阿	12	志	8
衆	109	在	35	比	19	俱	12	宅	8
人	109	知	34	塵	18	光	12	安	8
生	106	受	31	欲	18	正	12	定	8
得	105	行	31	從	18	然	11	除	8
所	104	已	30	個	18	意	11	木	8
爲	101	故	30	至	18	轉	11	書	8
於	100	作	30	小	18	金	11	會	8
子	97	舍	30	廻	17	提	11	離	8
有	95	常	29	解	17	昔	11	目	8
不	90	汝	29	告	17	却	11	餘	8
具	90	及	29	可	17	隔	11	散	8
而	81	養	28	惡	17	僧	11	伽	8
一	80	未	28	恆	17	他	11	統	8
三	80	便	27	界	17	地	11	藏	8
大	80	今	27	与	17	塔	11	命	8
之	77	出	27	邊	16	坐	11	合	8
世	75	心	26	應	16	又	11	分	8
者	73	實	26	彼	16	非	11	疑	8
如	68	度	26	神	15	夜	11	鬼	8
善	68	供	26	摩	15	第	10	殊	8
以	66	求	26	持	15	緣	10	死	8
等	63	名	25	男	15	慧	10	羅	7
薩	61	後	25	前	15	宣	10	碑	7
若	61	住	25	數	15	老	10	因	7
此	60	或	25	具	15	演	10	勤	7
聞	55	像	25	先	14	深	10	續	7
當	54	上	25	各	14	優	10	滿	7
尊	52	事	24	空	14	苦	10	漏	7
羅	52	吾	24	相	14	樂	10	波	7
時	51	自	24	歸	14	斯	10	須	7
經	50	身	23	淨	14	會	10	稱	7
書	50	德	23	涅	14	八	10	修	7
見	50	力	23	顯	14	火	10	佗	7
來	49	切	23	起	14	乃	10	觀	7
王	48	念	23	本	14	山	10	親	7
皆	47	乘	23	爾	14	止	10	去	7
	47	歸	22	嚴	14	唯	9	足	7
中	45	女	22	歡	13	好	9	先	7
天	45	龍	22	已	13	逝	9	入	7
道	44	智	22	思	13	家	9	就	7
量	44	滅	22	實	13	聖	9	誓	7
千	44	成	22	根	13	誓	9	號	7
萬	44	四	22	日	13	功	9	物	7
種	43	丘	22	香	13	食	9	塵	7
利	42	樂	21	放	13	業	9	離	6
十	41	能	21	敬	13	到	9	聖	6
百	40	爾	21	莊	13	卻	9	品	6
阿	39	現	20	五	13	父	9	蓮	6
二	38	化	20	長	13	即	9	宣	6

表3 尾崎遺跡出土礫石經(2)

文 字	数	文 字	数	文 字	数	文 字	数	文 字	数
隨	6	全	5	戲	4	流	3	遺	2
邪	6	走	5	戲	4	沙	3	結	2
耶	6	七	5	覺	4	頗	3	維	2
愛	6	水	5	牛	4	敢	3	絕	2
衛	6	久	5	九	4	彌	3	鬚	2
林	6	云	5	夫	4	則	3	槍	2
最	6	年	5	學	4	貴	3	索	2
陸	6	周	5	處	4	假	3	紙	2
往	6	多	5	高	4	備	3	必	2
脫	6	恭	5	川	4	使	3	急	2
讓	6	羊	5	示	4	伎	3	戀	2
讓	6	用	5	喜	4	暮	3	怨	2
刀	6	充	5	叉	4	著	3	蜜	2
開	6	由	5	亂	4	蘇	3	窮	2
處	6	益	5	弟	4	別	3	咒	2
虛	6	乾	5	抹	4	聞	3	棄	2
特	6	憂	5	歎	3	城	3	委	2
辟	6	咸	5	歌	3	壞	3	秘	2
更	6	構	4	辭	3	增	3	塵	2
麗	6	衣	4	姿	3	報	3	塵	2
發	6	祇	4	妓	3	墜	3	險	2
匪	6	瑣	4	妄	3	西	3	雷	2
壽	6	珍	4	瑤	3	獸	3	雨	2
吉	5	燈	4	照	3	毋	3	喪	2
繡	5	逆	4	熬	3	語	3	鐘	2
珠	5	近	4	遠	3	九	3	疾	2
塔	5	遠	4	導	3	史	3	病	2
進	5	終	4	給	3	每	3	突	2
退	5	愁	4	納	3	碍	3	指	2
連	5	宿	4	息	3	興	3	捨	2
連	5	富	4	患	3	也	3	枝	2
愁	5	寫	4	惑	3	番	3	乘	2
愁	5	稱	4	塞	3	支	3	墨	2
宮	5	穡	4	室	3	奧	3	贈	2
庫	5	卑	4	殺	3	勿	3	器	2
強	5	輪	4	積	3	希	3	覆	2
那	5	掌	4	陀	3	永	3	卸	2
病	5	鏡	4	瘦	3	毒	3	風	2
授	5	梵	4	癩	3	善	3	彩	2
春	5	集	4	推	3	釋	3	塵	2
(6)	5	微	4	權	3	慢	3	袒	2
月	5	服	4	榮	3	兼	3	背	2
猶	5	施	4	標	3	單	3	耳	2
悔	5	罪	4	待	3	右	3	眼	2
快	5	懷	4	形	3	味	2	獄	2
怖	5	記	4	青	3	古	2	懷	2
般	5	誌	4	脩	3	加	2	橋	2
論	5	讓	4	取	3	唱	2	情	2
講	5	證	4	誅	3	屈	2	禮	2
河	5	頭	4	旋	3	初	2	飾	2
滅	5	煩	4	惟	3	祝	2	跳	2
溝	5	救	4	惱	3	答	2	飲	2
類	5	陸	4	識	3	嫉	2	誠	2
財	5	傳	4	響	3	嫌	2	誓	2
價	5	門	4	踴	3	固	2	請	2
問	5	關	4	詣	3	璣	2	誤	2

表4 尾崎遺跡出土陶石經(3)

文	字	數	文	字	數	文	字	數	文	字	數
滋		2	痛		2	糸		1	曜		1
注		2	威		2	絞		1	曼		1
決		2	主		2	柄		1	暫		1
濁		2	屏		2	纏		1	隕		1
清		2	絲		2	繩		1	動		1
漸		2	內		2	惡		1	劫		1
淺		2	囚		2	愚		1	劣		1
演		2	欺		2	愁		1	勉		1
頌		2	業		2	忠		1	勇		1
頃		2	欣		1	怨		1	朗		1
責		2	次		1	竊		1	脚		1
來		2	彈		1	宴		1	肩		1
展		2	準		1	害		1	望		1
食		2	雜		1	字		1	腹		1
任		2	賂		1	官		1	骨		1
佛		2	吹		1	宋		1	聰		1
但		2	吾		1	康		1	狹		1
依		2	和		1	廉		1	猛		1
仰		2	輸		1	履		1	旃		1
付		2	勝		1	經		1	駕		1
伎		2	明		1	軒		1	離		1
蓋		2	群		1	躬		1	悚		1
草		2	着		1	蘇		1	惶		1
戰		2	差		1	蘇		1	怯		1
觀		2	哀		1	彈		1	憤		1
擊		2	珥		1	強		1	恨		1
聖		2	招		1	障		1	怕		1
誦		2	社		1	附		1	性		1
羊		2	籍		1	部		1	帳		1
狼		2	籌		1	盤		1	帳		1
臣		2	博		1	雲		1	肌		1
赤		2	娘		1	鈴		1	筋		1
琴		2	妻		1	鍾		1	礦		1
典		2	奴		1	疥		1	齒		1
野		2	姝		1	攘		1	誼		1
產		2	始		1	投		1	讀		1
布		2	圖		1	拜		1	訊		1
兩		2	因		1	探		1	釀		1
立		2	璉		1	拔		1	誼		1
華		2	瑤		1	投		1	翻		1
果		2	瑟		1	極		1	活		1
鮮		2	玩		1	墟		1	池		1
體		2	熱		1	楚		1	浮		1
醫		2	熱		1	柁		1	濁		1
了		2	黑		1	泉		1	灑		1
臣		2	瀟		1	柔		1	瀟		1
免		2	迷		1	朽		1	治		1
既		2	遇		1	株		1	海		1
貴		2	遠		1	校		1	況		1
逐		2	逐		1	械		1	傾		1
氣		2	邁		1	梨		1	顯		1
台		2	邁		1	染		1	賴		1
氏		2	退		1	簪		1	順		1
伏		2	遊		1	榭		1	頻		1
計		2	遊		1	榮		1	頸		1
圖		2	絡		1	樽		1	頤		1

表5 尾崎遺跡出土碑石経 (4)

文 字	数	文 字	数						
輝	1	休	1						
窪	1	伊	1						
鷺	1	誘	1						
田	1	調	1						
帝	1	詠	1						
手	1	徒	1						
句	1	殖	1						
麓	1	琴	1						
屏	1	芭	1						
垂	1	環	1						
辛	1	恣	1						
丹	1	質	1						
外	1	癩	1						
半	1	筵	1						
殿	1	笠	1						
缺	1	軟	1						
盛	1	軍	1						
健	1	興	1						
州	1	短	1						
獻	1	賢	1						
備	1	承	1						
般	1	殿	1						
菱	1	鳩	1						
廻	1	鳥	1						
直	1	静	1						
習	1	暢	1						
瀧	1	瀧	1						
愚	1	遠	1						
懸	1	處	1						
兎	1	機	1						
弁	1	種	1						
斷	1	視	1						
奥	1	護	1						
井	1	膠	1						
鼻	1	胎	1						
孔	1	異	1						
杆	1	尚	1						
食	1	阿	1						
纏	1	盜	1						
帳	1	尊	1						
泰	1	病	1						
将	1	免	1						
包	1	確	1						
盤	1	兎	1						
色	1	旬	1						
單	1	良	1						
巴	1	豆	1						
浴	1	易	1						
江	1	畫	1						
油	1	歸	1						
治	1	朋	1						
源	1	穀	1						
悻	1	矢	1						
悻	1	煙	1						
恨	1								
借	1								

第4章 清水遺跡

第1節 遺跡の概要

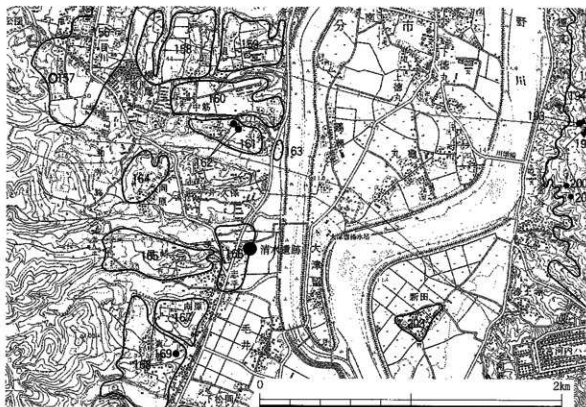
遺跡は乙津川左岸に位置し、西から東流する狭間川によって開折された谷の開口部に広がる沖積地上に立地する。調査対象地は東西156m、南北34mの範囲であるが、調査区の西2/3の北部におよぶC～R-II～VII区では東西に開折され低地となっており、埋没した流路が確認されている。この低地の範囲に古代～近世の水田跡が検出された。東部の微高地では、住居跡などの遺構が集中していた。弥生時代の竪穴住居跡1軒、小児甕棺1基、古墳時代の竪穴住居跡6軒、古代の掘立柱建物2棟、土坑などである。この他に調査区南辺部で遺構を伴わない遺物の散布が広く認められた。

第2節 遺跡の層序

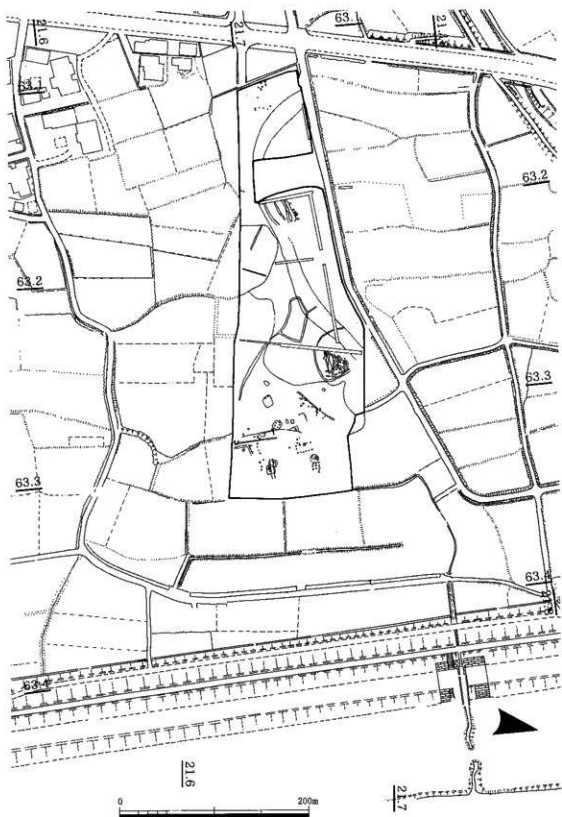
遺跡の層序については、調査区内に設定した東西方向の第4・5・7トレンチ、南北方向の第1・2・6トレンチの計7本のトレンチで観察した。(第38図)

第1トレンチ

1層：灰色粘質土層で現在の耕作土。2層：1層の床土で黄灰褐色土層。3層：黄灰色粘質土層。4層：灰黄色粘質土層。5層：混砂・小礫若干粗粒灰褐色土層。6層：明灰色砂質土層。7層：粗粒灰褐色土層。8層：混小礫若干黒茶褐色砂層。9層：茶黒褐色砂質土層。10層：粗粒黄灰色砂質。11層：混小礫若干粗粒黄灰色砂質層。12層：灰色粗粒砂層。13層：粗粒灰褐色砂層。14層：黄灰色砂質土層。15層：灰色砂層。16層：砂性暗灰色土層。17層：粗粒暗黄灰色砂質土層。18層：暗灰色細砂層。下層の19層を被覆する。19層：砂性黒灰色粘質土層で水田確認したものである(水田I)。20層：黒灰色粘質土層で水田IIの直下で上層とほぼ同質である。21層：青灰色砂層。22層：混小礫若干灰褐色細砂層で8世紀代の須恵器細片が包含されていた。水田である23



第35図 清水遺跡位置図



第36図 清水遺跡周辺地形図

層を被覆する。23層：弱砂性暗灰色粘質土層で、出土遺物から8世紀代の水田とした（水田Ⅱ）。24層：混礫多量砂質黒灰色粘質土層。25層：黄灰色粗粒砂層。26層：灰褐色粘質土層。27層：茶褐色粗粒砂層。28層：黄灰色砂質土層。29層：暗灰色砂層。30層：灰褐色砂質土層。31層：灰褐色若干粗粒砂層。32層：灰黄色の緻密な砂質土層。33層：暗灰細砂層。34層：黒灰色砂質土層。35層：赤茶褐色粗粒砂層。36層：暗灰色砂層。37層：暗灰色粗粒砂層。38層：黒灰色砂質土層。39層：暗黄褐色砂質土層。40層：砂性暗灰色粘質土層。41層：暗灰色粘質土層。42層：径20cm～40cmの礫層となっており、東西方向に開析された谷の南側縁辺をなす段丘礫層である。上層の大まかな傾向は、1層～5層が粘質土、6層～18層が砂質土層、19層・23層の水田は粘質土層となっている。39・40層は水田Ⅱを含む層が開析によって削り取られた後に堆積した層である。

第2トレンチ

1層：灰色粘質土層で現在の耕作土。2層：灰褐色土層で1層と連続する水田層。3層：混小礫若干暗黄土層で床土。4層：混小礫若干暗灰色土層。5層：黄褐色土層。6層：明灰色砂質土層。7層：黒茶褐色土層。8層：暗茶褐色土層で1層の床土。9層：砂質黄褐色土層で床土。10層：暗灰色粘質土層で水田と考えられる。古墳時代から古代の土器細片が若干含まれる。11層：暗灰色粘質土層で水田と考えられる。12層：混灰色砂暗黄褐色粘質土層で酸化鉄が顕著みられる。13層：混小礫暗黄褐色粘質土層。14層：混小礫黒茶褐色土層。15層：混大礫砂性暗灰色粘質土層。16層：灰褐色粘質土層。17層：明灰色砂質土層。18層：灰白色粘質土層。19層：砂性粘質灰白色土層。20層：混小礫砂質粘性灰白色土層。21層：灰色粘質土層で水田と考えられる。22層：黄灰色粘質土層で21層の床土。23層：粗粒灰褐色粘質土層。24層：混礫粗粒茶黒褐色土層。25層：黒茶褐色土層。26層：混大礫多量暗黄褐色土層。27層～29層は木片などを含む黒色泥層で北に向かって堆積が厚くなっており旧河道の南縁にあたるものといえよう。10・11・16層の水田層は下層の19・21層の水田以降に形成されたものと考えられる。

第3トレンチ

1層：砂礫主体層で現耕作土直下の土層である。2層：混砂黒灰色粘質土層。3層：灰褐色砂層。4層：灰色粗粒砂層。5層：礫層。6層：暗茶褐色土層。7層：混礫多量黒灰褐色粘質土層。8層：混黒灰色粘質土粗粒灰色砂層。9層：砂質粘性黒灰色土層。10層：粗粒青灰色砂層。11層：暗茶褐色砂礫層。12層：径0.5cm～1cmの砂礫層。13層：砂性黒青灰色粘質土層。14層：砂性黒灰色粘質土層。トレンチの南半部最下層には第1トレンチ42層と同じ段丘礫層が確認された。

第4トレンチ

1層：灰褐色粘質土層、上部に酸化鉄がみられる。現在の水田層を除去した状態である。2層：砂礫層。3層：砂質粘性灰色土層。4層：青灰色粗粒砂層。5層：黒灰色砂質土層で、第1トレンチ38層と同じ。6層：砂性灰色粘質土層。7層：暗黄褐色砂質土層で、第1トレンチ39層と同じ。8層：砂性黒色粘質土層。9層：砂性暗灰色粘質土層で、第1トレンチ40層と同じ。10層：粗粒砂質粘性黒灰色土層。11層：粗粒灰色砂質層。12層：粗粒灰褐色砂層。

第5トレンチ

1層：灰色粘質土層で現水田層を除去した下層の旧耕作土。2層：1層の床土で酸化鉄を含む砂質粘性黄褐色土層。3層：マンガン粒多量砂性粘質暗黄褐色土層。4層：粗粒暗黄灰色粘質土層で、第1トレンチ25層とほぼ対応。5層：硬質黄灰色粘質土層で第1トレンチ26層と対応。6層：青灰色粘質土層。7層：酸化鉄を含む粗粒砂性暗灰色土層。8層：暗灰色砂質層。9層：砂性黒灰色粘質土で、緻密な泥状を呈し、木片などを含む。10層：青灰色粗粒砂層。11層：黒灰色粘質土層。12層：青灰色粗粒砂層。13層：混礫黒灰色粘質土層。14層：混青灰色砂黒灰色粘質土層。15層：混黒灰色粘質土青灰色砂層。16層：灰褐色粘質土層。17層：灰褐色粘質土層。18層：暗灰色

砂質上層。19層：細砂層。20層：砂性黒灰色粘質土層。21層：粗粒砂層。22層：混砂黒灰色粘質土層で木片を含む。23層：青灰色砂層で木片を含む。24層：黒灰色粘質土層。25層：細砂層。26層：黒灰色粘質土層。27層：粗粒黒青色灰砂層、28層：混砂黒灰色粘質土層。29層：灰褐色細砂層。30層：混礫多量黄褐色粘質土層。31層：粗粒暗青灰色砂層。

第6トレンチ

1層：粗粒黒褐色土層で現在の耕作土。2層：1層に連続する水田層で暗灰色粘質土層。3層：硬質粘性灰褐色土層。4層：混粗粒砂質粘性灰褐色土層。5層：粗粒灰色砂層。6層：粘性砂質灰色土層。7層：灰色砂層。8層：粘性砂質粗粒褐色土層。9層：混マンガン粒粘性砂質灰褐色土層。10層：粘性砂質黄灰褐色土層。11層：砂質粗粒灰褐色粘質土層。12層：砂性灰褐色粘質土層。

第7トレンチ

1層：灰色土層で現在の耕作土。2層：黄褐色粘質土で1層に連続する水田層。3層：粗粒灰褐色砂質上層。4層：粗粒砂質上層。5層：粗粒灰褐色砂層。6層：暗灰褐色砂性粘質土層。7層：暗茶褐色砂質土層。8層：灰色粘質土層。9層：砂性灰色土層。10層：灰色砂礫主体層。11層：硬質黄褐色砂質土層。12層：緻密な青灰色砂層。13層：砂質粘性黄褐色土層。14層：黒灰色粘質土層。15層：青灰色粘質土層。このように土層堆積状態は、砂層の3・4・5層、7層、9～12層と粘質土層の6層、8層、14・15層が互層となっていた。

第3節 遺構

竪穴1（第39図、図版14）

調査区東南部に位置する。円形住居跡の竪穴2の南東部を切断してつくられている。規模は、北1壁3.9m、南壁4.1m、東壁3.8m、西壁4mの長さを持ち、深さは0.3mである。平面形はほぼ正方形である。主軸方位は北25度西を指向する。床面はほぼ平坦であり、支柱穴は東西の2本と考えられる。竪穴内の堆積土は、上層より1層混焼土粒若干黒褐色土層、2層混炭化材、焼土ブロック粘質茶黒褐色土層となっていた。遺物は床面、覆土内出土している。竪穴の時期は出土遺物から、6世紀後半といえる。

竪穴2（第39図、図版14）

調査区東南部に位置する。竪穴1に南東部を切断されている。遺存状況は南半部が端部を残すのみでほぼ欠失する。規模は、直径3.9m～4.2m、深さは0.25m程度である。平面形は円形である。床面はほぼ平坦であり、中央に地床炉をもつ。柱穴は北半部に3個確認された。竪穴内の堆積土は、上層より3層粗粒黒褐色土層、4層粘質黒茶褐色土層となっていた。遺物の出土状況は、床全体に広がっていた。覆土内及び床面から出土している。竪穴の時期は出土遺物から、弥生時代中期後半頃といえる。

竪穴3（第40図、図版15）

調査区東部の住居跡が集中する範囲では、最も西に位置する。規模は、北壁5m、南壁4.2m、東壁3.9m、西壁3.6mの長さを持ち、床面までの深さは削平のため0.12mと浅い。平面形は、東西に長い歪な方形である。主軸方位は、カマドを基準にすると北14度西を指向する。床面はほぼ平坦である。支柱穴は南西部を欠失するが4本と考えられる。西壁にカマドが付設されている。カマドは、西壁の中央部を外へ掘り込んで作られている。掘形はほぼ矩形をなし、長さ0.78m、幅0.62m、深さ0.25mの規模である。左右の壁には長さ50cm、幅20cm、厚さ5cmの板石が垂直に立てられ、壁面とされている。板石は竪穴内部に向かい0.2m～0.25mほど延びて袖をなしている。

石材は緑泥片岩である。中央部には、甕の胴部1/3が焚き口側に開く形で据えられていた。火床面は、焚き口付近から中央部の左半部に残っており、硬化赤変し強い被熱状況が窺える。

遺物の出土状況は、覆土内に多く含まれていたが、床面からも出土している。竪穴の時期は出土遺物から、6世紀後半といえる。

竪穴4 (第41図、図版15)

調査区東部のほぼ中央に位置する。規模は、北壁4m、南壁3.8m、東壁3.5m、西壁3.6mの長さを持ち、床面までの深さは、0.3mほどである。平面形は、東西にやや長い方形である。主軸方位は、北73度西を指向する。床面はほぼ平坦である。主柱穴は4本ある。西壁にカマドが付設されている。カマドは、西壁の中央部に設けられ煙道が外へ延びる。掘形は壁から竪穴内部に向かって作られ、長さ1m、幅0.8mの円形を呈する。煙道は長さ0.9m、幅0.2m～0.3mと細く、両壁に赤硬化した被熱状況が顕著にみられる。火床面はほぼ平坦であるが、焚き口付近に赤変範囲が認められる程度である。袖部は右袖の基部が若干残るが、左袖は欠失している。

遺物の出土状況は、床面全体に広がり覆土内にも多く含まれていたが、カマド周辺に集中する傾向が窺える。

竪穴の時期は出土遺物から、6世紀後半といえる。

竪穴5 (第42図、図版16)

調査区東部の竪穴4の北4mに位置する。竪穴は、水田耕作などの掘削のため、西壁と南西隅、床面の1/3程度のみが残る。西壁は長さ4.2m程残っており、床面までの深さは0.1mである。平面形は方形と思われる。主軸方位は、西壁から想定すると北38度西を指向するものと考えられる。床面はほぼ平坦である。主柱穴については、現存する西壁中央から1m内側の床面にあるピットがその一つと考えられるが、他の柱穴及び配置は不明である。

遺物の出土状況は、残存する床面に土器片及び炭化材が若干みられるものであった。

竪穴の時期は出土遺物から、6世紀後半といえる。

竪穴6 (第43図)

調査区東部の竪穴4の南東2mに位置する。竪穴は南北壁の一部と西壁が残る程度である。水田の整備に伴い削平を受けており、覆土はほとんど残っていない。規模は、西壁で長さ5.7mで、南北の壁は長さ1.9m～2.3m程度が確認できる。床面までの深さは0.1mである。平面形は方形と思われる。主軸方位は、西壁から想定すると北34度西を指向するものと考えられる。床面はほぼ平坦であるが、東半部と南西隅付近を欠失する。主柱穴は、南西・北西の2個が確認され、位置関係から4本柱と想定される。

遺物はほとんど残っていなかったが、平面形態から6世紀後半頃に建てられたものと想定される。

竪穴7 (第44図、図版16)

調査区東部では最も北に位置する。東半部の壁を欠失するが、円形の竪穴である。規模は、径4.2mの円形の平面形と思われる。壁の高さは、0.1m～0.15m程度残っている。床面には、径0.15m～0.3mの柱穴7個が確認された。中央部には、短径0.85、長径1mの掘り込みがみられ地床炉と考えられる。炉跡周辺に被熱痕跡が確認される。竪穴の時期は出土遺物から、弥生後期といえる。

建物1 (第45図、図版17)

調査区東部の7号竪穴の西2mに位置する。建物は、桁行5間、梁行2間で、主軸方位が北29度西を指向する南北棟である。規模は桁間7.2m、梁間4mで柱間は桁行で1.8m、梁行で1.2m～1.8mである。柱穴の掘形は円形を呈し、径0.3m～0.46m、深さは遺構確認面から0.3m～0.4mである。

建物2 (第45図、図版16)

調査区東部の建物1の東7mに位置し、7号竪穴の東に接してする。建物は、桁行2間、梁行2間の総柱建物で、主軸方位が北26度西を指向する。建物1の主軸方位とほぼ一致する。規模は東西2.8m、南北3.2m、柱間は東西方向で1.4m、南北方向で1.6mの間隔である。柱穴の掘形は円形を呈し、径0.4m～0.6m、深さは遺構確認面から0.5m～0.6mである。

遺物としては、南辺中央の柱穴から土師器壺の破片が出土している。

建物の時期は、出土遺物から8世紀代と想定される。

小児甕棺 (第47図、図版17)

調査区東部の中央にあたるT-V区に位置する。合口の甕棺である。上甕は口縁部周辺を打ち欠き、下甕に覆い被せたものである。下甕は完形品である。主軸は北93度東にとり、23度の角度で埋置される。墓坑は長径1.4m、短径1mの不整形円形を呈し、確認面からの深さ0.8mである。底面は平坦となっている。時期は弥生時代後期である。

土坑1 (第48図)

U-VⅦ区に位置する。長径1.4m、短径0.8mの楕円形を呈するが南東部を溝で若干切られている。確認面から0.2mの深さである。底面はほぼ平坦をなす。土坑内の覆土中や底面から礫や土師器の破片が出土している。

土坑2 (第48図)

土坑1の南3mに位置する。長径1.7m、短径1.2mの楕円形を呈する。確認面から0.1m程度の深さで浅い。底面はほぼ平坦をなす。土坑内から若干の土師器が出土している。

土坑3 (第48図)

T-VⅦ区に位置する。2つの円形土坑が南北に連接したものである。長さ1.8m、幅1.2mの大きさをもつ。確認面からの深さは北部で0.3m、南部で0.4mである。底面はほぼ平坦をなす。

土坑4 (第48図)

R-VⅥ区に位置する。長さ2.9m、幅1.4mの不整形を呈する。確認面からの深さ0.05mと浅い。底面はほぼ平坦をなす。

土坑5 (第48図)

R-Ⅳ区に位置する。長さ2.2m、幅1.5mの不整形を呈する。確認面から0.1mの深さである。底面は平坦である。土坑内から土師器が出土した。時期は出土土師器の特徴から5世紀初頭の時期と考えられる。

焼土遺構1 (第48図)

S・T-V区に位置する。1.8m×1.8mの範囲が赤変・硬化していた。構造を示す痕跡は確認できなかった。土師器、須恵器などが焼土面から出土している。

焼土遺構2 (第48図)

焼土遺構1の1.5m南に位置する。2.2m×1.6mの範囲が赤変・硬化していた。構造を示す痕跡は確認できなかった。

焼土遺構3 (第48図)

T-V区に位置し、竪穴6の北西隅に接する。1m×0.8mの範囲が赤変・硬化していた。構造を示す痕跡は確認できなかった。

このように焼土遺構は被熱により赤変硬化した1m~2m程度の範囲が残存した状態で検出されたものである。施設としての機能を確認し得ないが、土師器焼成坑の可能性を指摘しておきたい。そうとすれば焼土遺構1焼土面から出土した土師器はこの場で焼成されたものであり、器形の特徴から9世紀前半代として考えられる。ただ土師器に時期差があり、また須恵器なども出土していることから、必ずしも焼成坑に伴う焼成品とは断定できない。土師器焼成坑は本書に掲載の尾崎遺跡や清水遺跡の西500mに位置する井ノ久保遺跡A地区で確認されている。井ノ久保遺跡A地区では大分市教育委員会によって円形を呈する焼成坑2基が調査され、出土土師器から9世紀前半とされている。

水田跡

西部水田域 (第49図、図版12)

調査区西部のH・I-V~VII区で確認された水田跡である。水田跡は、東西13m、南北18mの範囲に形成されている。周辺の地形は、南が緩やかな微高地をなし、基盤が礫層となっている。その北側は谷・旧河道にあたり、土砂の堆積が進行したもので、この範囲に水田が形成されている。当該地区の土層の堆積は41層に区分できるが、大きくは現在の水田下に、上層より砂礫混じり黒灰褐色土、砂混じり黒灰褐色土(水田I)、暗灰細粒砂、黒灰色粘質土、青灰色砂、砂混じり暗灰色粘質土(水田II)が確認された。

水田Iは、土層断面において確認したものであり、平面的な区画として検出したものではない。時期については、出土遺物もなく不明である。

水田IIは、水田Iの下約0.5mに形成されており、土層断面に水路、畦畔、水田面を確認した。この土層断面の観察所見をもとに、平面的に広がる水田区画を把握できた。その結果、小区画水田であることが確認できた。

溝6はこの範囲では最も南に位置し、東へ流れる。溝内には、混雑黒灰褐色粘質土が堆積し、その上は水田II直上と同じ青灰色砂層で覆われていた。規模は、幅0.5m~0.7m、深さ0.2m、長さは約10mを確認したが東端は削られ消失しており不明である。溝7・8は、溝6と同様に東へ流れる。規模は、幅0.2m~0.3m、深さ0.1mである。南北溝の間には、畦畔、水田面が形成されていた。畦畔は、溝7の北側に確認されたが、削平されており水田面との比高5cm程度の高まりとなっている。水田面は、南北に2別が確認された。南の水田面は南溝の北側に4区画形成されていた。1区画の規模は、南北辺0.6m~1.5m、東西辺1.2m~5mである。区画は、東西方向に長い長方形をなすものと考えられる。北の水田面は、北溝の北側に7区画形成されていた。各々の区画の北辺は削られており、明確な形態を確認できない。規模は、東西方向で0.4m~2.7mであるが、南北方

向は最長2.5mを確認でき、区画が南北に長い形状と思われる。溝6と溝7の間に水田が考えられるが、畦畔は確認されていない。このように西部水田域の水田IIは北部を土層断面でみられるように洪水等で消失している。水田の東部については、水田の区画を確認できなかった。出土遺物として、水田IIを被覆する砂層から出土した土器が4点ある。このうち7世紀前半の須恵器高杯、8世紀前半の土師器杯が各1点、8世紀中頃の須恵器壺、甕が各1点出土している。水田は、土器の内容などから8世紀中頃に営まれていたものと考えられる。

東部水田跡（第50図、図版13）

調査区中央部やや東、北部のP・Q-II～IV区で疑似畦畔を検出した。疑似畦畔は、東西15m、南北19mの範囲に確認できた。この範囲の南部及び東部は、礫主体の地山となっている。確認面は灰色粘質土であり、その直上は灰白色粘質土となっている。土層断面において畦畔など水田に伴う付帯施設等については、溝3を除くと確認することはできなかった。平面的に削平された畦畔の写しか残った疑似畦畔が溝の北・西側に確認されたものである。疑似畦畔は重複の状況から少なくとも3時期にわたる水田が存在を示すものと想定される。最古段階の1期は南から北に広がる0.5m×1.1m～1m×3.5mの長方形あるいは台形を呈する区画である。2期は中央部の東西5m、南北3mの範囲に確認されるが、区画の単位は不明である。3期は2期と同様に中央部に確認でき、1m×2.5m程度の方形の区画が想定される。北部にも3期の畦畔とは異なり区画がみられた。

水路は埋没谷のラインに沿って造られており、東に向かって伸びさらに北へ湾曲して流れる。底面の傾斜は極めて緩やかで、西端と北端の比高7cm程度である。溝が造られた時期は1期の水田に伴う可能性が考えられる。なお、水田跡堆積環境の自然科学的調査において、疑似畦畔を確認した21層は水田の可能性があるとの見が得られている。このような重複の著しい疑似畦畔の状況は21層以後の頻繁な耕作の実態を反映した結果といえよう。出土遺物として近世の陶器杯が確認されている。水田跡の時期を示すものかどうか確定できない。

調査区南辺部のL、P、S・R、U区では遺物の散布が広く認められた。時期は弥生時代中期、古墳時代初頭～後半、平安時代、近世までと様々であった。このような状況から隣接するやや微高地をなす調査区範囲外の南部に集落跡などが想定される。

第4節 出土遺物

竪穴1 (第51図1~4)

1は、竪穴の外に位置するピット中から出土した土師器の蓋である。蓋は口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品。形状は口径に比して器高が低く全体に低平である。天井部から口縁部にかけて直線的に伸び、口縁端部は下へ強く屈曲し、やや外反する。大きさは口径17.8cm、器高3.3cmである。調整は、天井部中位に回転ヘラ削りが残る、内外面とも横ナデが施されている。胎土に長石、石英粒が少量含まれる。焼成は堅緻で良好といえる。色調は茶褐色を基調とする。2は手づくね土器である。最大幅を体部下位にもち下膨れの形状を示す。口縁部は緩く外反する。調整は内外面ともにナデで仕上げられているが、指頭痕が残る。大きさは口径4.2cm、器高4.4cmと小さい。胎土に角閃石、長石粒などが多く含まれている。焼成は良好であり、淡黄褐色の色調を呈す。3・4は壺である。3は完形品である。口縁部はくの字状に長く直線的に外へ開く。大きさは口径7.4cm、器高8.9cm、頸部径5.4cm、最大径は体部やや上位にあり9.1cmである。調整は、体部が外面に斜方向のハケ目がみられ、内外面にナデが施され、底部内面にヘラ痕が残る。口縁部は内外面とも横ナデである。胎土に角閃石、長石の砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色を基調とする。4は、口縁部がくの字状に外へ開く。大きさは口径7cm、器高10.1cm、頸部径4.6cm、最大径は体部やや下位にあり9.2cmである。調整は、体部外面にハケ目が僅かにみられ、内外面にナデが施され、底部内面にハケ目が残る。頸部付近に指頭痕がみられる。口縁部は内外面ともナデ調整である。胎土に角閃石、長石の砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色を基調とする。

竪穴2 (第51図5~7、第52図1~5、第53図1~3)

5は土師器の鉢で口縁部~体部1/6個体を残す。底部を欠くが、やや深めの形状を呈し体部から口縁部にかけて内湾する。口縁端部は丸くやや肥厚する。大きさは口径15.6cm、器高は底部を欠くため不明であるが、10cm程度と思われる。調整は口縁部をナデ、体部内面は平滑なナデとなっているが、指頭痕が残る。外面は器面の荒れのため不詳。胎土に角閃石、石英粒を多く含む。焼成は通常で黒黄褐色を呈する。6は複合口縁壺の口縁部破片である。口縁端部は下へ短く垂下するが、平坦面に勾玉状の浮文が4点を一組として配されている。側縁に連続する三角文が刻まれている。口径は復元すると23.8cmとなる。調整は口縁部内外面にナデが認められる。焼成は良好で、色調は黄褐色を基調とする。7は壺であるが、口縁部と底部を欠く。器外面には、胴部の上位と中位の2箇所に三角突帯がみられる。胴部上位では、頸部にかけて9条を確認できるが頸上部を欠くため総数は不明である。突帯の最下段には勾玉状の浮文がほぼ1cm間隔で付されている。胴部中位では、最大径をもつ位置に突帯が4条巡る。残存高は40cm、頸部径13.4cm、最大径は胴部ほぼ中位にもち31cmである。整形・調整は、胴部外面に縦方向のハケ目、突帯付近にはナデが施されている。胴部内面に整形時の指頭痕が残る、胴部内面には上半部に横方向のハケ目、下半部に縦方向のハケ目がみられる。胎土には角閃石・長石・石英粒及び結晶片岩粒を含む。焼成は良好であるが、胴部下端付近に黒班部分がみられる。色調は褐色を基調とする。第2図1は壺であるが、頸部から口縁部にかけて欠失する。7と同様に器外面に胴部の上位と中位の2箇所に三角突帯がみられる。胴部上位では、頸部にかけて6条を確認できるが頸部の大半を欠くため総数は不明である。突帯の最下段には勾玉状の浮文がほぼ1cm間隔で付されている。胴部中位では、最大径をもつ位置に突帯が4条巡る。残存高は32.3cm、最大径は胴部ほぼ中位にもち26.8cmである。調整は、胴部外面に縦方向のハケ目、下端付近には縦方向のヘラ調整がみられ、突帯付近及び底部外面にはナデが施されている。胴部内面にナデ、胴部内面下半部にはヘラ調整がみられる。胎土には角閃石・長石・石英粒などを含む。焼成は良好であるが、胴上部と下端付近に黒班部分がみられる。色調は淡褐色を

基調とする。

第52図2～5、第53図1～3は土師器であり、2号竪穴に混入したものと考えられる。2は壺の口縁部～胴上半部1/4個体である。口縁部は短いが大きく外反し、端部は丸く仕上げられている。頸部は細い。大きさは口径12.6cm、胴部の現存最大径25cm、残存高15cmであるが、大きく張る胴部にやや短い口縁部をもつ形状をなす。調整は、口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向のハケ後ナテ、内面は整形時の指頭痕が残り、ヘラ削りがみられる。胎土には角閃石粒を多量、長石・石英粒を少量含む。焼成は良好であり、淡黄褐色～橙色を呈する。3～5は甕の破片である。3は甕の口縁部～胴上部1/5の破片である。口縁部は短く、強く外反する。口径は15cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向のハケ後ナテ、内面には指頭痕が残り、ナテで仕上げられている。胎土は良好で角閃石粒を微量含む。色調は淡黄褐色から橙色を呈す。4は甕の口縁部～胴上部1/3の破片である。口縁部は緩く外反する。口径は22.8cmで、胴部最大径は上部にもち21.8cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向ナテ、内面に平滑なナテが施されている。胎土に角閃石粒を多量、石英粒を少量、長石粒微量含む。色調は赤褐色を基調とする。5は甕の口縁部～胴部1/3の破片である。口縁部は大きく外反する。口径は24.2cm、胴部最大径を上部付近にもち23.3cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向のハケ・ナテ、内面に縦方向のヘラ削り後ナテがみられる。胎土に角閃石・長石粒が少量含まれる。焼成は良好であり、色調は橙色を基調とする。

第53図1～3は甕である。1は口縁部～胴部1/7の破片である。口縁部は緩く外反し、端部は丸い。口径は26cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面にハケ・ナテ、内面にヘラ削り後ナテが施されている。胎土には砂粒を多く含む、その中に角閃石・石英粒が少量、長石が微量みられる。焼成は良好で淡黄褐色～黄褐色を呈する。2は口縁部～胴部の1/3個体である。形態は口縁部がくの字状に強く屈曲し、膨らみの弱い胴部をもつ。口縁端部は肥厚し、矩形をなす。最大径は口径にあり、24.2cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向のハケ、ナテ、内面に縦方向のヘラ削り後ナテが施されている。胎土には角閃石・長石粒が少量含まれる。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が黒茶褐色を呈する。3は口縁部～胴部1/8の破片である。口縁部はくの字状に屈曲し、膨らみの弱い胴部をもつ。口縁端部は肥厚し、矩形をなす。最大径は口径にあり、24.2cmである。調整は口縁部内外面にナテ、胴部外面に縦方向のハケ、ナテ、内面に縦方向のヘラ削り後ナテが施されている。胎土には角閃石・長石粒が少量含まれる。焼成は良好で、色調は外面が橙色、内面が黒茶褐色を呈する。

竪穴3（第53図4～6）

4・5は同巧の甕で、外へ湾曲する口縁部と底部が丸い卵形状の胴部をもつ。4は口縁部～胴上部1/5の破片で、口径15.8cmである。5は1/2が残り、口径9cm、器高27cm、最大径を胴部中位にもち、22.5cmである。成形は粘土の積み上げでなされ、断面に接合痕がみられる。4・5共に調整は内外面にナテで仕上げられている。胎土には、角閃石・長石・石英粒、赤色砂粒などを含む。焼成は通有で、淡黄褐色を呈す。6は本来鉢であるが、焼成後に底部を穿孔し、甕として再利用のものである。体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部の孔は径3.2cmの単孔式となっている。調整は外面にナテ、内面にハケ目が施されている。底部は孔が焼成後に穿たれたため、破面の周辺を削り調整されている。底部下端付近は甕として使用されたため被熱し、煤が付着している。成形は粘土を積み上げてなされている。胎土には、角閃石・長石・石英粒、赤色砂粒などを含む。焼成は良好で、赤褐色を呈す。

堅穴4 (第54図1~17、第55図1~5)

第54図1~6は須恵器で、1~4は蓋である。1は天井部が丸く山形をなし、口縁部との境に稜が付く。口縁部はやや内湾気味に垂下する。端部が細く尖る。内面は膨らみ緩い稜をなす。大きさは口径14.8cm、器高5cmである。調整は天井部2/3に右回転ヘラ削り、内外面にヨコナテが施されている。天井頂部内面に同心円の当具痕が残る。胎土に砂粒は少ないが、石英粒が含まれる。焼成は良好で明灰色を呈す。2は天井部頂部付近を欠く1/6個体である。天井部は口縁部との境に稜をもつ。口縁部は長くやや外傾し、端部は先端が細く尖り内面に稜をもつ。調整は天井部に右回転ヘラ削りがみられるが、口縁部との境までには及んでいない。天井部外面の一部から口縁部、内面に横ナテが施されている。大きさは口径13.8cm、現存高3.8cmである。胎土には砂粒があまり含まれないが、石英粒が少量みられる。焼成は良好・堅緻であり、灰色を呈す。3は天井部の大半を欠く。天井部は口縁部との間に緩い沈線が巡り、境をなす。口縁部はやや内湾気味に垂下し、端部に向かって肥厚するが、先端は細まり、内面に沈線をもつ。調整は天井部の大半を欠くため回転ヘラ削りは確認できないが、天井部の一部から口縁部の内外面に横ナテが施されている。大きさは口径14.4cm、現存高3.5cmである。胎土には砂粒があまり含まれないが、石英粒が少量みられる。焼成は良好・堅緻であり、灰白色を呈す。天井部の一部に自然釉がみられる。4は口縁部を欠く。内外面に横ナテが施され、天井部の一部に右回転ヘラ削りがみられる。胎土には長石・石英粒を含む。焼成は良好であり、青灰色を呈す。5は坯身3/4個体である。口縁部は緩く外反しながら伸びる。受部は、短く伸びる。底部は右回転ヘラ削りが施されている。天井部以外の外面及び内面は横ナテ調整である。大きさは口径12cm、受部外径14.2cm、器高4.3cmである。胎土に砂粒が多く含まれる。焼成は良好・堅緻であり、暗灰色を呈す。受部から底部の外面1/2に自然釉がみられる。6は坯身3/4個体である。口縁部は長く直線的に伸びる。受部は短く伸びる。底部は右回転ヘラ削りが施されている。天井部以外の外面及び内面は横ナテ調整である。大きさは口径11.8cm、受部外径14.2cm、器高4.9cmである。胎土に砂粒が多く含まれる。焼成は良好・堅緻であり、暗灰色を呈す。受部から底部の外面1/2に自然釉がみられる。7は土師器鉢の完形品である。平底をなす底部から丸く湾曲して立ち上がり、口縁部はやや外へ開く。調整は、外面及び口縁部内面にナテ、体部内面にヘラ状工具による縦方向のナテが施されている。大きさは口径10cm~10.4cm、器高7.7cm、底径3cmである。胎土に角閃石・長石・石英等砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。8は土師器の小壺である。口縁部を欠くが、頸部は外へ大きく開き、体部はほぼ球体をなす。内外面共にナテ調整が施されているが、体部外面上半部に縦方向のハケ目、体部下端に指頭痕が残る。大きさは現存高7.8cm、体部最大径8.5cmである。胎土に砂粒が少なく精製されている。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。9は土師器杯の3/4個体である。体部から丸く湾曲し、口縁部に至る。内外面共にナテ調整が施されている。大きさは口径13cm~13.4cm、器高5.5cmである。胎土に角閃石・長石等砂粒を多く含む。焼成は通有であり、色調は黄褐色を呈す。10は土師器鉢の1/3個体であり、半球状をなす。内外面共にナテ調整が施される。大きさは口径13.4cm、現存高6cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒が多く含まれる。焼成はやや不良で、灰白色を呈す。11も土師器鉢の1/3個体であり、半球状をなす。口縁端部は内側に屈曲する。内外面共にナテ調整が施される。大きさは口径15.2cm、現存高6cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒が多く含まれる。焼成は良好であるが、黒褐色を呈す。12は土師器壺であり、胴部下半を欠く。口縁部はやや短く外へ開く。胴部はやや長い形状をなす。外面にナテ調整が施され、内面は頸部に指オサエが残る。粘土の接合痕がみられる。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は褐色を呈す。13は土師器壺の完形品である。胴部は最大径をやや上位にもち、口縁部は外へ開く。口縁部内外面にナテ、胴部は外面にハケ目、内面にナテが施さ

れている。頸部外面に指頭痕が残る。大きさは口径9.4cm～9.9cm、器高14.9cm、頸部径7.7cm、胴部最大径13.4cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒が多く含まれる。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。14は土師器壺の完形品である。胴部はやや縦長の球体をなし、口縁部は長く緩やかに開く。調整は口縁部内外面に縦方向のハケ目、内面にヘラナデがみられる。頸部外面に指頭痕が残る。大きさは口径10.9cm～11cm、器高18.5cm、胴部最大径13.9cmである。胎土に長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。15は土師器壺の口縁部～胴上部の1/3個体である。口縁部はやや肥厚し、くの字状に開く。調整は口縁部及び胴部に斜方向のハケ後ナデ、内面はナデが施されている。口径15.4cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡黄色を呈す。16は甕底部で、カマド内から出土した。調整は内面ハケナデ、外面斜方向ハケ目がみられる。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で、淡黄色を呈す。17は土師器壺の底部～胴下部付近を欠く2/5個体である。口縁部は大きく外へ湾曲し、胴部は最大径を中位にもち、やや張る。調整は内外面共にナデであるが、口縁部外面に縦方向ハケ、胴部内外面に指頭痕がみられる。口径16.8cm、胴部最大径19.8である。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。第55図1～5は土師器で、1～3は甕である。1は口縁部～胴部上半3/5が残る。口縁部がコの字状をなす。外面に縦方向のハケ目、口縁部内面に横方向のナデ、胴部内面にヘラ削りがみられる。口径20.2cmである。2・3は丸い底部の残欠である。1・2は被熱し煤が付着。甕は胎土に角閃石・長石等の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は橙色を基調とする。4は単孔の瓶1/3個体である。器高のやや低い形状を呈す。口縁部は外へ短く屈曲する。調整は口縁部内外面にナデ、胴部外面に縦方向ハケ目、内面にナデ、胴部下端に指頭痕が残る。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。被熱し外面に煤が付着。5は壺で胴部下半部を欠く1/3個体である。口縁部はくの字状に屈曲し、頸部はやや細く、胴部は最大径を下半にもつ。調整は口縁部にナデ、胴部内外面にヘラナデがみられる。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含み、焼成は良好で、黄褐色を基調とする。被熱痕があり、煤が付着。

壺穴7（第55図6～8、第56図1～6、第57図1～6）

第55図6は土師器で、混入品と考えられる。丸底甕であるが、底部を欠く。体部はやや扁平な球体をなし、口縁部は外へ強く屈曲する。口縁部内外面に横方向ナデ、体部は外面にナデ、内面にヘラケズリ後、ナデを施す。復元口径10.6cm、残存高6.9cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は通行で、色調は暗黄褐色を呈す。7は弥生後期の鉢である。1/3個体を残す。ジョッキ形の形状を呈し、底部は平底で口縁部は端部付近から僅かに内湾する。器高12.5cm、口径12.3cm、底形6.5cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で淡い黄褐色を呈す。8は弥生中期の壺で口縁部～頸部が残る。口縁部は大きく外反し上部で平坦面をなし、円形の浮文を配する。口縁部の周縁にハ字状の連続三角文が巡る。頸部には三角突帯がみられる。口径20.3cm、口縁部外径26cm、頸部径10cmである。調整は内外面に横方向のナデが施されている。胎土には角閃石・長石・石英粒などを多く含む。焼成は良好で、赤褐色～黄褐色を呈する。

第56図1は壺の胴部である。3条の三角突帯文が巡る。外面に縦方向のハケ目がみられる。突帯にはナデが施され、その下位の胴部下半には横、縦方向のヘラミガキが顕著である。内面にはヘラ削り後、ナデを施す。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。2～6は甕である。2は1/3個体である。小さい平底状をなす底部にやや長い胴部をもち、口縁部は外へ開く。口縁端部に凹線状の段をもつ。大きさは器高27cm、口径20cmである。調整は

器内外面にナデがみられる。焼成は良好で、黄褐色～橙色を呈すが、二次焼成を受けている。3は胴部下半を欠く。口縁部は緩く外へ開く。口径18.2cmである。器内外面共にナデ調整を施す。色調は外面が明赤褐色、内面は黄黒褐色を呈する。4は下半部を欠く。胴部は大きく張り、口縁部は短く外反する。口縁部は上下にやや伸びる。口径19.2cm、最大径を胴部中位にもち24.4cmである。口縁部、胴外面は器面の荒れており調整不詳である。焼成は不良である。色調は黄褐色を呈する。5は口縁部～胴上部の1/5が残る甕である。口縁部はく字状に屈曲する。口径24.3cmである。口縁部及び胴部内面にナデがみられるが、胴部外面は器面の荒れており調整不詳である。6は口縁部～胴上部の1/5が残る。口縁部は緩く外反する。口径27.3cmである。口縁部及び胴部内面にナデがみられるが、胴部外面に縦・斜め方向のハケ目が施されている。胴部外面にナデ、胴部内面に縦方向ハケ目を施す。焼成は良好で、黄褐色を呈する。甕は胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。第57図1～6は甕である。1は炉跡及び周辺から出土した破片が接合したものである。口縁部は強く外反し、胴部は最大径を上位にもつ。口径27cm、胴部最大径27.4cmである。焼成は良好で、淡黄色～黄褐色を呈す。2は口縁部～胴部上半1/3個体である。口縁部は緩く外反する。胴部の張りは弱い。口径は27cmである。頸部に刺突文が連続する形で巡る。口縁部及び胴部内面にナデが施され、胴部外面には縦方向のハケ目後ナデ調整がみられる。焼成は良好で、外面暗褐色、内面黄褐色である。3は下城式土器である。口縁部～胴上部の1/5個体を残す。口縁部下に貼付突帯が巡る。調整は口縁部、胴部内面及び突帯にナデ、胴部外面に縦方向のハケ目が施されている。焼成は良好で黄灰褐色を呈す。4～6はほぼ平底をなす底部の破片であるが、4はやや上げ底風となっている。調整は器内外面共にナデで仕上げられている。6は縦方向のハケ目が残る。甕の胎土には、角閃石・長石・石英粒、赤色・白色粒子を多く含む。

建物2 (第57図7)

7は建物の柱穴から出土した土師器の底部である。器種は甕と思われ、丸底を呈する。

調整は外面にハケ後、ナデを施している。内面はナデで仕上げられている。胎土は角閃石・長石・石英粒、赤色・白色の砂粒を含む。焼成は良好で橙色を呈する。

甕箱 (第58図1・2)

小児用の甕箱に転用された甕である。1は下甕で完形品である。口縁部は短く外反する。胴部は卵形状をなし、底部は小さく平底である。最大径を胴上部にもつ。大きさは器高44.3cm、口径15cm、胴部最大径30cm、底径5.4cm。口縁部はナデ、胴部外面には縦方向ナデが施され、内面はハケナデ、頸部内面と底部から胴部下端にかけての外面に指頭による整形痕が残る。胎土に角閃石・長石・石英及び茶色の砂粒を多く含む。2は上甕で、口縁部～胴部上半部を欠く。下甕に組み合わせるために加工したものと考えられる。大きさは胴部最大径29.5cm、底径5cmである。1・2は同巧品と思われる。

土坑1 (第59図1～6)

1・2は土師器の坏で、底部を欠く。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部は短く外へ開く。大きさは1が口径11.6cm、2は口径14cmである。調整は共に口縁部に横ナデ、体部にナデを施す。胎土は良好で砂粒を角閃石粒などを微量含む。焼成は良好で橙色を呈す。3は口縁部の一部を欠くがほぼ完形の土師器蓋である。輪状のつまみをもち、天井部はやや高く、口縁部は端部で丸く折り込まれている。大きさは器高7.5cm、口径22.2cmと大型である。調整はつまみと口縁部に横ナデ、天井部外面にヘラ削り後のミガキ、内面はナデ、ミガキが施されている。胎土は良好で角閃石・長

石・石英等の砂粒を微量含む。焼成は良好で橙色を呈すが、天井部から口縁部の一部に黒変がみられる。4は土師器甕の胴部破片で穿孔がみられる。外面にハケ、内面にナデを施す。5は扁平打製石器である。結晶片岩製で縦14.4cm、横6.65cm、厚さ1.4cm、重さ153.7gである。6は剥片未製品と考えられる。素材は姫島産黒曜石で縦8cm、横8.6cm、厚さ2.35cm、重さ113.1gである。共に縄文時代後～晩期の特徴をもつ。

土坑2 (第60図1・2)

1は土師器甕の頸部破片と思われる。調整は内外面共に斜方向ハケ後のナデがみられる。胎土に角閃石・長石粒を多く含む。焼成は良好で暗褐色を呈す。2は甕の下半部を残す。単孔である。調整は外面に斜方向のハケ後ナデ、内面に横方向のナデが施されている。焼成は良好で暗褐色を呈す。

土坑5 (第60図3～10、第61図1～4)

第60図3～9は土師器高坏である。3は1/2個体であるが器形の特徴をみることができる。坏部は底部と体部の境に段が付き、口縁端部で短く外反する。脚部は裾部が大きく広がる。大きさは器高17.5cm、口径18.8cm、脚部径13.4cmである。調整は口縁部がナデ、体部～底部は外面に斜方向ハケ後ナデ、内面は横方向ハケ調整である。脚部は筒部外面に縦方向のハケ、内面に横方向のヘラ削り、裾部内外面にナデがみられる。胎土に角閃石・長石・石英、白色の砂粒を多く含む。焼成は良好で、黄褐色を呈す。4～8は坏部1/3程度の破片である。6は口縁端部が細く外へ伸びるが、他は直線的に立ち上がる。9は口縁部、底部を欠くため形状の詳細は不明である。調整は6の内外面にナデがみられるが、他は器面の荒れが著しく不明である。胎土に角閃石・長石等の砂粒を含む。焼成は概ね良好で、色調は橙色を基調とする。10は土師器の小形壺でほぼ完形品である。体部はやや扁平な球体をなし、口縁部は直線的に外へ開く。調整は内外面共にナデを施しているが底部内面には整形時の指頭痕が残る。器高12.7cm、口径10cm、胴部最大径12.8cmである。胎土に角閃石・長石等の砂粒を多く含む。焼成は良好で淡黄褐色を呈する。第60図11・12、第61図1～4は土師器の甕である。11は1/3個体が残る。胴部は球体をなす。口縁部は外反する。口径16.6cm、胴部最大径20.3cmである。内外面にナデを施すが、胴上部内面に指頭痕が残る。12は口縁部～胴上半部1/2を残す。口径14cmである。外反する口縁部をもつ。調整は胴部外面に縦方向ハケ後ナデ、口縁部、胴部内面にナデを施す。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を基調とする。1は口縁部～胴部の1/3個体である。口縁部はやや長く僅かに外反し、胴部の膨らみは弱い。口径14cmである。調整は器面が荒れており不明であるが、口縁部にはナデが施される。2は口縁部～胴上半部を残す。口縁部は外反し、胴部は最大径を胴上部にもちやや張る。口径17.6cmである。調整は口縁部、胴部内面がナデ、胴部外面は縦方向のハケ目がみられる。3は口縁部～胴上部の1/2が残る。口縁部は強く外反する。口径15.6cmである。調整は口縁部・胴部外面に斜方向のハケ、口縁部内面に横方向のハケ、胴部内面にナデを施す。4は胴部1/3が残る。卵形状に張る。外面は器面が剥落しており不明確であるが縦・斜め方向のハケ目がみられる。胴部最大径18.2cmである。内面に不定方向のハケ後ナデを施す。胎土は1～4のうち2が角閃石・長石を微量、灰色の砂粒を多く含む。他は角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は共に通年で、黄褐色を基調とする。時期は5世紀中頃と考えられる。

西部水田跡 (第61図5～8)

土師器1点、須恵器3点が出土した。5は須恵器の壺底部の破片で、葉竈などが想定される。高台は矩形をなし、体部下端は緩く丸みを帯びて立ち上がる。調整は横ナデで仕上げられている。底

径9.1cmである。胎土に長石・石英粒が含まれ、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。底部外面に「X」のヘラ記号が刻まれている。6は須恵器高杯の脚筒部である。脚部の形状は細いが前代に比べ低くなっている。胎土に石英粒が含まれ、焼成は良好で暗灰褐色を呈する。7は土師器杯である。底部を欠くが器形は確認できる。体部は丸く湾曲して立ち上がる。内外面共にナデが施されている。口径14.4cmである。胎土に角閃石・長石・石英粒が含まれ、焼成は良好で橙色を呈する。8は須恵器甕の口縁部〜胴部1/4個体である。口縁部はくの字状に屈曲し、中程で肥厚する。胴部は張り力が弱い。調整は口縁部内外面に横ナデ、胴部は外面に粗い板状のハゲ目調整、内面には当具痕が残る、ナデ調整が施されている。口径21cmである。胎土に角閃石・長石・石英粒が含まれ、焼成は堅緻であるが、色調は外面が暗灰褐色、内面は橙色を呈する。時期については、6が7世紀前半、7が8世紀前半、5・8が8世紀中頃と考えられる。

東部水田跡 (第61図9)

関西系陶器の小坏である。器高3cm、口径5.2cm、底径2.2cmの大きさをもつ。内外面に灰釉がみられる。時期は18世紀後半〜19世紀前半である。

焼土遺構1 (第62図1〜8)

1・2は土師器蓋の口縁部〜天井部の破片である。天井部と口縁部の境は明瞭で、口縁部はS字状のカーブを描き丸い端部に至る。調整は天井部の切離し技法を確認できないが、概ね横ナデである。胎土に角閃石・長石等の砂粒を含む。焼成は良好で橙色を呈す。3・4・5は土師器坏である。3は完形品で底部から丸く立ち上がる。器高3.7cm、口径11.6cm、底径4.6cmである。口縁部〜体部は横ナデ、底部〜体部下端の外面にかけて回転ヘラ削りが施されている。4はほぼ完形品で体部は直線的に立ち上がる。底部は右回転ヘラ削りである。口縁部〜体部は横ナデ、底部内面は多方向のナデとなっている。器高3.3cm、口径12.8cm、底径8.2cmである。5は口縁部破片であり、口径14.6cmを復元できる。調整は横ナデ。3〜5の胎土は角閃石・長石等の砂粒を含む。焼成は3・5が良好、4はやや不良、色調は黄褐色を基調とする。6は須恵器長頸壺の肩部〜体部が残ったものである。肩部は稜をもち張る。体部下半に平行タタキが残る。他の部位にナデが施されている。胎土に白色砂粒を含む。焼成は良好で堅緻、暗灰褐色を呈す。7は土師器甕口縁部〜胴上部の破片である。口縁部は短く外傾し、胴部は張りのない形状を呈す。調整は器面の荒れのため不明。胎土に角閃石・長石等の砂粒を多く含む。焼成は通有で、外面橙色、内面暗灰褐色を呈す。8は口縁部破片で7と同物品と思われる。

L区 (第62図9・10)

9は土師器杯のほぼ完形品である。底部は回転ヘラ削りであり、体部は横ナデ調整となっている。器高3.5cm、口径13cm、底部7cmである。体部の器壁は薄く、底部は厚い。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で明黄褐色を呈す。10はL-VI区から出土した須恵器壺である。口縁部の大半を欠く。やや扁平な球体をなす体部に内湾気味の口縁部をもつ。頸部と体部中央にそれぞれ二条の突帯を巡らせその間に5本1単位の波状文が施されている。調整は内外面共に横ナデである。器高15.7cm、口径9.6cm、体部最大径は中位にもち16.4cmである。胎土は良好であり、砂粒を少量含む程度。焼成は良好、暗灰色を呈す。

P区 (第62図11・12)

11は須恵器壺の底部1/3である。高台が長く外へ広がる。高台径9.2cmである。調整は横ナデ。

胎土に白色砂粒を含む。焼成は良好で暗灰色を呈す。12は土師器瓶の胴部下端1/4が残る。単孔である。調整は横ナデ。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好、色調は外面暗黄褐色、内面明赤褐色を呈す。

S・R区 (第62図13~18、第63図1~17)

第12図13・14は蓋坏の身である。共に1/2個体である。口縁部はやや長めで、内傾する。底部はやや深めである。底部に回転ヘラ削りが施されるが、14は中央に回転ヘラ切り痕が残る。大きさは13が口径11.4cm、器高5.2cm、14は口径11.7cm、器高4.5cmである。調整は共に口縁部へ底部に横ナデが施されている。胎土に石英粒・白色砂粒を含む。焼成は13が良好で、灰色、14は不良で淡灰色を呈す。坏身の時期は器形の特徴から6世紀後半といえる。15~18はミニチュアのは手づくね土器である。底部が尖り鉢形の形状を示す。指オサエで整形されている。大きさは、器高3cm前後、口径3.2cm~4.4cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。第63図1~8は土師器坏である。1はほぼ完形品で他は1/2個体である。1~4は器高が3.1cm~3.5cm、口径13.6cm~14.6cmと浅い形状を呈し、口縁部が肥厚する。5~8は器高4.5cm前後、口径14.8cm~15.6cmとやや深い形状を呈す。8は口縁端部が短く外反する。底部は回転ヘラ切り離しであるが、その後調整として1は器面の荒れのため不鮮明であるが回転ヘラ削り状の調整、3・4はナデを施している。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好、色調は淡黄色~橙色を呈す。9は土師器蓋で口縁部を欠く。つまみは擬宝珠が退化し低くなった形状を呈す。調整は横ナデである。焼成は良好、淡黄褐色を呈す。10は高台付椀の底部破片である。調整は横ナデ。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で、橙色を呈す。11は土師器皿1/2個体である。口縁部は外へ大きく開き、浅い形状を呈す。器高2cm、口径18.8cmである。12は土師器高坏の脚部である。脚部は八字状に開き、端部で短く屈曲する。脚部径は13cm程度に復元できた。器面に横ナデが施されている。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で橙色を呈す。13は弥生代中期後半の複合口縁蓋の口縁部破片である。上部に円形浮文、周縁に連続三角文が巡る。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で淡灰褐色を呈す。14は土師器の小形甕である。胴部下半を欠く。胴部はやや張り、口縁部は緩く外反する。器面にナデが施される。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は通有で淡黄褐色を呈す。15は土師器甕1/2個体である。底部は丸底を呈し、胴部は膨らみをもつ。口縁部はやや長く、く字状に屈曲する。調整は内外面共に横方向のナデを施すが、胴部中位以下の外面に横方向のカキ目状のハケ整形がみられ、内面の底部から胴下半部に指頭痕が残る。器高26cm、口径23.5cm、胴部最大径中位にもち22cmである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。16・17は中国龍泉窯系青磁碗の底部破片である。時期は、16が13世紀~14世紀、17は13世紀とされる。

U区 (第64図1~5)

1はミニチュアの手づくね土器の完形品である。器高2.2cm、口径2.3cmである。指オサエが顕著にみられる。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を少量含む。焼成は良好で暗黄褐色を呈す。2・3・4は土師器高坏である。2は完形品で坏部が大きく広がり、脚部は裾部が筒部から屈曲して外へ伸びる。器高12.7cm、口径14.6cm、裾部径10.4cmである。調整は内外面ともナデを施すが坏部内面に斜め方向のハケ目が残る。筒部内面はヘラ削りで整形されている。3・4は脚部裾付近を欠く。3は坏体部に稜をもつ。3・4は筒部内面にしぼり痕が残る。口径は3が12.2cm、4は19.2cmである。胎土は3点共に角閃石・長石・石英等の砂粒を多量に含む。焼成がほぼ良好で、

淡黄褐色、橙色を呈す。5は土師器壺の破片である。長胴形をなし、口縁部はやや短く外反する。口径25cmである。器面調整は胴部に縦方向のハケ目を残すが、ナデである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多量に含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。

表探（第14図6～12）

6は須恵器蓋環の身の破片である。器高3.5cm程度、口径13.2cmと浅い形状を呈す。底部外面は回転ヘラ削り、体部・口縁部はナデ調整である。胎土に長石等の砂粒を含む。焼成は良好で暗灰褐色を呈す。時期は6世紀後半である。7・8・9は土師器環である。7は口縁部～体部の破片である。口径12cmを復元できた。8は体部が外に開く形状を呈す。器高3.6cm、口径14cmである。底部は回転ヘラ切り未調整、体部は横ナデである。9は底部を欠くが、体部は内湾気味に立ち上がる。3点共に胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は良好で淡黄褐色、橙色を呈す。10は土師器高環の坏部破片である。体部下端に稜をもつ。口径17.4cmである。調整は器面が荒れており、不詳である。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を含む。焼成は通有で赤茶褐色を呈す。11は土師器壺の底部を欠く、1/2個体である。球体をなす体部に太い頸部をもち、口縁部は外反する。調整にはナデがみられる。口縁部内外面に赤色顔料が塗布されている。口径10.2cm、体部最大径を中位にもち13.1cmである。胎土に角閃石を少量、長石を多量に含む。焼成は良好で黄褐色を呈す。12は土師器鉢の破片で底部を欠く。体部内湾気味に立ち上がる。口縁部は端部で短く上に屈曲する。口径は21.4cmを復元できた。調整は横ナデである。胎土に角閃石・長石・石英等の砂粒を多く含む。焼成は良好で黄橙色を呈す。

第5節 自然科学的調査

—清水遺跡の古環境変遷と稲作の様態—

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

清水遺跡は、乙津川左岸の沖積低地から低位段丘面に立地し、発掘調査により、弥生時代後期および古代の集落跡などが確認されている。また、低地部では8世紀頃と想定される水田跡が確認され、稲作が行われていたと推定されている。

そこで、当時の低地部での稲作の様態を検討するとともに、古環境変遷に関する情報を得るために、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

調査区内には、奈良・平安時代以前に形成された旧河道が認められており、主に砂やシルトで埋積されている。旧河道埋積物の礫混じり黒色粘質土層上位には、8世紀中頃と想定される水田(水田II)、その上位に水田層(水田I)と考えられている土層が認められる。これらの層は、砂層に覆われる。また、これらの水田層やその上下の土層には、酸化鉄や酸化マンガンの集積部が認められる。

試料は、堆積物が良好に観察された第1トレンチおよび第2トレンチ断面でそれぞれ2ヶ所の採取地点が設定され、層位試料が採取された (fig. 1)。その中から、水田層を中心に分析試料を選出した。このうち、第1トレンチ第1地点の試料番号6・同第2地点の試料番号7、および第2トレンチの試料番号2が水田II、また第1トレンチ第1地点の試料番号2、同第2地点の試料番号2が水田Iに相当する (fig. 2)。

分析項目と点数は、珪藻分析が合計6点、花粉分析が合計4点、植物珪酸体分析が合計10点である。なお、各分析項目で共通する試料は分割して用いた。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿量で約7g秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法、傾斜法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の視線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。種の同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K. Krammer (1992) などを用いる。

同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、珪藻の生態性の解説を表1に示す。また、産出した化石が現地性の化石か、他の場所から流入・堆積した異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率を求め、考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、産出率2%以上の主要な分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。堆積環境の解析にあたっては、安藤 (1990) の環境指標種、伊藤・堀内 (1991) を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛・比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃

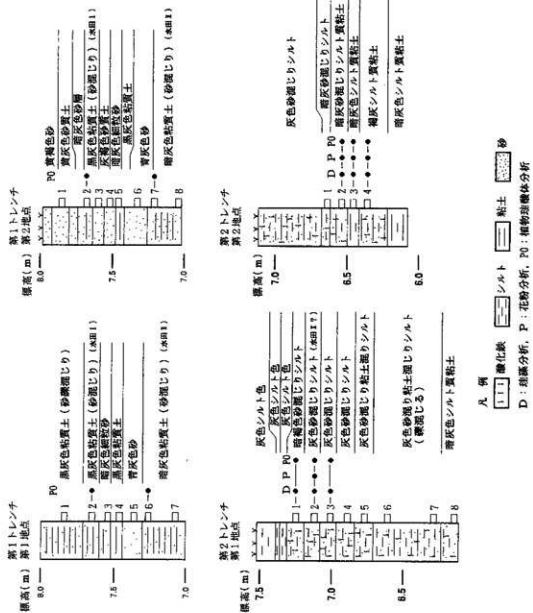


fig.1 第1・2トレンチの横式柱状図と分析試料採取層位

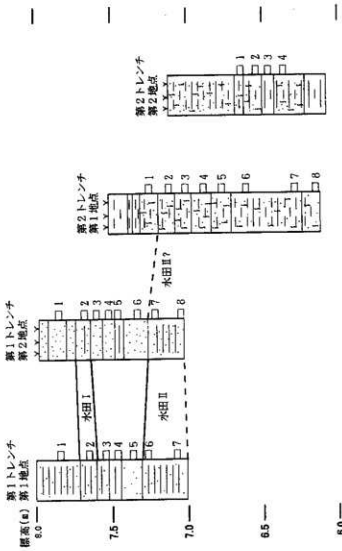


fig.2 第1・2トレンチの層序対比

集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、出現個体数の一覧表として表示し、木本花粉が100個体以上検出された試料については、花粉化石組成図を作成する。図中の出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として、百分率で算出したものである。なお、100個体未満のものは、組成が歪曲している恐れがあるため、検出した種類を+で表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬 (1986) の方法を参考にした。試料約5gについて、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行って植物珪酸体を分離・濃集する。これを被検し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プレウラックスで封入し、プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を+で示すにとどめた。

3. 微化石の産状

(1) 珪藻化石

結果を表3、fig.3に示す。珪藻化石は、第2トレンチ第1地点の試料番号2、第2地点の試料番号2と試料番号3から産出するが、それ以外の3試料では少ない。化石が産出した試料の完形殻の出現率は、20~50%と低い。産出種の全ては淡水生種で構成され、産出分類群数は25属100種類である。淡水生種の生態性 (塩分、水素イオン濃度、流水に対する適応度合い) は、どの地点も首尾不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性が優占することが特徴である。第1地点の試料番号2は、流水不定性の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Gomphonema parvulum*、*Synedra ulna*、陸生珪藻のB群 (伊藤・堀内、1991) の *Navicula confervacea* が13~20%と多産する。このうち、*Navicula confervacea* は、有機汚濁の進んだ富栄養水域に特徴的な好汚濁性種 (Asai, K. & Watanabe, T., 1995) でもある。

第2地点の試料番号2と試料番号3は珪藻化石群集が近似しており、水生珪藻と陸生珪藻がほぼ半数ずつ産出する。好汚濁性種でもある陸生珪藻のB群の *Navicula confervacea* が、第1地点と同様に多産する。また、水生珪藻では好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta*、中~下流性河川指標種群 (安藤、1990) の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、好止水性で沼沢湿地付着生種群 (安藤、1990) の *Pinnularia acrosphaeria* が5%前後産出する。陸生珪藻では、耐乾性の強い陸生珪藻A群 (伊藤・堀内、1991) の *Navicula contenta*、*N.mutica* が10%程度産出する。

(2) 花粉化石

結果を表4、fig.4に示す。以下に、地点別に花粉化石の産状を述べる。

第2トレンチ第1地点の試料番号2の花粉・胞子化石の保存状態は、あまり良好ではない。全花粉・胞子化石の中で木本花粉の占める割合は20%程度で、草本花粉とシダ類胞子がそれぞれ40%である。木本花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優占し、マツ属、モミ属、ツガ属などの針葉樹類を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、サナエタ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属などが検出される。シダ類胞子のミズワラビ属が特徴的な産出を示す。栽培植物のソバ属が検出される。

第2地点では、試料番号4から花粉・胞子化石がほとんど検出されず、わずかに検出されたものも保存状態が悪い。試料番号2と試料番号3は、花粉・胞子化石の保存状態はほぼ良好で、花粉化石組成も互いに近似している。全花粉・胞子化石の中で木本花粉の占める割合は35%程度で、草本花粉が15~30%、シダ類胞子が35~50%を占める。木本花粉では、マツ属が多産し、次いでコナラ属アカガシ亜属が高率に出現する。モミ属、ツガ属などの針葉樹の出現率も高い。草本花粉では、イネ科が多産する。試料番号3からはキンボウゲ科が塊状で検出され、栽培植物のソバ属も検出される。

(3) 植物珪酸体

結果を表2、fig.5・6に示す。第1・2トレンチの各試料からは植物珪酸体が検出されるが、全体的に保存状態が悪く、検出個数の少ない試料も幾つか認められる。

第1トレンチでは、第1地点の試料番号6と試料番号2で栽培植物のイネ属の葉部に形成される機動細胞珪酸体の出現率が高い。また、タケ亜科短細胞珪酸体の産出も目立つ。その他、ヨシ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。

第2地点では、試料番号7で短細胞珪酸体の検出個数が少ないが、その中にはタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、タケ亜科、ヨシ属なども認められる。また、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が高い。試料番号2でも、短細胞珪酸体の検出個数が少なく、その中にはタケ亜科の産出が目立つ。また、ウシクサ族機動細胞珪酸体の出現率が高く、イネ属機動細胞珪酸体がこれに続く。

なお、各試料からはイネ科起源の植物珪酸体の他に、樹木珪酸体の第IVグループ(近藤・ピアソン, 1981)が検出される。第IVグループは不規則な紡錘形を呈するもので、シイノキ科、ツツジ科、モクレン科などの葉部に形成される。

第2トレンチでは、第1地点の試料番号3で検出個数が少ないが、その中にはタケ亜科短細胞珪酸体とイネ属機動細胞珪酸体の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族なども認められる。上位の試料番号2・1ではタケ亜科短細胞珪酸体やイネ属機動細胞珪酸体の優占する組成が認められ、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科がこれに続く。

第2地点では試料番号4で検出個数が少ないが、その中にはタケ亜科短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の産出が目立ち、イネ属やヨシ属、ウシクサ族なども認められる。上位の試料番号3と試料番号2ではタケ亜科短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体やイネ属機動細胞珪酸体の優占する組成が認められ、ヨシ属、ウシクサ族、

種 類	第1トレンチ				第2トレンチ			
	1地点		2地点		1地点		2地点	
	2	8	2	7	1	2	3	4
イネ科葉部機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	4	12	11	5	13	15	2	23
タケ亜科	23	96	41	39	86	123	33	59
ヨシ属	-	0	8	6	1	2	4	14
ウシクサ族コブナギサ属	1	12	2	8	4	4	2	8
ウシクサ族スズキ属	10	28	20	5	18	11	2	23
ウシクサ族スズキ亜科	9	18	2	11	19	11	8	12
不明キコ型	6	18	13	20	20	23	5	67
不明ヒシノ型	3	10	16	6	15	11	3	17
不明ダンチク型	10	17	20	15	21	10	2	12
イネ科葉部機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	71	64	23	31	52	56	10	54
タケ亜科	20	24	21	30	31	25	9	18
ヨシ属	4	8	0	5	6	-	-	5
ウシクサ族	30	35	43	43	17	12	3	17
シバ属	-	-	2	-	2	-	4	3
不明	16	23	33	17	23	19	6	12
合 計	8	16	22	11	8	4	9	4
イネ科葉部機動細胞珪酸体	72	221	125	115	200	210	62	233
イネ科葉部機動細胞珪酸体	141	154	134	126	131	112	28	107
総 計	213	375	259	241	339	328	90	340
不明系別	8	16	22	11	8	4	9	4

表2 第1、2トレンチの植物珪酸体分析結果

種 類	生 産 性		環境 指標種	第2トレンチ						
	塩分	pH		第1地点			第2地点			
				1	2	3	1	2	3	
<i>Achnanthes inflexa</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	-	-	5	6	-
<i>Achnanthes oestrupii</i> (Cl.) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	1	-	-
<i>Achnanthes tropica</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	1	-
<i>Aphora normanii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	1	-
<i>Aphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	16	-	2	4	-
<i>Aphora pediculus</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	T	-	-	-	-	1	-
<i>Aulacoseira crenulata</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	5	2	-
<i>Caloneis bacillus</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	1	-
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	1	-	2	2	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	1	3	-
<i>Cocconeis disculus</i> Schumann	Ogh-ind	al-il	l-bi	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1	-	1	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	2	-	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerwald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleicher	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	5	3	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	-	1	-
<i>Diatomeila balfouriana</i> (W. Smith) Grovill	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Wilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	3	3	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	2	2	-
<i>Diploneis yatakensis</i> Morikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	2	-	-
<i>Epithemia adnata</i> (Kuetz.) Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind	-	-	-	-	-	1	-
<i>Epithemia turgida</i> (Ehr.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia arcus</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	1	-	-	1	-
<i>Eunotia gracialis</i> Meister	Ogh-hob	ind	l-bi	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	1	4	-
<i>Eunotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	-	-	-	1	-	-
<i>Eunotia praerupta</i> var. <i>bidens</i> Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O	-	1	-	-	-	-
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	3	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>rupensis</i> (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria parasitica</i> (W. Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> var. <i>lanzettula</i> (Schum.) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	1	-	-
<i>Fragilaria vaucheriae</i> (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	-	-	-	1	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Kraske	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema angustum</i> Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	2	2	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	2	-	1	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	-	-	1	2	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	12	-	10	15	-
<i>Gomphonema pusillum</i> (Grun.) Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	3	-
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	1	2	-
<i>Gyroneis scalptroides</i> (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	-	1	-	11	4	-
<i>Meridion circulae</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	-	-	-	1	1	-
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	1	-	-	1	-
<i>Navicula brekkaensis</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	1	-
<i>Navicula bryophila</i> Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula confervacea</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	-	18	-	28	44	-
<i>Navicula constans</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, T	-	-	-	14	6	-
<i>Navicula elgianaensis</i> (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O, U	-	-	-	5	3	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>canesta</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	-
<i>Navicula elginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krauss.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	8	11	-
<i>Navicula ignota</i> Kraske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula laevissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	2	3	-

表3 第2トレンチの珪藻分析結果(1)

種 類	生 態 性			環境 指標種	第2トレンチ						
	塩分	pH	流水		第1地点			第2地点			
					1	2	3	2	3	4	
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	-	2	-	24	15	-	-
<i>Navicula mutica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula pupula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	S	-	1	-	4	2	-	-
<i>Navicula radiosa</i> fo. <i>nipponica</i> Savortzow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	-	-
<i>Navicula tokyoensis</i> H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	-	-	-	2	-	-	-
<i>Navicula trivialis</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	1	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, U	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium affine</i> var. <i>longiceps</i> (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Kramer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	-	-	-	3	1	-	-
<i>Neidium bisulcatum</i> (Lagerst.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	-	-	-	1	1	-	-
<i>Nitzschia brevisissima</i> Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	RB, U	-	-	-	-	1	-	-
<i>Nitzschia denticula</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RA, U	-	1	-	-	-	-	-
<i>Orthoseira roesemana</i> (Rabh.) O' Neira	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia acrosphaeria</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	2	-	4	7	-	-
<i>Pinnularia acuminata</i> W. Smith	Ogh-ind	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>rectangularis</i> Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	1	1	-	-
<i>Pinnularia braunii</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>elliptica</i> (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	-	5	-	-	3	-	-
<i>Pinnularia imperatrix</i> Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	1	1	-	1	1	-	-
<i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	11	-	-
<i>Pinnularia schroederii</i> (Müll.) Kramer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	10	-	-	-
<i>Pinnularia streptorapha</i> Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB, S	-	-	-	2	3	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	2	9	4	-	1	2	-
<i>Rhopelodia gibba</i> (Ehr.) O. Müller	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Rhopelodia gibberula</i> (Ehr.) O. Müller	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	1	-	2	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	1	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis kringeri</i> Patrick	Ogh-ind	ind	unk	T	-	-	-	-	1	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	3	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Soriella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	-	-	1	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	12	4	1	1	-	-
海水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0	0	0
淡水生種合計					7	101	14	198	205	3	-
珪藻化石総数					7	101	14	198	205	3	-

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C.R. : 流水に対する適応性
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	al-bi : 真中性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	al-il : 好中性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
	ac-bi : 好酸性種	r-bi : 真流水性種
	unk : pH不明種	unk : 流水不明種

環境指標種

K : 中～下流性河川指標種 O : 湖沼湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)

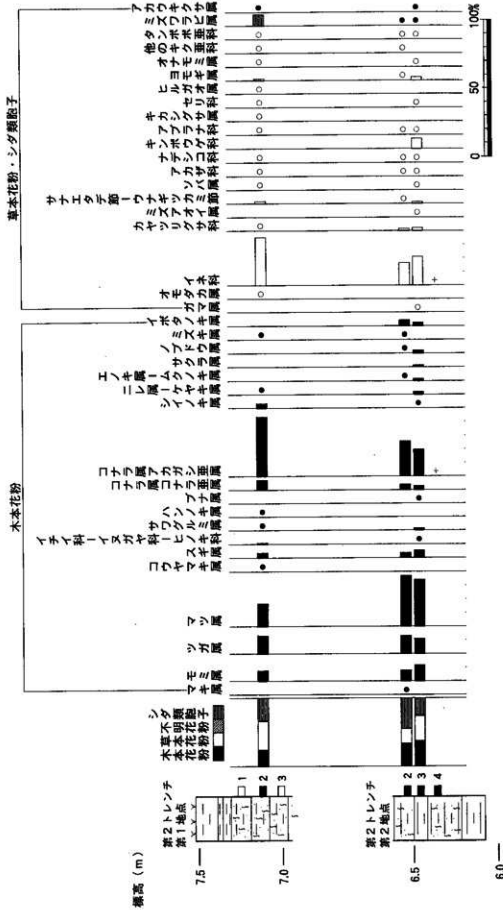
S : 好汚濁性種 U : 広適応性種 T : 好清水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)

RI : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, 伊藤・堀内, 1991)

表3 第2トレンチの珪藻分析結果 (2)

種 類	第1地点 試料番号	第2トレンチ 第2地点		
		2	3	4
木本花粉				
マキ属	-	2	-	-
モミ属	15	17	28	-
ツガ属	26	29	25	-
マツ属	33	81	82	-
コウヤマキ属	1	-	-	-
スキ属	7	8	13	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	2	-	1	-
ヤマモモ属	1	-	-	-
サワグルミ属	1	-	4	-
ハンノキ属	1	-	-	-
ブナ属	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	14	9	7	-
コナラ属アカガシ亜属	86	56	47	1
シイノキ属	7	-	1	-
ニレ属-ケヤキ属	1	-	5	-
エノキ属-ムクノキ属	-	2	4	-
サクラ属	-	-	4	-
カエデ属	-	-	1	-
ノブドウ属	-	2	5	-
グミ属	2	1	2	-
ウコギ科	-	-	2	-
ミズキ属	1	1	-	-
イボタノキ属	-	9	6	-
スイカズラ属	-	1	1	-
草本花粉				
ガマ属	-	-	1	-
オモダカ属	2	-	-	-
イネ科	288	107	134	2
カヤツリグサ科	4	10	14	-
ミズアオイ属	-	-	1	-
クワ科	-	-	1	-
サナエタデ節-ワナギツカミ節	14	3	8	-
ソバ属	1	-	2	-
アカザ科	5	1	2	-
ナデシコ科	7	2	3	-
キンボウゲ科	-	-	47	-
アブラナ科	1	2	3	-
マメ科	1	-	-	-
キカシグサ属	1	-	-	-
セリ科	1	-	1	-
ヒルガオ属	1	-	-	-
ヨモギ属	9	5	15	-
オナモミ属	4	-	2	-
他のキク亜科	4	3	-	-
タンポポ科	2	4	1	-
不明花粉	4	-	5	-
シダ類胞子				
ミズウラボシ属	70	1	2	-
アカウキクサ属	1	-	1	-
他のシダ類胞子	201	290	158	3
合 計				
木本花粉	198	218	240	1
草本花粉	345	137	235	2
不明花粉	4	0	5	0
シダ類胞子	272	291	161	3
総計(不明を除く)	815	646	636	6

表4 第2トレンチの花粉分析結果



出現率は、木本花粉は木本花粉總数、草本花粉・シダ類孢子は總数より不明花粉を除く數を基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の種類を示す。

fig.4 第2トレンチの主要花粉化石群集

イゴツナギ亜科がこれに続く。これは、第1地点の試料番号3~1に認められた組成と似ている。

これらの試料にも、樹木珪酸体の第IVグループがわずかに認められる。

4. 考察

(1) 堆積環境

今回調査した堆積物は、主に砂やシルトで構成される。第1・2トレンチとも、この堆積物中には水田層やこれを被覆する砂層が認められ、稲作が行われていた時に河川の氾濫の影響があったことがうかがえる。これらの堆積物中では、各微化石の産状でも述べたように、水田Ⅰ・水田Ⅱに相当する試料や第2トレンチ試料番号2と試料番号3で微化石が産出したが、それ以外の層では検出個数が少なかったり、保存状態が悪かった。層相を考慮すれば、洪水の影響を受けて堆積物中に微化石が取り込まれにくかったと思われる。

ところで、第2トレンチの水田Ⅱとされる土層では、流水不定性種や止水性種が検出されたが、この中には沼よりも浅く、水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂する沼沢地および更に水深の浅い湿地に優占的に見られる沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）が含まれる。この点から、本層が堆積した頃には、沼沢～湿地のような状態にあったことが推定される。

また、第2地点の試料番号2と試料番号3では流水不定性種や止水性種が検出され、河川中～下流部や河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種群（安藤、1990）を含む流水性種も産出した。これより、水の流れ込みのある沼沢～湿地のような状態にあったことが推定される。また、陸生珪藻A群の産出から、本地点では水が干上がりが好気的環境となったこともしばしばあったと考えられる。

第2トレンチ第1地点試料番号2（水田Ⅱ）と第2地点の試料番号2・試料番号3では好汚濁性種が多産した。これまでの調査事例では、特に奈良・平安時代以降の水田跡やその可能性のある遺構では水質が富栄養である場合が多い（例えば、バリノ・サーヴェイ、1986・1988・1992・1995）。この要因のひとつとして、当時の水田で施肥などにより有機塩類が供給されたことが挙げられる。今回、好汚濁性種の多産や沼沢湿地付着生種群の産出が見られ、また後述のようにイネ属植物珪酸体の多産が認められることから、ここでの水質汚濁は稲作に伴う施肥などの影響が大きいものと推測される。

(2) 稲作について

水田Ⅱは第1トレンチでは畦畔が認められ、第2トレンチ第1地点でも水田Ⅱと思われる水田層が観察される。これらの中で、第2トレンチ第1地点では草本花粉の中でイネ科花粉が多産するが、保存状態が悪いためにイネ属同定はできず、イネ属の有無は不明であった。しかし、これらの層ではイネ属機動細胞珪酸体の産出が目立ち、その出現率は40%前後であった。この出現率は、現在のイナワラ堆肥運用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壌表層でイネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%を示す調査例（近藤、1998）と比較しても、高い出現率である。また、イネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が共に認められ、土層内にイネ属の植物体が混入していると考えられる。イネ属植物珪酸体の産状から考慮すれば、水田Ⅱでは稲作が行われていたと考えられ、発掘調査所見を裏付ける結果である。

第2トレンチ第2地点では、試料番号3と試料番号2の採取層位でもイネ属が多産することから、稲作が行われていたと考えられる。また、花粉化石の組成からみて、水田Ⅱと同時期の堆積層かもしれない。ただし、標高は第1地点と比較して約50cm低く、地形的・層位的検討を要する。

また、花粉化石や植物珪酸体の産状から、タケ亜科やヨシ属、ウシクサ族などのイネ科、サナエタデ節～ウナギツカミ節、ヨモギ属などが生育していたことが考えられる。第1地点で水生シダ類

のミズワラビ属が多産したが、全体の保存状態からみて、外膜が厚く風化に耐性のあるシダ類胞子が多く残っているとも考えられる。また、第2地点ではキンボウゲ科の花粉化石が塊状で検出され、近辺に生育していたと思われる。

一方、第1トレンチに認められた水田Ⅰでもイネ属機動細胞珪酸体の多産がみられ、イネ属葉部の2形態の植物珪酸体が認められた。このような植物珪酸体の産状から、水田Ⅰでも稲作が行われていたと考えられる。また、少なくともイネ科に関しては、水田Ⅱの頃と周辺に生育する種類に変化はなかったと考えられる。

なお、第2トレンチ第1地点の試料番号2と第2地点の試料番号3から、わずかながらもソバ属の花粉化石が検出された。ソバ属は花粉生産量の少ない虫媒花であることから、花粉が検出された地点近くに母植物が存在していた可能性は高い。したがって、8世紀頃には本地点に近い場所でソバ栽培が行われていたことが示唆される。

(3) 森林植生

木本花粉の組成より、8世紀頃の本遺跡周辺の森林植生について考察する。第2トレンチ第1地点の試料番号2では、コナラ属アカガシ亜属が優占し、マツ属、モミ属、ツガ属などの針葉樹も比較的高率に出現する組成であった。第2地点の試料番号3と試料番号2でも、マツ属とアカガシ亜属の量比が異なっているが、その他の種類構成はほぼ同様の結果が得られた。また、シノキ科、ツツジ科、モクレン科などに由来すると考えられる樹木珪酸体（第Ⅳグループ）もわずかであるが認められた。

北九州地方での花粉分析結果では、奈良・平安時代の森林植生はシノキ属とアカガシ亜属の花粉化石が卓越することから、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）であったと推測されている（黒田・畑中、1979・Hatanaka, 1985・野井、1987）。特に、大野川河口付近のボーリング調査の成果では、シノキ属は低率でアカガシ亜属が卓越する組成が得られている（野井、1987）。また、北九州で人間の自然植生への干渉が顕著となるのは約1500年前以降で、これはマツ属やシダ類のウラジロ属、栽培型のイネ科花粉の増加を特徴としている（Hatanaka, 1985）。

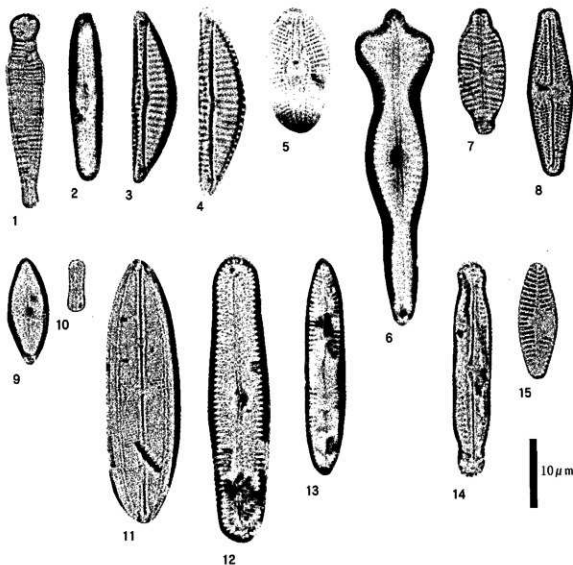
今回の調査を実施した8世紀頃の水田層は、花粉化石組成より照葉樹林が衰退し、マツ属が増加を始める時期に相当すると考えられ、既存の分析結果とも調和的である。

（平成8年3月作成）

（引用文献）

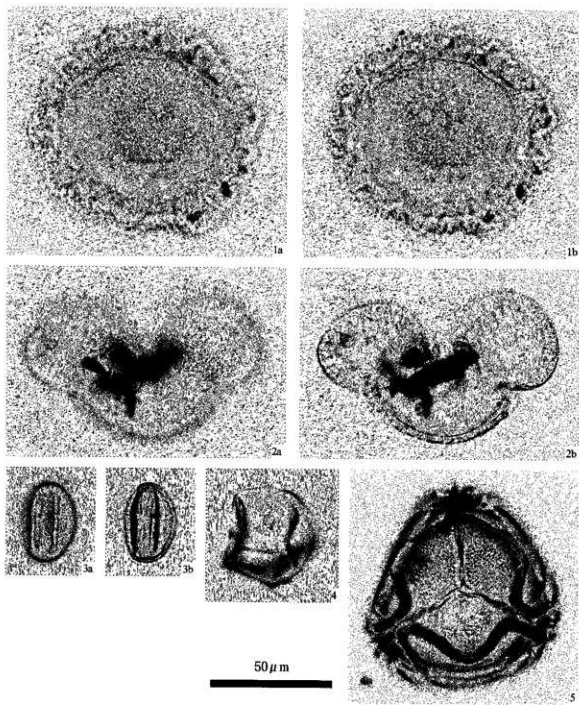
- 安藤-男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と占環境復元への応用。東北地理，42，p.73-88。
- Asai, K. &, Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- Hatanaka Ken-ichi (1985) PALYNOLOGICAL STADIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WURM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. *Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University (Series B)*, 18, p.29-71.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition. Teil I ~ III, Band. 15, p.131-506, Band. 16, p.1-155, 274-394.
- Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen. Deutschlands, Oesterreich und der Schweiz unter

- Berücksichtigung der übrigen Länder Euopas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. Teil. 2. Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Band. VI., 845p., OTTO KOELTZ SCIENCE PUBLISHERS.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 近藤謙三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 鉢師屋遺跡群十二遺跡一長野県北佐久郡代田町十二遺跡発掘調査報告書, p.377-383. 御代田町教育委員会.
- 近藤謙三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.
- 近藤謙三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae. Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353. BERLIN·STUTTGART.
- 黒田登美雄・畑中健一 (1979) 花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷. 花粉, 13, p.3-8
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 野井英明 (1987) 大分市大野川河口付近の地下第四系の層序と花粉分析—特に異常に厚い沖積層の形成について—. 「九州後期新生代火山活動」, 地研専報33, p.161-169.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1986) 中村遺跡. 関越自動車道 (新潟線) 地域埋蔵文化財発掘調査報告書 (KC-Ⅲ), 渋川市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団, p.541-542.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1988) 真光寺・広袴遺跡群試料花粉分析報告. 東京都町田市真光寺・広袴遺跡群Ⅱ, 鶴川第二地区遺跡調査会, p.225-283.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1992) 二之宮千足遺跡の古環境解析. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集, 二之宮千足遺跡, 一般国道17号 (上武道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (自然科学・分析編). 建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団, p.61-111.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1995) 第三章 瀬名遺跡の縄文時代後晩期以降の古環境変遷. 静岡県埋蔵文化財調査研究所報告第61集, 瀬名遺跡Ⅳ (自然科学編) 静岡ハイパス (瀬名地区) 埋蔵文化財調査報告書4, 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所, p.69-210.



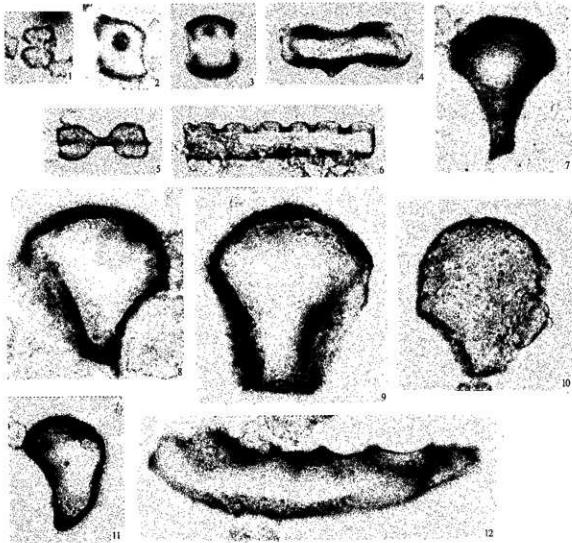
1. *Moridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck (第2トレンチ2地点; 2)
2. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (第2トレンチ2地点; 3)
3. *Cymbella silesiaca* Bleisch (第2トレンチ2地点; 2)
4. *Cymbella silesiaca* Bleisch (第2トレンチ2地点; 3)
5. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (第2トレンチ2地点; 2)
6. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (第2トレンチ2地点; 3)
7. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (第2トレンチ2地点; 2)
8. *Navicula mutica* Kuetzing (第2トレンチ2地点; 2)
9. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (第2トレンチ1地点; 2)
10. *Navicula contenta* Grunow (第2トレンチ2地点; 2)
11. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (第2トレンチ2地点; 3)
12. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (第2トレンチ2地点; 2)
13. *Navicula schoenfeldii* Hustedt (第2トレンチ2地点; 2)
14. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg (第2トレンチ2地点; 3)
15. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (第2トレンチ2地点; 2)

Phot.1 珪藻化石



1. ツガ属 (第2トナリ2地点 ; 2) 2. マツ属 (第2トナリ2地点 ; 2)
 3. コナラ属アカガシ亜属 (第2トナリ2地点 ; 2) 4. イネ科 (第2トナリ2地点 ; 2)
 5. ミズワラビ属 (第2トナリ1地点 ; 2)

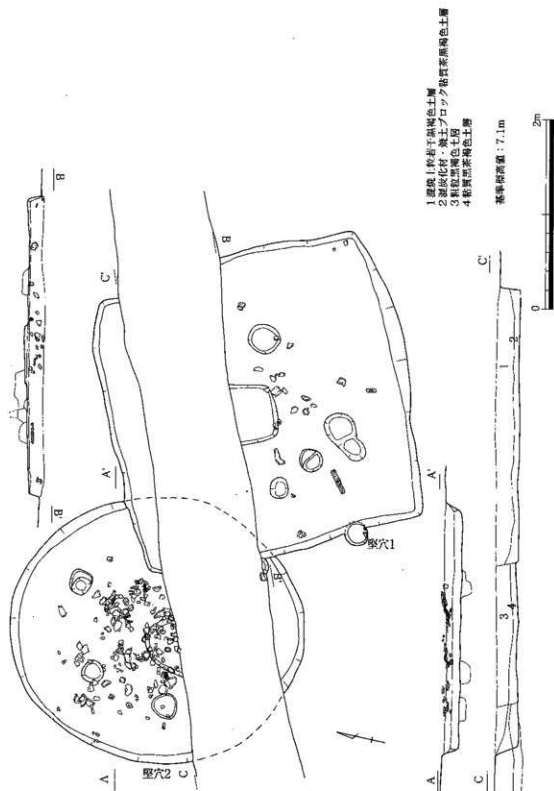
Phot.2 花粉化石



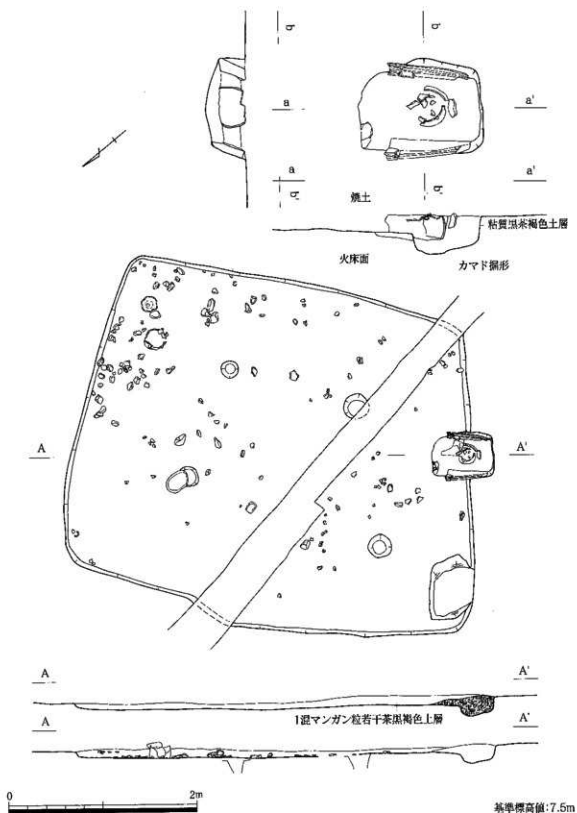
50 μm

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (第2トレンチ地点; 1) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (第2トレンチ地点; 1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体 (第2トレンチ地点; 3) | 4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (第2トレンチ2地点; 3) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (第2トレンチ地点; 3) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸列 (第2トレンチ地点; 3) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (第2トレンチ2地点; 3) | 8. イネ属機動細胞珪酸体 (第2トレンチ1地点; 1) |
| 9. タケ亜科機動細胞珪酸体 (第2トレンチ地点; 1) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (第2トレンチ1地点; 3) |
| 11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (第2トレンチ2地点; 3) | 12. 樹木珪酸体 (IV型) (第2トレンチ地点; 1) |

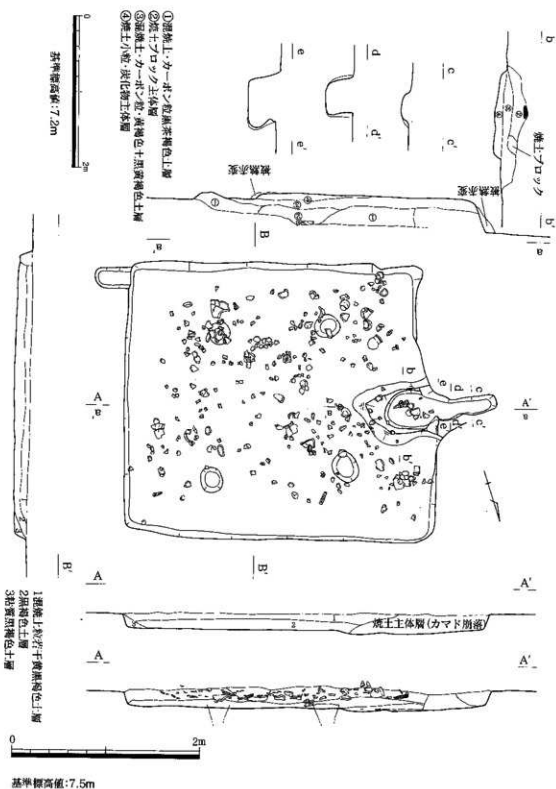
Phot.3 植物珪酸体



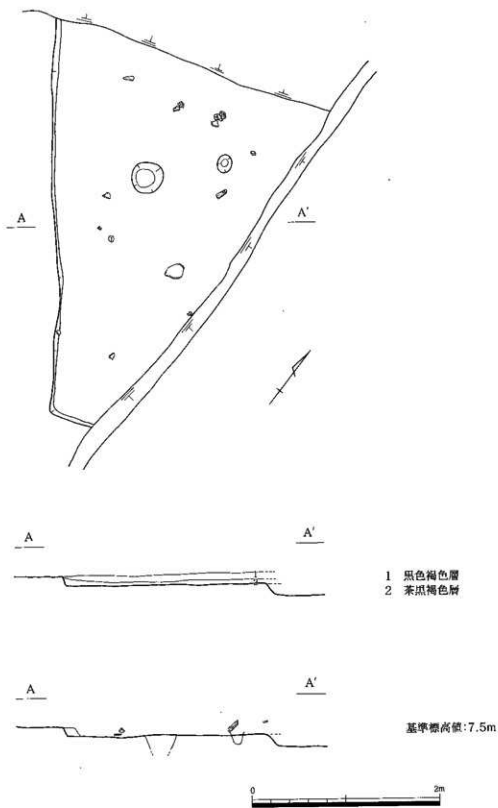
第39図 堅穴1・2実測図



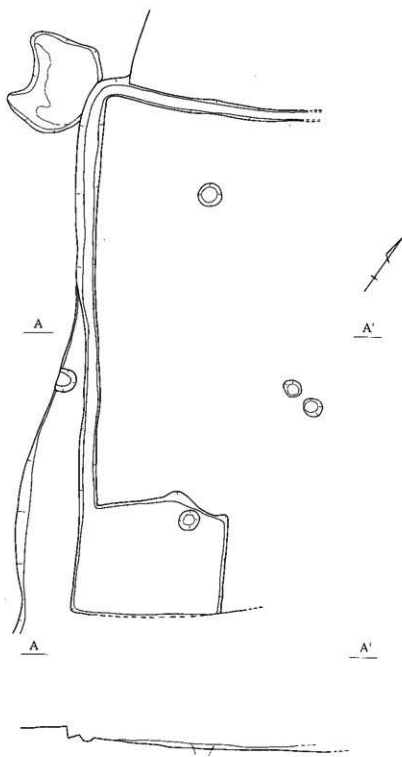
第40図 竪穴3実測図



第41図 竪穴4実測図



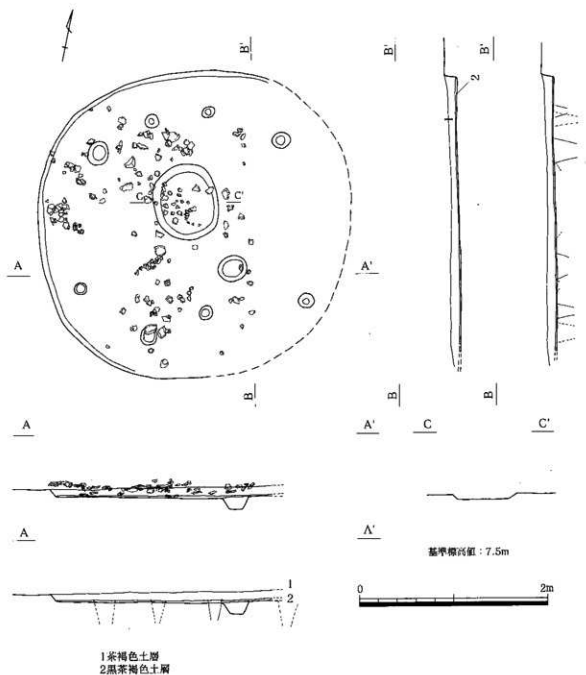
第42図 竪穴5実測図



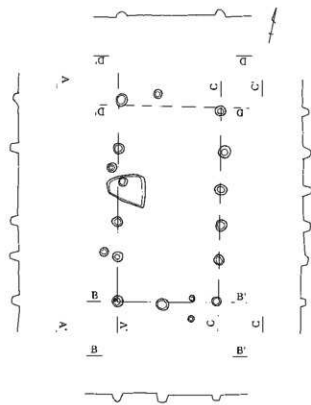
基準標高値: 7.85m



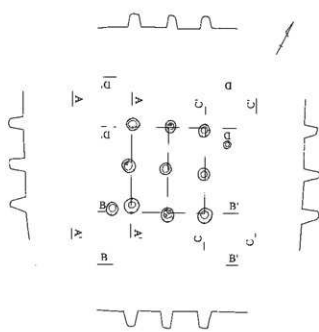
第43図 雙穴6黃溝図



第44圖 竪穴7実測図



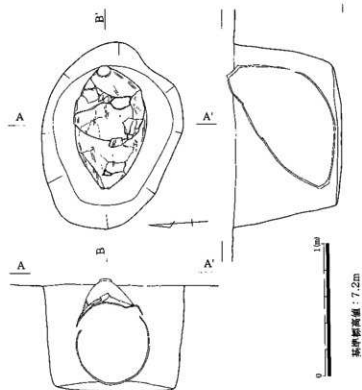
0 2m



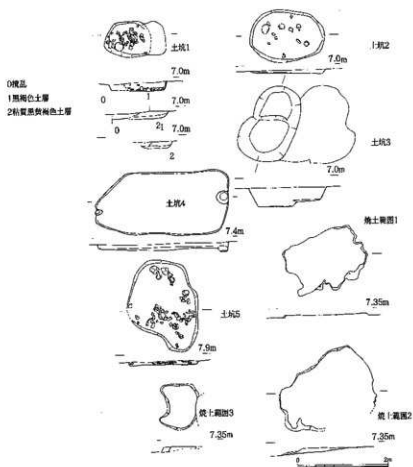
基準標高7.6m

0 2m

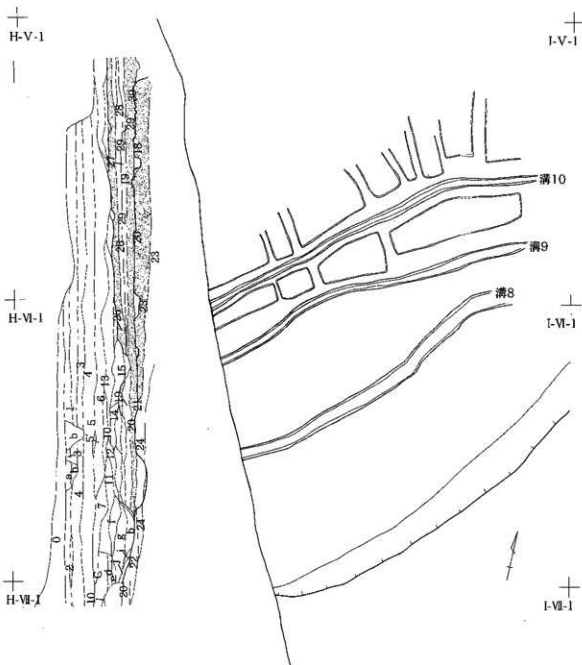
第45図 建物1・2実測図



第46圖 墓棺實測圖



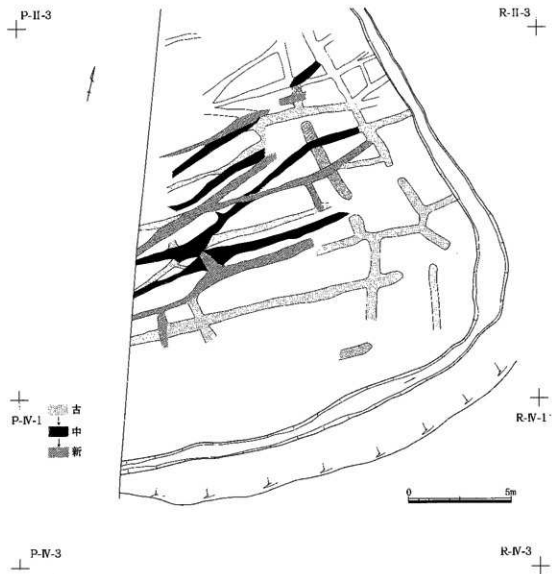
第47圖 土坑・焼土範圍實測圖



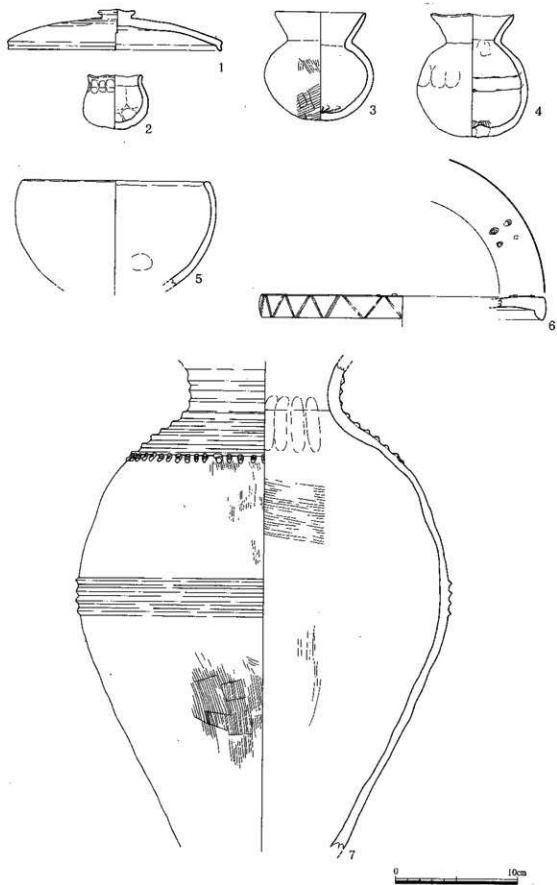
- 0 雑土 1 灰白色粘質土層 2 1の灰土、黄灰色土層 3 黄灰色粘質土層 4 灰白色粘質土層
 5 腐敗灰褐色土層(混砂小礫) 6 黄灰色粘質土層 7 黄灰色粘質土層 8 混小礫腐敗灰褐色砂層
 9 腐敗褐色砂質土層 10 腐敗灰褐色砂層 11 混小礫、腐敗灰褐色砂質土層 12 灰褐色粘砂層
 13 腐敗灰褐色砂層 14 腐敗褐色土層 15 灰褐色層 16 砂質腐敗灰土層 17 腐敗腐敗灰褐色粘砂層
 18 腐敗灰褐色砂層 19 砂性腐敗灰褐色土層-1水田層 20 黄褐色粘質土層 21 黄褐色粘砂層
 22 混小礫腐敗灰褐色粘砂層(亞物色) 23 腐敗粘褐色粘質土層-11水田層 24 腐敗多量砂質腐敗灰褐色粘土層
 25 灰褐色粘砂層 26 腐敗粘質土層 27 腐敗灰褐色砂層 28 腐敗粘質土層 29 腐敗粘砂層
 30 腐敗粘質土層 31 灰褐色粘質土層 32 灰褐色粘質土層(粘質) 33 腐敗粘砂層
 34 腐敗粘質土層 35 水田層(混砂粘砂) 36 腐敗粘砂層 37 腐敗粘質土層
 38 腐敗粘質土層 39 腐敗粘質土層 40 砂性腐敗灰褐色土層 41 灰褐色粘質土層
 a 腐敗灰褐色土層 b 灰褐色土層 c 腐敗粘質土層 d 灰褐色粘砂層 e 腐敗粘質土層 f 灰褐色粘砂層
 g 腐敗粘質土層 h 腐敗粘質土層 i 腐敗粘質土層 j 腐敗粘質土層

0 2m

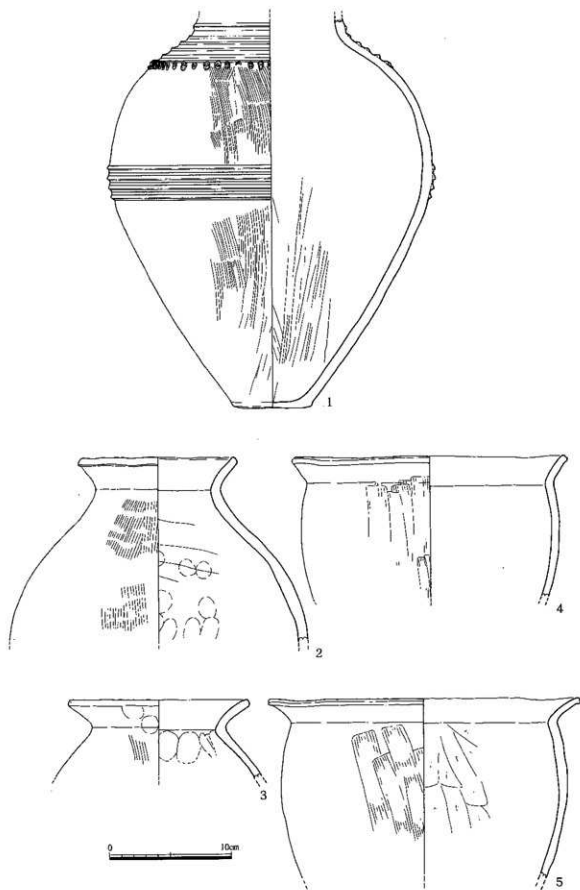
第48図 西部水田域実測図



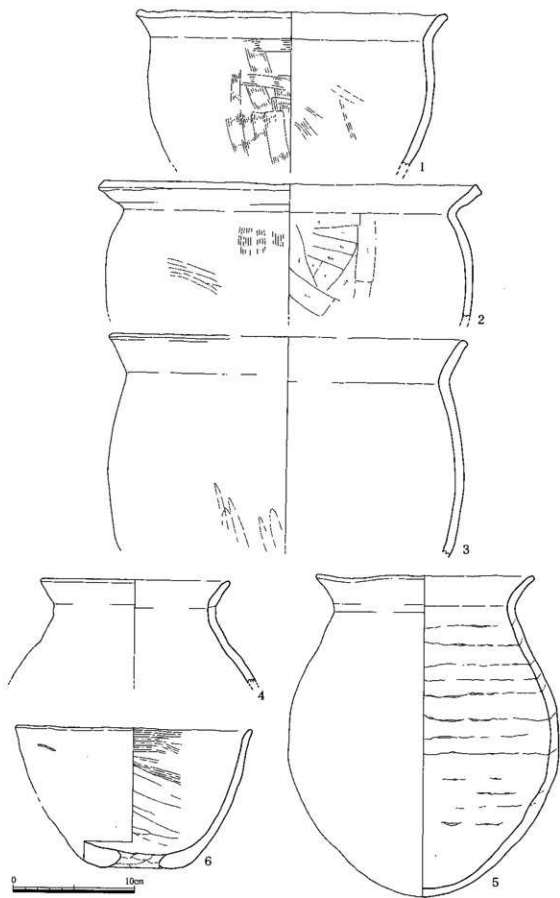
第49図 東部水田域実測図



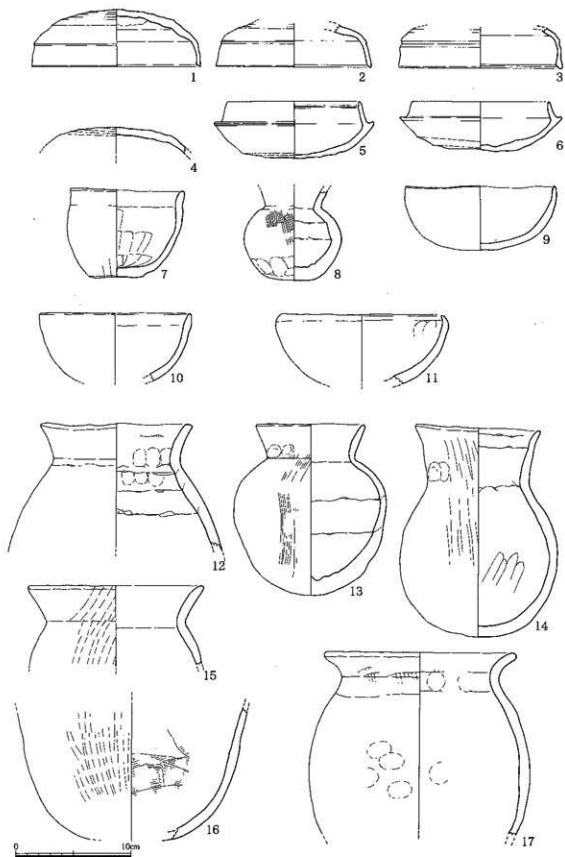
第50圖 竪穴1・2 (1) 出土遺物実測図



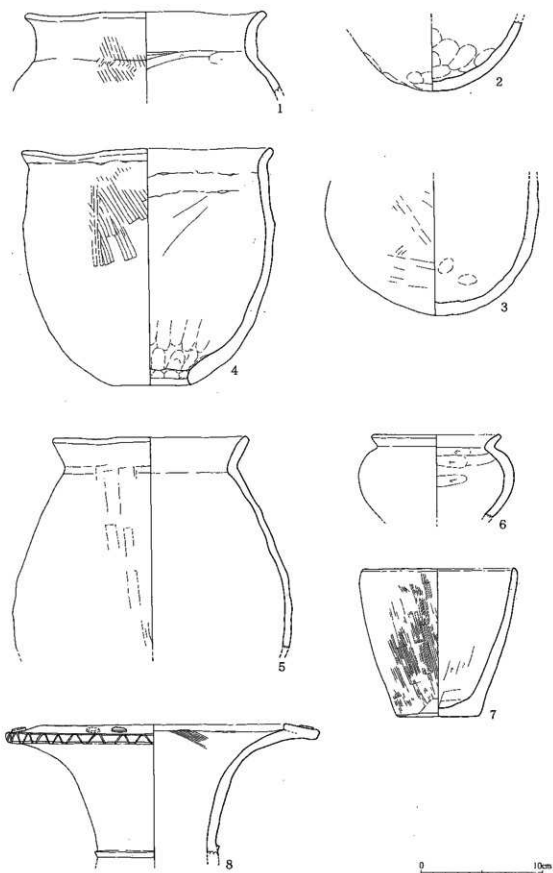
第51圖 竪穴2(2)出土遺物実測図



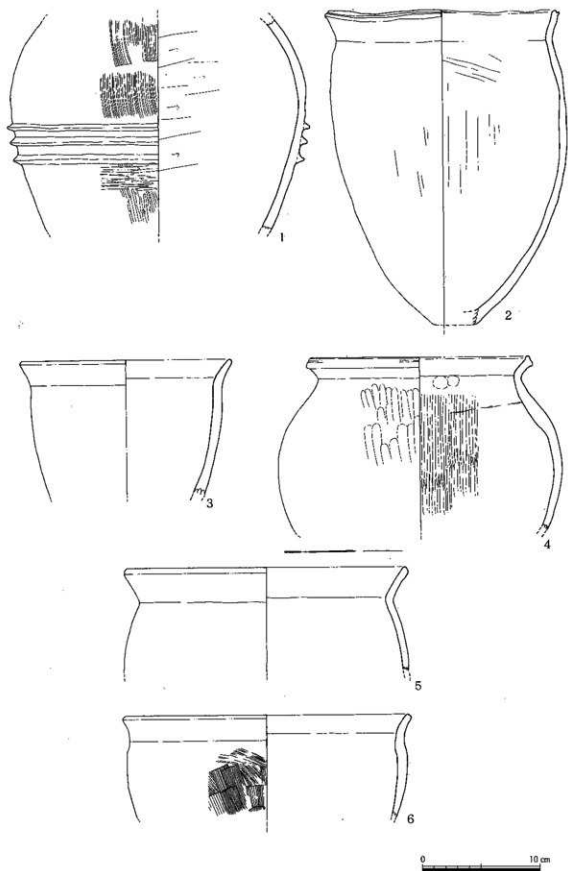
第52図 竪穴2 (3)・3出土遺物実測図



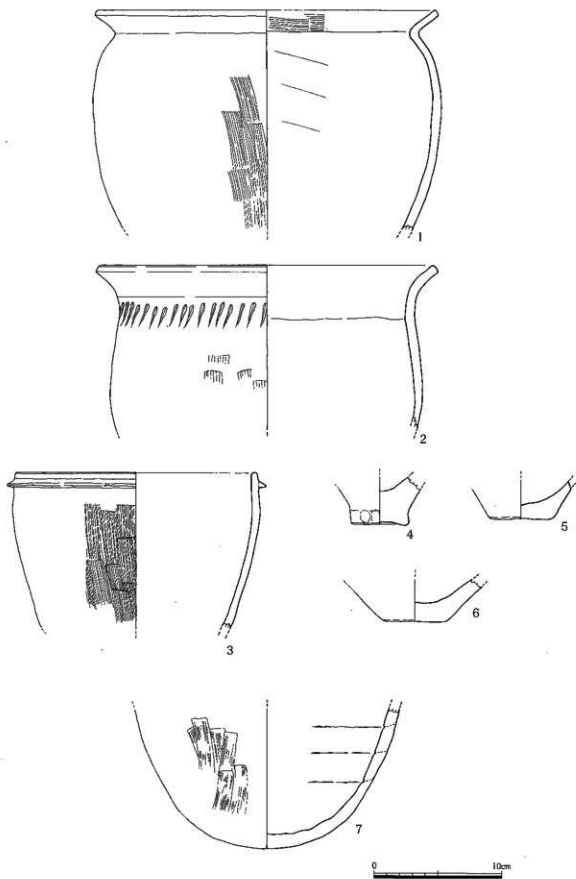
第53圖 整穴4(1)出土遺物実測図



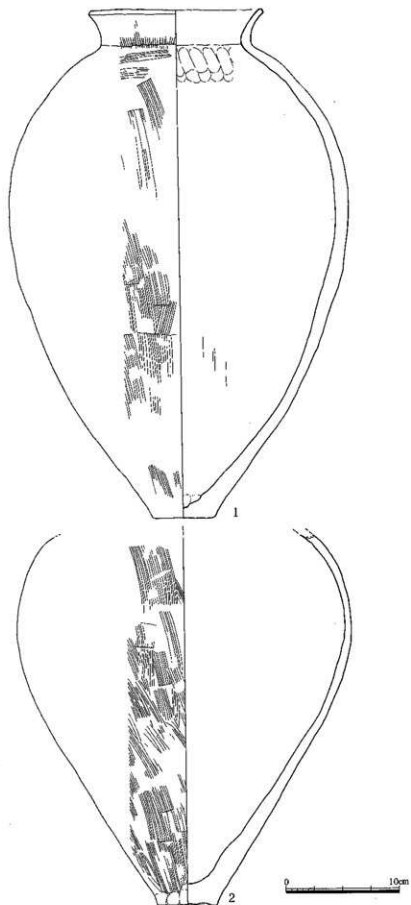
第54圖 竪穴4(2)・7(1)出土遺物実測図



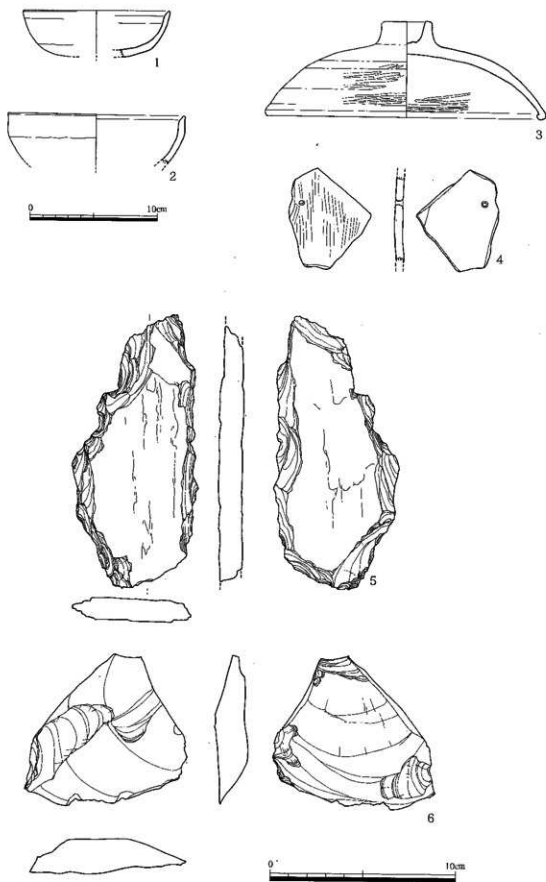
第55圖 雙穴7(2)出土遺物実測図



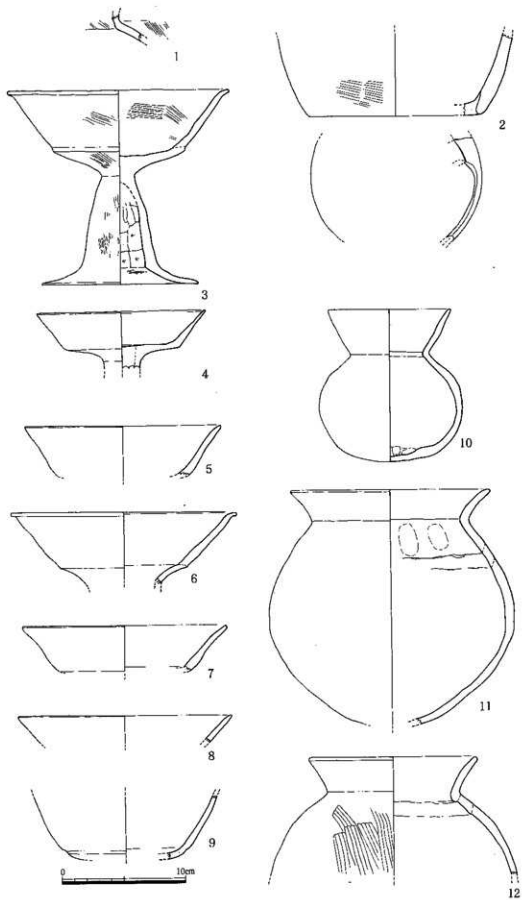
第56圖 竪穴7(3)・建物1出土遺物実測図



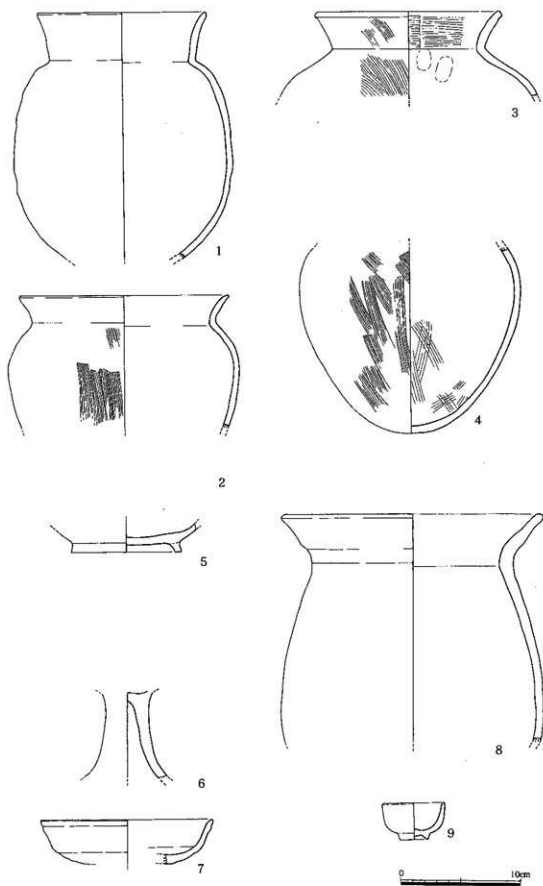
第57図 小児墓棺



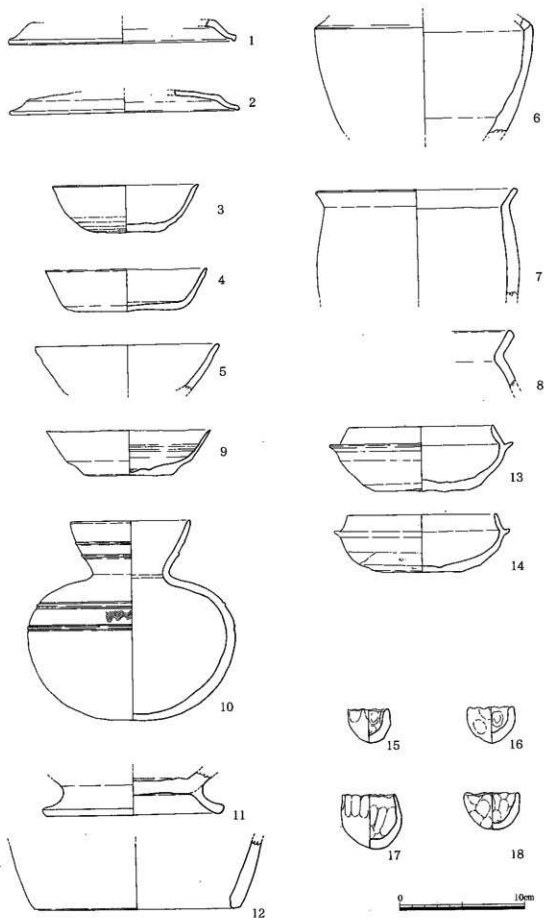
第58圖 土坑 1 出土遺物實測圖



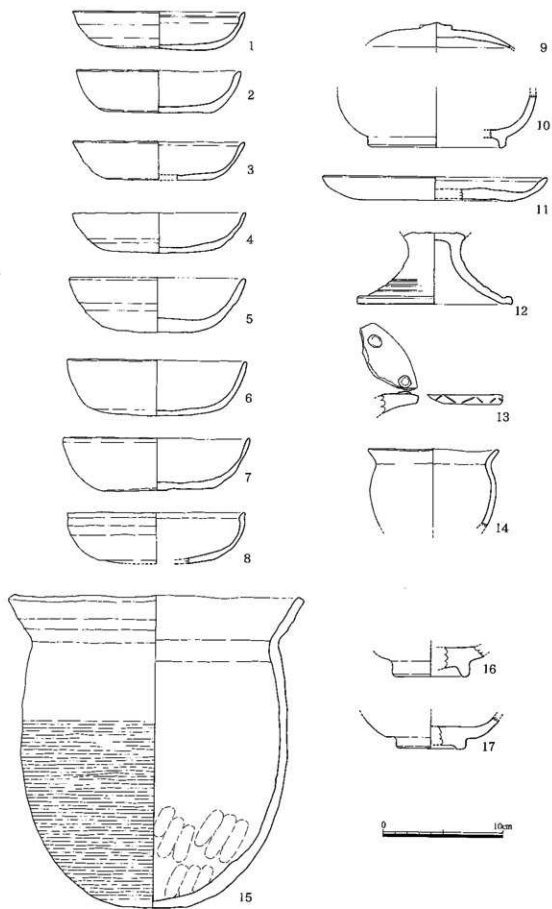
第59圖 土坑2・5(1)出土遺物実測図



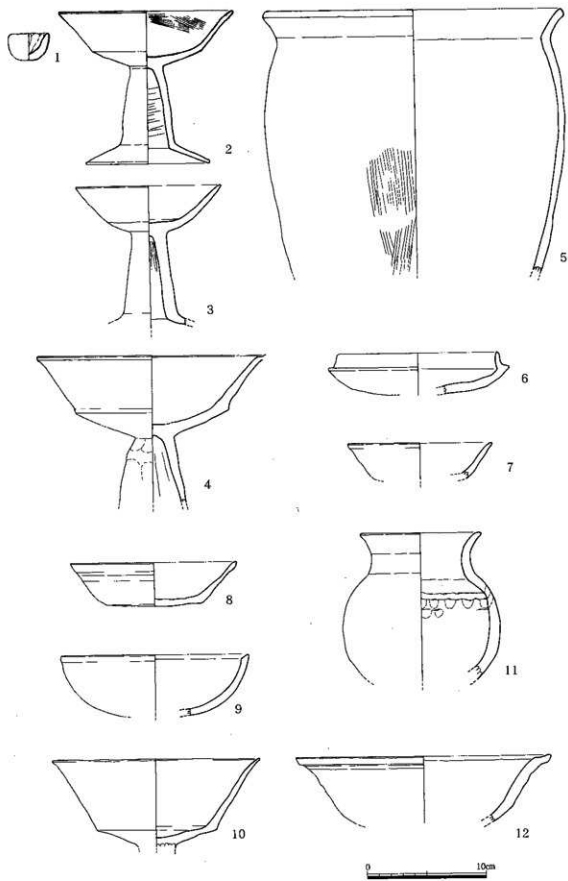
第60圖 土坑5(2)・水田跡出土遺物実測図



第61图 各地区(1)出土遺物実測図



第62图 各地区 (2) 出土遗物实测图



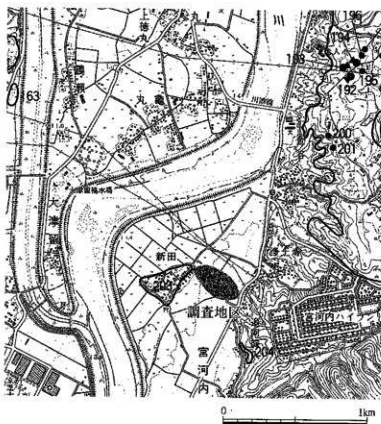
第63图 各地区(3)出土遺物実測図

第5章 新田遺跡

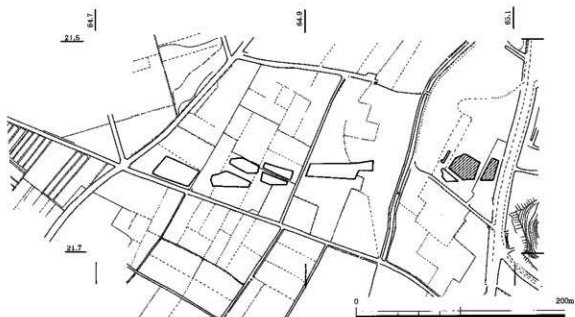
遺跡は大分市大字川内字新田に所在する。調査地区は大野川と乙津川が分岐する地点からやや下流の大野川本流が西に大きく蛇行する右岸から東部の丹生丘陵裾部にいたる範囲である。調査は、5,600mの対象地全域にトレンチ或いは一定範囲の全面表土剥ぎを行い遺構の存否確認を行ったものである。調査の結果、氾濫源の各地点で砂・礫の互層、4m程の深さでは礫層を確認し、湧水が認められた。東部の丘陵裾部に近い東部調査区では、現在まで営まれていた水田の下層に溝状の遺構などを検出した。

東部調査区の土層堆積状態は、調査区南辺で観察した。その結果、上から1層は現在の水田で厚さ10cm~20cmの灰褐色耕作土、2層は1層の床土で厚さ3cm~10cmの黄褐色粘質土、3層は灰黄褐色土、4層は黄褐色粘質土、5層は黄褐色粘質土、6層は黄灰褐色粘質土、7層は黄褐色粘質土、8層は上層にマンガンがみられる黒茶褐色粘質土の各層を確認した。このうち1・3・6層が耕作土、2・4・5・7層は各耕作土に対する床土である。水田耕作の連続性を示している。

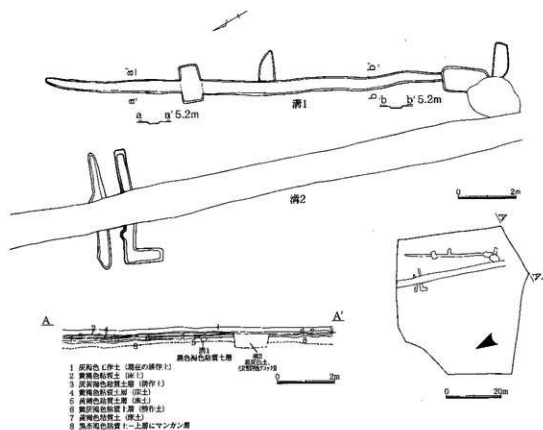
溝は2条を確認した。溝1は南西から北東へ伸びるが、南西部攪乱を受け不明確であり、北東端部は消失している。長さ14mを確認した。深さは確認面から10cm程である。時期については、明確でない。溝2は現水田の床土直下に確認したものが、堆積上の状況などから近世~近年の水田耕作に伴う可能性がある。



第64図 新田遺跡位置図



第65図 新田遺跡及び周辺地形図



第66図 遺構実測図

第6章 川野遺跡

はじめに

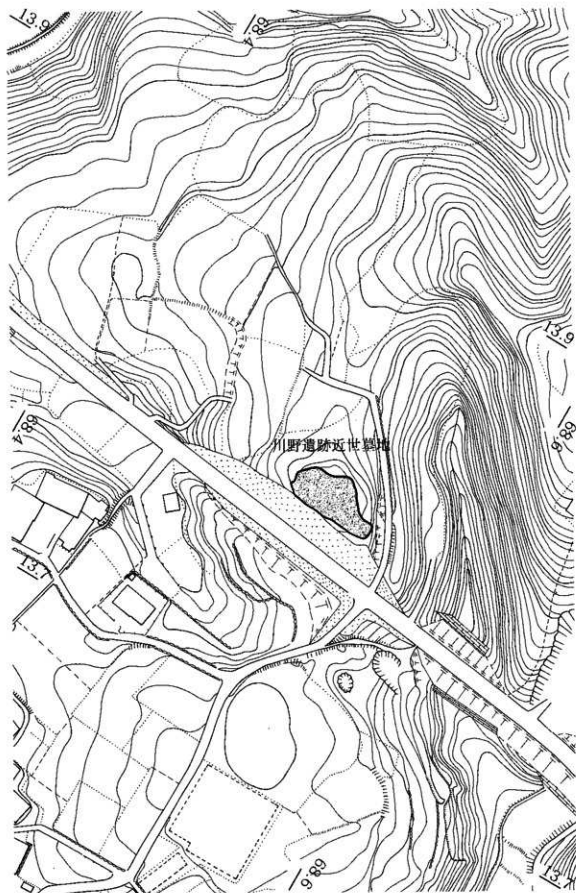
川野遺跡の白杵市大字吉小野に所在する近世墓地である。この地域は江戸期～明治22年まで吉小野村と称されていた。豊後国海部郡白杵庄にあたり、慶長5年から稲葉白杵藩領であった。上吉小野と下吉小野村によりなる。村の規模・格は慶長2年の村高422石余、村位中となっている。寛永11年の「高付帳」によると同じ石高である。「正保郷帳」では370石余、うち田が223石、畑146石高余である。「天保郷帳」の記載は380余石。当時白杵藩の行政上の単位として本村をいくつかまとめて編成された村組でいうと、寛永11年では末広組、のち岩屋組に所属していた。明治4年には大分県に所属。周辺の寺院をみると、臨濟宗妙心寺派慈眼寺が岩屋川地区に所在している（「角川日本地名大辞典44大分県」ほか）。慈眼寺は白杵市内の月桂寺の第三世雲岩を開基（1615年）とする。墓標に「飯元」など禅宗系に多用される頭書がみられることから、この寺と墓地との関連が考えられる。この墓地は、東西を谷で開析された平坦な丘陵上に立地する。墓域は丘陵の平坦面に広がるが、南側は農免道路建設工事で削られ消失している。現存する墓域は北側の550㎡であり、墓石240余基が存在した。墓石のうち紀年銘をもつ例が165基あり、このうち108基が原位置を保つ。台石のみ残存する例が56基、このほか墓石の部位などが26基確認されている。また、墓地に至る道が、調査区西端にあたる西斜面から幅2m程度の規模で伸びていることを確認できた。墓標の向きは、調査区東部にある五輪塔を除くと全て西に面する。

調査は、表面・上部施設の調査として墓地及び周辺の測量から開始し、墓石の実測、採拓、写真撮影を行った。しかし、埋葬施設の調査については、着手前に重機で改葬が行われ、墓坑が完全に掘削、消失したため、実施することが出来なかった。

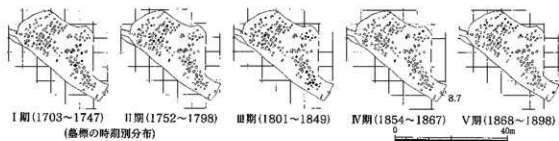
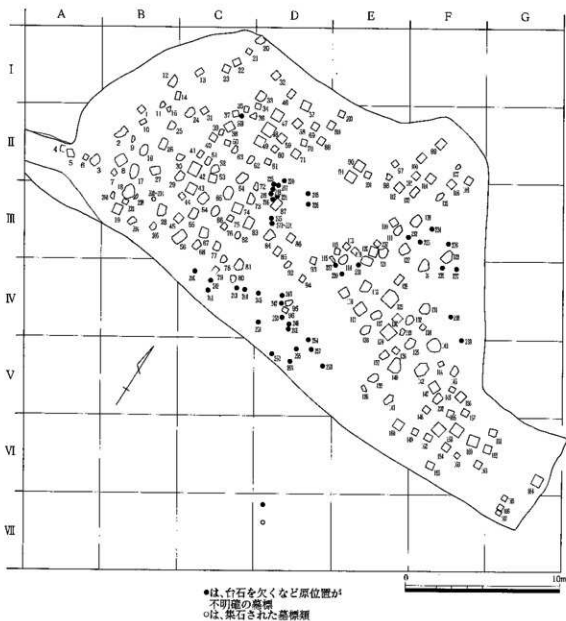
墓標の型式については、以下に示すように谷川章雄氏の分類（『近世墓標の類型』「考古学ジャーナルNo288」1988年）に従うものとする。

【墓標の分類】

- A類 塔形のもの。
 - A-1類 五輪塔
 - A-2類 宝篋印塔
 - A-3類 無縫塔
- B類 頭部が三角形のもの。
 - B-1類 断面が舟形のもの。
 - B-2類 断面が方柱形のもの。
- C類 舟形光背に仏像を半肉彫りにしたもの。
- D類 頭部がかまぼこ状を呈するもの。
 - D-1類 断面が舟形のもの。
 - D-2類 断面が方柱状のもの。
- E類 塔身が方柱形のもの。
 - E-1類 頭部が四角錐を呈するもの。
 - E-2類 頭部が台状に造り出されたもの。
 - E-3類 頭部が平坦なもの。
- F類 笠付方柱形のもの。
- G類 その他



第67图 遺跡周辺地形图



第68図 墓標配置図及び変遷図

墓標の説明については、紀年、墓形式、戒名が確認できる167基を対象に古い順に行った。現位置を保つ五輪塔3基をこれに加えた。括弧内の数字は分布図上の墓標番号を示す。被葬者の年齢区分・性別は、成人、幼年、嬰兒、女性、男性という表現を用いる。

1 (253) 元禄16年(1703)成人男性(第70図)

この墓地の中では、最も古い紀年銘をもつ墓標であるが原位置ではなく、台石を伴わない。自然石に近い略台形を示すが(G類)、正面は平滑、背・側面はノミ跡を残す加工がみられる。大きさは、高さ60cm、上辺20cm、下辺48cm、厚さは下辺で28cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(中央) 寂室智常信士

(右側) 元禄十六未天

(左側) 正月二十四日

2 (119) 宝永5年(1708)成人女性(第70図)

墓標は台石2段をもつが、本来台石1段と思われる。墓標本体の上半部を欠くため墓標型式は不明であるが、自然石に近い形が想定される(G類)。成形は粗く、正面は平滑に仕上げられているものの、背・側面の面取は凹凸をなす。本体の大きさは現存高38cm、本体下辺30cm、最大厚13cmである。台石は50cm×55cm、厚さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(中央) ○観妙幽信女

(右側) 宝永五子年

(左側) 六月十九日

3 (260) 宝永7年(1710)幼年女性(第70図)

墓標は原位置ではなく、台石を伴わない。本体は台石に固定するための柵をもつ。墓標型式は頭部先端がやや矩形をなすがD-1類とできよう。正面の削り込みは頭部が宝珠をなす。大きさは高さ95cm、幅は42cm～46cmで上部が広い。最大厚は20cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 早坂妙○童女幽霊

(右側) 宝永七年

(左側) ○寶五月○日

4 (19) 正徳四年(1714)成人女性(第70図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柵をもつ。大きさは高さ56cm、幅は21cm、厚さ13cmである。台石は一辺56cmのほぼ正方形を呈し、中央に柵孔をもつ高さ17cmである。整形はやや粗い。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがなされている。

(中央) 舞一心性珍安信女霊位

(右側) 正徳四甲午歳

(左側) 九月二十九日

5 (269) 享保五年(1720)成人女性(第70図)

墓標は原位置ではなく、台石を伴わない。本体は台石に固定するための柵をもつ。墓標型式はD-2類である。正面の削り込みは頭部が宝珠形の退化した形状をなす。本体下部に蓮華文が刻まれている。刻字・蓮華文に墨入れがなされている。大きさは高さ81cm、幅は29cm～31cmで上部がやや広い。厚さはほぼ均一で14cmである。凝灰岩で造られている。墓石本体の正面、左・右面に次のような刻字がある。

(正面) 淨賢守貞大姉灵位

(右面) 享〇五年

(左面) 二月〇二

6 (55) 享保七年 (1722) 成人女性 (第70図)

墓標は台石をもつ。墓石本体は台石に固定するための納があり、台石には納受けが傾り抜かれている。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ66cm、幅は22cm~25cmで上部がやや広い。厚さはほぼ均一で12cmである。台石は70cm×60cm、厚さ20cmで正面と上面は整形されているが自然石に近い。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。「靈位」は刻字ではなく墨書となっている。

(中央) 飯一 妙轉信尼 靈位

(右側) 享保七壬寅稔

(左側) 七月初四日

7 (129) 享保九年 (1724) 成人女性 (第70図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。本体下部に蓮華文が刻まれている。大きさは高さ94cm、幅は26cm~33cmで上部がやや広い。厚さは16cm~18cmである。台石は1段目が76cm×81cm、厚さ23cm、2段目は57cm×48cm、厚さ10cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 釈妙泉信女不退位

(右側) 享保九辰年

(左側) 五月廿五日

8 (131) 享保十一年 (1726) 成人女性 (第70図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ70cm、幅は32cmである。厚さは16cmである。台石は90cm×95cm、厚さ15cmの不整形を呈す。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがなされている。

(中央) 惠林性信女灵

(右側) 享保十一丙年

(左側) 十一月期日

9 (79) 享保十二年 (1727) 成人男性 (第70図)

墓標は現位置ではなく、台石は不明。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ64cm、納の長さ6cm、幅は24cmである。厚さは10cmである。凝灰岩で造られている。墓標は正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 了徹信士之墓

(右面) 享保十二歳

(左面) 桂月十六日

10 (81) 享保十二年 (1727) 成人女性 (第70図)

墓石は台石一段をもつ。墓標は自然石に近い形状であるが、戒名を刻む正面には不定形の削込みがみられる。台石は70cm×73cm、厚さ22cmの粗く矩形に加工したもので中央に納穴をもつ。大きさは高さ52cm、幅は11cm~22cm、厚さは8cm~11cmで上部が細くなる。凝灰岩で造られている。墓石は正面と右側面に次のような刻字がある。

(正面) 釋妙智信女灵位

(右側面) 享保十二未十二月十八日

11 (207) 享保十六年 (1731) 成人男性 (第70図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はB-2類である。大きさは高さ58cm、幅は28cmである。厚さは10cmである。台石は45cm×36cm、厚さ10cmで長方形に加工され、中央やや前寄りに柙穴をもつ。全体に磨かれ平滑で丁寧な造作となっている。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(中央) 竹翁道節信士

(右側) 享保十六卒

(左側) 二月二十一日

12 (124) 天文三年 (1738) 成人女性 (第70図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。正面の朝込みは頭部が三角形の板碑形を呈する。柙をもつ。大きさは高さ83cm、幅26cm、厚さ14cmである。凝灰岩で造られている。台石は80cm×74cm、厚さ31cmで自然石に近いが表面は整えられている。正面の朝込み内に戒名、その外に紀年銘が刻まれている。刻字に墨入れがされている。

(中央) 解因〇〇信女

(右側) 天文三丁己巳

(左側) 一月四日

13 (109) 寛保三年 (1743) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ73cm、幅は29cmである。厚さは15cmである。柙をもつ。台石は85cm×70cm、厚さ19cmで粗い矩形であるが表面は平滑に造られ、中央に柙穴をもつ。凝灰岩で造られている。墓標は朝込みをもち正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがされている。

(中央) 幽寒道玄信士

(右側) 寛保三亥歳

(左側) 十一月九日

14 (259) 寛保三年 (1743) 成人男性 (第71図)

墓標は現位置になく、台石をもたない。墓標型式は頭部先端が矩形状をなすがD-1類とした。正面に朝込みはない。大きさは長さ54cm、柙の長さ9cm、幅は22cm~24cmである。厚さは6cm~8cmで上部が細くなる。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れされている。この墓地では居上の脚字をもつ唯一の例である。

(中央) 祖〇〇心居士

(右側) 寛保三〇〇天

(左側) 十二月廿五日

15 (83) 延享三年 (1746) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓石型式は頭部が緩い三角形を呈すB-2類である。柙をもつ。大きさは高さ69cm、幅は30cmである。厚さは11cmである。台石は85cm×61cm、厚さ23cmで粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に柙穴をもつ。凝灰岩で造られている。墓標は一観面であり、正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがされている。

(中央) 乳方(?) 一信士灵塔

(右側) 延享三寅天

(左側) 三月五日

16 (224) 延享四年 (1747) 幼年女性 (第71図)

地蔵を覆うドーム状の別石である。内部の地蔵は不明である。覆いは一石を長方形に割り込んだものである。正面の周辺に紀年銘をもつが、上部中央に地蔵菩薩を示す種子がある。大きさは高さ

78cm、幅は47cm～53cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(右側) 弥(?) ○○童女

(左側) 延享四卯三月八日

17 (73) 宝暦二年 (1752) 成人女性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標は自然石に近い形状であるが、戒名を刻む正面は磨かれ平滑に仕上げられ、不定形の剣込みをもつ。柩をもつ。台石は77cm×56cm、厚さ20cmの粗い矩形に加工したもので中央に柩穴をもつ。大きさは高さ55cm、幅は10cm～30cm、厚さは12cm程度で上部が細くなる。凝灰岩で造られている。墓標は正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 釈尼妙悦

(右側) 宝暦二申

(左側) 十一月廿四日

18 (135) 宝暦二年 (1752) 成人女性 (第71図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。正面に剣込みはない。柩をもつ。大きさは高さ59cm、幅、26cm程度、厚さは15cmである。台石は1段目が83cm×72cm、厚さ20cm、2段目は45cm×40cm、厚さ15cmの粗い矩形をなすが、表面は整形され2段目の中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 飯元雲樹妙陰信女

(右側) 寶暦二申年

(左側) 七月二日

19 (235) 宝暦二年 (1752) 成人女性 (第71図)

墓石は現位置を保つものではないが、周辺の墓の分布状況から大きく移動したとは考えられない。墓石型式は地藏形(C類)である。地藏は半円形で舟形光背をもつ。下部に蓮華文が彫られている。大きさは高さ58cm、光背の最大幅は32cmである。厚さは下部で22cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字と蓮華文に墨入がされている。

(右側) 釋知誓信女

(左側) 宝暦二申天七月十一日

20 (67) 宝暦四年 (1754) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類である。大きさは高さ87cm、幅は31cm～37cm、厚さは13cm～24cmで上部に向かいやや細くなる。台石は70cm×62cm、厚さ17cmの矩形をなす。表面は整形され中央に柩穴はない。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 飯元祖改信士靈位

(右側) 寶暦四申天

(左側) 戌四月十日

21 (230) 宝暦十年 (1760) 成人女性 (第71図)

墓標は現位置を保つものではない。墓標の形状は頭部が歪な三角形、断面が台形状をなすためB-2類と考えておきたい。柩をもつ。大きさは高さ69cm、幅は30cmである。厚さは11cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 釋妙崇信女

(右側) 宝暦十辰年

(左側) 八月十四日

22 (231) 宝暦十一年 (1727) 成人 (第71図)

墓標は現位置を保つものではなく、台石を伴わない。墓標型式は無縫塔（A-3類）である。均整のとれた形状をなし、全体が平滑に磨かれた丁寧な造りとなっている。大きさは上端部を僅かに欠くが、高さ44cm、最大径は24cmである。凝灰岩で造られている。墓標に次のような刻字がある。又、正面の刻字に朱、左右の刻字に墨入がされている。

（中央）妙音師絃沙弥

（右側）月桂獨園徒

（左側）宝曆十一月辛己五月廿三日

23 (238) 明和元年 (1764) 成人男性 (第71図)

墓標は現位置ではなく、台石は不明。墓標型式は上部を欠くため、明らかでないが、舟形をなす。正面に朝込みはない。大きさは現存高56cm、柄の長さ6cm、幅は13cm～24cmで上部に向かい細くなる。厚さは5cm～12cmである。凝灰岩で造られている。墓標は正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

（正面）釈道榮信士

（右側）明和元申年

（左側）九月十三日

24 (271) 明和元年 (1764) 成人女性 (第71図)

墓標は現位置ではなく、集積されたものである。墓標の形状は自然石に近い不整形をなすが、正面は磨かれ平滑である。朝込みはない。大きさは高さ57cm、柄の長さ7cm、幅17cm～24cm、厚さ7cm～15cmと上部に向かい細くなる。凝灰岩で造られている。墓標は正面に次のような刻字がある。

（正面）歌竹閑信女

（右側）明和元〇年

（左側）九月十一日

25 (29) 明和六年 (1769) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標の形状は粗い舟形をなし、正面に朝込みがある。柄をもつ。大きさは高さ62cm、幅15cm～35cm、厚さ8cm～17cmである。台石は70cm×63cm、厚さ23cmの粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に納穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

（中央）霜林祖淵信士

（右側）明和六〇年

（左側）九月廿一日

26 (127) 明和六年 (1769) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式は方柱形のE-2類である。柄をもつ。大きさは高さ47cm、幅23cm、厚さ22cmである。台石は80cm×60cm、厚さ15cmの粗い矩形をなすが、表面は整形され前部に浅い朝込みをもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。なお、左面に判読不明の3文字が刻まれている。

（中央）釈春岩信士

（右側）明和六丑年

（左側）二月初五日

27 (64) 明和八年 (1771) 成人男性 (第71図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類であるが、正面の朝込みは頭部が三角形の板碑形を呈する。柄をもつ。大きさは高さ70cm、幅26～30cm、厚さ15cmである。凝灰岩で造られている。

台石は75cm×73cm、厚さ18cmの自然石に近いが表面は整えられている。刻字に墨入れがされている。

(中央) 圓鑑素明僧上

(右側) 明和八卯歳

(左側) 十月廿九日

28 (65) 明和六年 (1771) 成人男性 (第71図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はB-2類である。柩をもつ。背面の成形は粗い。大きさは高さ67cm、幅25cm～は28cmである。厚さは12cm～16cmである。台石は一段目が100cm×73cm、厚さ12cm、二段目は50cm×51cm、厚さ16cmの粗い自然石に近い矩形をなすが、表面は整形され中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがされている。

(中央) 孤峰道峻僧士

(右側) 明和八卯歳

(左側) 八月十七日 (俗名)

29 (116) 明和八年 (1771) 成人男性 (第72図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類であり、均整のとれた形状と丁寧な磨きが施されている。大きさは高さ57cm、幅27cm、厚さ17cmである。台石は一段目が65cm×57cm、厚さ16cmの粗い矩形をなすが、二段目は49cm×34cm、厚さ17cmの横長の長方形を呈し長方形の柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れている。

(中央) 真源智僧士

(右面) 明和八辛卯春

(左面) 三月五日

30 (134) 明和八年 (1771) 幼年女性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類であり、均整のとれた形状と丁寧な磨きが施されているが背面の成形は粗く断面が舟形状をなす。大きさは高さ39cm、幅19.5cm、厚さ14cm～21cmである。台石は一辺32cmの正方形を呈し、厚さ12cmである。中央に長方形の柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 釈知幻童女

(右面) 明和八辛卯

(左面) 四月廿八日

(右側面) (俗名) 娘 (俗名)

31 (227) 明和八年 (1771) 成人男性 (第72図)

墓標は現位置ではなく、台石は不明。墓標型式はD-2類であり、背面も成形された均整のとれた形状をなす。柩をもつ。大きさは高さ57cm、幅は23cm～25cmと上部に向かい僅かに広がる。厚さは16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入れがされている。

(正面) 徹照了遺僧士

(右面) 明和八卯天

(左面) 九月廿五日 (俗名)

32 (24) 安永二年 (1773) 成人女性 (第72図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はB-1類であり、正面、側面に丁寧な整形が施されている。大きさは高さ64cm、幅27cm、厚さ12cm程度である。台石は二段目が57cm×50cm、厚さ12cmの粗

い矩形をなすが、一段目は75cm×75cm、厚さ20cmは。ただ柄と柙穴の形状からみて組み合わな
い可能性もある。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れられてい
る。

(中央) 南窓慧薫信女

(右側) 安永二己癸天

(左側) 四月七日

33 (54) 安永二年 (1773) 幼年女性 (第72図)

台石と覆いを伴う地蔵である (C類)。覆いは舟形状を呈し、一石を削り込んだものである。地
蔵は半肉彫で舟形光背をもつ。地蔵の光背を含んだ大きさは高さ49cm、最大幅21cmである。覆い
の大きさは高さ81cm、幅は32cm～48cm、厚さ35cmである。台石は一辺50cm～65cm、厚さ20cmの
粗い矩形をなす。凝灰岩で造られている。光背正面に次のような刻字がある。

(右側) 智英童女

(左側) 安永二己二月十二日

34 (52) 安永四年 (1775) 成人女性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類であり、均整のとれた形状なす。正面、側面は丁寧
な磨きが施されているが、背面は粗い成形が残る。大きさは高さ68cm、幅26cm～30cm、厚さ6cm
～9cmである。台石は柙穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に
墨入がされている。

(中央) 月峯 (?) 慈照信女

(右側) 安永四年

(左側) 八月廿一日

35 (11) 安永五年 (1776) 成人男性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類であり、正面は平滑に仕上げられているが、背面は
粗い成形を残す。大きさは高さ62cm、柙の長さ6cm、幅22cm、厚さは10cm～17cmで上部に向かい
細くなる。台石は66cm×51cm、厚さ10cmの粗い矩形をなすが、表面は平滑に整形されている。中
心に長方形の柙穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(中央) 麗叟浄休居士

(右側) 安永五年

(左側) 申七月廿六日

36 (136) 安永五年 (1776) 幼年女性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類である。断面は頭部が矩形をなすが、全体の形状は
舟形といえる。大きさは高さ47cm、幅19cm、厚さ7cm～9cmである。台石は一辺30cmの正方形を
呈し、厚さ14cmである。各面とも平滑に整形されている。凝灰岩で造られている。正面に次のよ
うな刻字がある。刻字に朱が入れている。

(中央) 釈妙了童女

(右側) 安永五申天

(左側) 五月廿九日

37 (236) 安永五年 (1776) 幼年男性 (第72図)

集積された墓石の一つであり、現位置は不明である。墓の形状は地蔵 (C類) であり、半肉彫で
舟形光背、蓮華座をもつ。大きさは高さ47cm、幅は光背の最大幅で25cm、厚さは蓮華座で13cmで
ある。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、朱が入れている。蓮華座の蓮華と
地蔵の細かな部分は、墨描きで表現されている。

(右側) 釋迦西童女

(左側) 安永五申六月四日

38 (262) 安永五年 (1776) 幼年女性 (第72図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類であり、均整のとれた形状を呈す。柩をもつ。大きさは高さ47cm、柩の長さ4cm、幅は19cmである。厚さは7cm~9cmで上部に向かいやや細くなる。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 釈迦遊童女

(右側) 安永五申天

(左側) 五月廿日

39 (85) 安永八年 (1779) 成人男性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類であり、均整のとれた形状を呈す。柩をもつ。大きさは高さ59cm、幅26cm、厚さは14cm、柩の長さ9cmである。台石は39cm×46cmの方形をなし、厚さ14cmである。表面中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(中央) 夢相浄回信士

(右側) 安永八

(左側) 十月十日

40 (233) 安永八年 (1779) 成年男性 (第72図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類であり、均整のとれた形状をなす。正面の頸込みに戒名、その外に紀年銘が刻まれている。柩をもつ。大きさは高さ56cm、幅は23cm、厚さ17cm、柩の長さ3cmである。表面は整形され中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 眞榮了實信士

(右側) 安永八己亥年

(左側) 八月二十六日

41 (62) 安永九年 (1780) 成人女性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類であるが、形状はやや歪。柩をもつ。大きさは高さ60cm、幅30cm、厚さ15cmである。台石は61cm×54cm、厚さ22cmの粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 惠日普明禪尼

(右側) 安永九子

(左側) 四月七日

42 (2) 天明三年 (1783) 成人男性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD類であるが、断面は頭部が丸い。柩をもつ。大きさは高さ59cm、幅28cm~30cmで上部に向かいやや広がる。厚さは9cmである。台石は66cm×45cm、厚さ23cm粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に方形の柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面と側面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れられている。

(中央) 坂元頼田祖苗信士

(右側) 天明三年癸卯

(左側) 四月廿七日

43 (86) 天明四年 (1784) 成人男性 (第72図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ51cm、幅23cm、

厚さ16.5cmで、柵の長さは7cmである。台石は一辺40cmの正方形をなし、厚さ15cmで中央に柵穴をもつ。凝灰岩で造られている。墓標は正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 淨心禪定門

(右面) 天明四辰年

(左面) 五月十四日

44 (255) 天明四年 (1784) 幼年男性 (第72図)

墓標は集積されたもので現位置ではない。墓標の形状は台形状をなし規格的な形状ではない(G類)。正面の削込みは頭部が三角形、下端が丸く二重になる。大きさは高さ56cm、幅は下辺で32cm、上辺で18cmである。厚さは11cm~30cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 無明童子

(右側) 天明四〇年

(左側) 八月十八日

45 (268) 天明四年 (1784) 男性 (第72図)

墓標は集積されたもので現位置ではない。墓標型式はE類であるが、頭部は丸い。大きさは高さ47cm、幅20cm、厚さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 釋〇〇誓折

(右面) 天明四辰年 十二月廿日 (俗名)

46 (112) 天明五年 (1785) 成人女性 (第72図)

墓標の形状は地藏(C類)である。半肉彫で舟形光背、蓮華座、台石をもつ。光背の上部を欠く。現存高47cm、幅は光背の最大幅で27cm、厚さ16cmである。台座は45cm×40cmの方形を呈し、厚さ11cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入がされている。地藏の顔部に朱描きが見られる。

(右側) 妙樂信女

(左側) 天明五巳 七月十六日

47 (130) 天明五年 (1785) 成人女性 (第73図)

墓標の形状は地藏(C類)である。半肉彫で舟形光背、蓮華座、台石をもつ。大きさは高さ46cm、幅は光背の最大幅で26cm、厚さ13cmである。台座は長辺50cm、短辺33cm・37cmの方形を呈し、厚さ15cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入がされている。

(右側) 妙哲信女

(左側) 天明五巳 七月五日

48 (239) 天明五年 (1785) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柵をもつ。大きさは高さ63cm、幅25cm、厚さ17cmである。柵の長さは6cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 真空淨觀信士

(右面) 天明五乙己歲

(左面) 六月晦日

49 (258) 天明五年 (1785) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柵をもつ。

大きさは高さ66cm、幅26cm、厚さ13cm、柄の長さ5cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 歸一圓岩道相信士墓

(右側) 天明五巳歲

(左側) 極月五口

50 (272) 天明五年 (1785) 成人男性 (第73図)

築積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はB-2類である。柄をもつ。大きさは高さ56cm、幅25cm~29cmで上部に向かいやや広くなる。厚さは10cm、柄の長さ6cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 歸元素忠信士墓

(右側) 天明五乙巳年

(左側) 二月十〇日

(左面) (俗名)

51 (215) 天明七年 (1887) 成人女性 (第73図)

築積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はE類であるが、頭部は丸い。柄をもたない。大きさは高さ54cm、幅・厚さ共に23cm~25cmで上方に向かい僅かに広がる。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 妙円信女

(右側) 天明七未年

(左側) 四月廿二日

52 (103) 天明七年 (1787) 成人女性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柄をもつ。大きさは高さ66cm、幅32cm、厚さは9.5cmと薄い。台石は53cm×43cm、厚さ21cmで矩形を呈し、表面は整形され中央に柄穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 叡山妙道信女

(右側) 天明七未年

(左側) 七月十三日

53 (105) 天明七年 (1787) 幼年男性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はB-2類である。柄をもつ。大きさは高さ45cm、幅は21cmである。厚さは10cmである。背面の成形は粗い。台石は67cm×45cm、厚さ21cm粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に柄穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 遺鑑童子

(右側) 天明七未年

(左側) 十月廿二日

(右面) (俗名)

54 (237) 天明八年 (1788) 幼年女性 (第73図)

築積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓の形状は地藏であり、半肉彫で舟形光背をもつ (C類)。大きさは高さ31cm、幅は光背の最大幅で17cm、厚さ9cmと小型である。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入なされている。

(右側) 積賀心童女

(左側) 天明八申年六月十八日

55 (263) 天明八年 (1788) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-1類であるが、中央から二つに割れている。正面に頭部が三角形の削込みがある。柩をもつ。背面の成形は粗い。大きさは高さ約60cm程度と考えられる。幅は28cmである。厚さは10cm、柩の長さ7cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 淨圓○○土

(右側) 天明八○○

(左側) 十一月廿四日

56 (228) 寛永二年 (1790) 成人女性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ58cm、幅21cm、厚さ15cm、柩の長さ5cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 真空了源信女

(右面) 寛政二庚戌年 七月二十四日

57 (276) 寛政五年 (1793) 幼年男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓の形状は地蔵であり、半肉彫で舟形光背、蓮華座をもつ (C類)。大きさは高さ45cm、幅は光背の最大幅で20cm、厚さは下辺15cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入がされている。蓮華座の蓮華と地蔵の陶元は、朱書きで表現されている。

(右側) 年渚童子

(左側) 寛政五廿九月八日

58 (49) 寛政七年 (1795) 成人男性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ69cm、幅は27cmである。厚さは13.5cmである。台石は短辺58cm、長辺62cmの規格的な方形をなし、厚さ10cm以上である。表面は緩い丸みをもち中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 帰元瑞道惟的信士

(右側) 寛政七卯天

(左側) 九月五日

59 (47) 寛政十年 (1798) 成人女性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類ある。柩をもつ。大きさは高さ58cm、幅21cm~23cmで上部が僅かに広がる。厚さは14cm、柩の長さは5cm以上ある。台石は一辺65cm、厚さ17cmで正方形をなし、中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(正面) 釋尼○○妙善

(右面) 寛政十年年 十二月八日

60 (12) 寛政十三年 (1801) 成人女性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-1類である。背面は粗い成形が施されている。柩をもつ。大きさは高さ64cm、幅29cm、厚さは16cm程度であるが上部は舟形をなす。台石は80cm×50cm、厚さ22cmで自然石に近い粗い矩形をなすが、表面は整形され中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れられている。

(中央) 惠春妙諦信女

(右側) 寛政十三年
(左側) 酉正月廿三日
(右面) (俗名) 母

61 (13) 享和二年 (1802) 成人男性 (第73図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD類であるが、断面は歪な方形を呈す。柎をもつ。大きさは高さ59cm、幅は26cmである。厚さは17cm~20cmと背面の成形が粗いため差を生じている。台石は長辺52cm、短辺41cmの方形をなし、中央に柎穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れている。

(中央) 桃仙全利信士
(右側) 享和二戌年
(左側) 三月廿二日
(右面) (俗名)

62 (147) 享和三年 (1803) 成人男性 (第73図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はE類である。柎をもつ。大きさは高さ61cm、幅23cm、厚さ24cm、柎はもたない。台石は一段目が57cm×62cmの方形、二段目が一辺41cmの正方形を呈し、厚さは共に20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 釈道了信士
(右側) 享和三亥年
(左側) 二月十五日
(左面) (俗名) 子

63 (234) 享和三年 (1803) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柎をもつ。大きさは高さ60cm、幅24cm、厚さ15cm、柎の長さ8cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 實含(?) 良考信士
(右側) 七月十七日
(左側) 享和三亥年

64 (275) 享和三年 (1803) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓の形状は地藏である(C類)。半肉彫で舟形光背、蓮華座をもつ。光背の上部先端を欠く。大きさは現存高45cm、幅は光背の最大幅21cm、厚さ12cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入がされている。

(右側) ○○○
(左側) 享和三〇

65 (265) 文化二年 (1804) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柎をもつ。大きさは高さ61cm、幅は24cm、厚さ15cm、柎の長さ6cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 梵字 椿香信士
(右面) 文化一戌二月八日
(左面) (俗名)

66 (250) 文化三年 (1806) 成人男性 (第73図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ58cm、幅22cm~24cmで上部が僅かに広い。厚さは15cm、柩の長さ6cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 寒岩相梅信士

(右面) 文化三〇寅年 十二月十二日

67 (148) 文化四年 (1807) 成人女性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ67cm、幅は23cm~26cmで上部に向かい広くなる。厚さは18cmである。柩の長さは6cmである。台石は一辺43cm、厚さ17cmで正方形を呈し、中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 靈光祖卯信女

(右側) 文化四年

(左側) 八月廿五日

68 (59) 文化五年 (1808) 成人男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ57cm、幅24cm、厚さ14cm、柩の長さ8cmである。台石は一辺52cmの正方形、厚さ23cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 金峰元又信士

(右面) 文化五年

(左面) 正月廿五日 (俗名) 三十歳

69 (104) 文化五年 (1808) 成人男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ58cm、幅22cm、厚さ15cm、柩の長さ8cmである。台石は一辺53cm、厚さ18cmで正方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 春山了悦信士

(右面) 文化五年辰二月十七日

(左面) (俗名) 夏

70 (156) 文化五年 (1808) 成人男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類であるが、頭部は後部が高く前方へ傾斜する。柩をもつ。大きさは高さ63cm、幅27cm、厚さ17cm、柩の長さ11cmである。台石は一辺49cmの正方形、厚さ17cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。正面の刻字に墨入がされている。

(中央) 別法教園信士

(右側) 文化五年

(左側) 辰十二月十九日

(右面) (俗名)

71 (220) 文化五年 (1808) 幼年女性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓の形状は地藏である (C類)。半肉彫で舟形光背をもつ。大きさは高さ49cm、幅は光背の最大幅25cm、厚さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(右側) 露光童女

(左側) 文化五辰年 六月六日

72 (247) 文化六年 (1809) 成人男性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類、均整のとれた形状を呈す。柩をもつ。大きさは高さ63cm、幅は23cm~25cmで上部が僅かに広い。厚さは18cm、柩の長さ9cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 善覚良○信士

(右側) (文) 化六巳○

(左側) 七月廿一日

73 (244) 文化九年 (1812) 成人男性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ60cm、幅23cm、厚さ14cm、柩の長さ7cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 南方智劍信士

(右側) 文化九中年

(左側) 九月十二日

74 (4) 文政元年 (1818) 幼年男性 (第74図)

墓標は現位置を保つものではない。墓の形状は地蔵である (C類)。半肉形で舟形光背、蓮華座をもつ。地蔵の顔面が欠損している。大きさは高さ52cm、幅は光背の最大幅で26cmである。厚さは蓮華座下端で17cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。地蔵の衣に墨入がされている。

(右側) 漏水童子

(左側) 文政元年 正月十七日

75 (106) 文政元年 (1818) 成人女性 (第74図)

墓標型式は地蔵である (C類)。半肉形で舟形光背、蓮華座、台石をもつ。光背の上部を欠く。現存高50cm、幅は光背の最大幅26cm、厚さ16cmである。台座は一辺46cmの正方形を呈し、厚さ19cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。

(右側) 文政元寅八月廿六日

(左側) 巖岩道光信女

76 (221) 文政元年 (1818) 幼年女性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。覆いを伴う地蔵である (C類)。半肉形で舟形光背、蓮華座をもつ。石殿を除く大きさは高さ51cm、幅は光背の最大幅24cm、厚さは蓮華座下端で14cmである。石殿の大きさは高さ60cm、幅は下辺で40cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字があり、墨入がされている。

(右側) 惠階産女

(左側) 文政元年寅 十二月十二日

77 (58) 文政三年 (1820) 成人男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓石型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ59cm、幅23cm、厚さ17cmである。台石は一辺49cmの正方形で中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 雪庭宗儀信士

(右側) 文政三辰年

(左側) 十二月廿八日

78 (257) 文政四年 (1821) 成人女性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ61cm、幅は24cm、厚さ18cm、柄の長さは5cmである。凝灰岩で造られている。墓石は正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 月心祖容信女

(左面) 文政四辛巳天 七月廿六日 (俗名) 妻

79 (264) 文政四年 (1821) 男性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標はE-3類である。頭部が平坦で立方体をなし、柄をもつ。大きさは高さ50cm、幅・厚さ共に20cmである。柄の長さ4cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 法名釈○了西

(右側) 文政四己天

(左側) 十月五日

(左面) (俗名) 子 (俗名)

80 (149) 文政六年 (1823) 幼年女性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柄をもつ。大きさは高さ33cm、幅18cm、厚さ13cmである。台石は38cm×33cm、厚さ13cmで方形を呈し、左後方に寄りに柄穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 桂芳童女

(右側) 文政六年

(左側) 申七月廿三日

81 (102) 文政七年 (1824) 幼年男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柄をもつ。大きさは高さ46cm、幅21cm、厚さ16cm、柄の長さは8cmである。台石は一辺46cm、厚さ13cmで正方形を呈し中央に柄穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 眞 玉山智光童子

(右側) 文政七申天

(左側) 四月二十七日

(左面) (俗名)

82 (110B) 文政七年 (1824) 成人女性 (第74図)

墓標は現位置ではなく、台石は90の一段目と組み合うものと考えられる。墓標型式はE-2類である。柄をもつ。大きさは高さ50cm、幅24cm、厚さ17cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 眞 ○月妙光信女

(右側) 文政七申天

(左側) 八月十七日

83 (151) 文政七年 (1824) 成人男性 (第74図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はE-2類に近いが頭部は丸みを帯びる。大きさは高さ66cm、幅は27cm、厚さ26cmである。台石の大きさは一段目が一辺64cm、二段目が一辺44cmの正方形を呈し、高さはそれぞれ15cm、21cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 法名 釈順道

(右側) 文政七申年

(左側) 七月十六日

(右面) (仮名) 豆

84 (70) 文政八年 (1825) 成人男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はE-1類で頭部が四角錐を呈する。大きさは高さ41cm、幅・厚さ共に21cmである。台石の大きさは一辺38.5cmの正方形で、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 釋惠燈

(右側) 文政八酉天

(左側) 六月二十五日

(右面) (俗名)

85 (101) 文政九年 (1826) 幼年男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ54cm、幅24cm、厚さ16.5cmである。台石の大きさは40cm×43cm、厚さ21cmで方形をなし、中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 空 雙景童女

(右側) 文政九丙戌天

(左側) 六月十有五日

86 (152) 文政九年 (1826) 幼年男性 (第74図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ34cm、幅17cm、厚さ13cmである。台石の大きさは縦41cm×横42cm、厚さ15cmでほぼ正方形をなす。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 幻室童子

(右面) 文政九戌年 九月十二日

(左面) (俗名) 子 当才

87 (158) 文政九年 (1826) 成人男性 (第74図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はE-2類に近い形状をなす。大きさは高さ76cm、幅27cm、厚さ24cmである。台石の形状は、一段目が73cm×70cm、高さ14cm、二段目は48cm×47cm、高さ25cmで共にほぼ正方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 歸源心鑑恵明信士灵位

(右側) 文政九年丙戌年

(左側) 十月二十七日

88 (216) 文政九年 (1826) 幼年男性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ46cm、幅23.5cm、厚さ15cm、柩の長さ6cmである。白凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 智薫童子

(右側) 文政九戌年

(左側) 六月七日

89 (245) 文政九年 (1826) 成人男性 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ60cm、幅26cmである。厚さ13cm、柩の長さ6cmである。凝灰岩で造られている。正

面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 忠道義紹信士

(右側) 文政九戌年

(左側) 五月初一日

(右面) (俗名)

90 (252) 文政十一年 (1828) 成人 (第74図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ69cm、幅29cm、厚さ19cm、柩の長さ7cmである。凝灰岩で造られている。次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) ○室寥清信○

(右側) 文政十一子天

(左側) 十一月十日

91 (44) 文政十二年 (1829) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ45cm、幅22cm、厚さ15cmである。台石は一辺36cmの正方形をなし、高さ21cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 行春童子

(右側) 文政十二年

(左側) 十一月廿八日

(右側) (俗名) 子 (俗名) 夏

92 (110A) 文政十二年 (1829) 幼年女性 (第75図)

墓標は台石二段をもつが一段目は79の台石の可能性が高い。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ55cm、幅25cm、厚さ18cm、柩の長さ6cmである。二段目の台石は柩と柩穴の関係から基本体と組み合うものと考えられる。台石の大きさは二段目が背部を欠くものの正面の残存部の状況から一辺42cm、一段目が一辺44cmの正方形を呈し、高さはそれぞれ25cm、23cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 圭芳智白童女

(右側) 文政十二年

(左側) 十二月朔日卒

93 (153) 文政十二年 (1829) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ44cm、幅20cm、厚さ13cm、柩の長さは6cmである。台石は一辺45cmの正方形をなし、高さ14cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 宝林榮○童子

(右面) 文政十二年

(左面) 十二月五日 ○○ ○○

94 (157) 文政十二年 (1829) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ44cm、幅20cm、厚さ12cm、柩の長さ6cmである。台石は43cm×40cmのほぼ正方形を呈し、表面に出ている高さ9cmの部分は直角に面取りされているが、裏面は未加工に近い状態である。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 知遊童子

(左面) 文政十二丑ノ十二月廿日 (俗名) 子 (俗名)

95 (154) 天保三年 (1832) 成人女性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ71cm、幅29.5cm、厚さ11cm、柩の長さ9cmである。台石は51cm×47cmの方形を呈し、高さ28cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 卍 (壺) 巖智卯信女

(右面) 天保三年辰年閏十一月廿六日去

(左面) (俗名) 夏

96 (108) 天保四年 (1833) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ48cm、幅21.5cm、厚さ14cmである。台石は41cm×39cmの方形を呈すが、高さ13cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 秋窓露菊童子

(右側) 天保四癸酉年

(左側) 九月十二日

97 (71) 天保五年 (1834) 成人男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ62cm、幅26cm、厚さ20cm、柩の長さ7cmである。台石は55cm×52cmの方形を呈し、高さ15cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 西米禅意 (們) 士

(右側) 天 (癸) 五申午 (午)

(左側) 十二月十二日

(右面) (俗名) 十六才 (俗名) ?

98 (142) 天保七年 (1836) 幼年女性 (第75図)

墓標は台石一段をもつが、台石が墓本体に比較して大きく、本来組合わない可能性もある。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ39cm、幅18.5cm、厚さ13cmである。台石は一辺70cm程度、厚さ16cmで粗い矩形をなすが、表面は整形されている。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 知春童女

(右面) 天保七申天 正月十五日

(左面) (俗名) 女子 ○○二才

99 (266) 天保八年 (1837) 幼年女性 (第75図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ47cm、幅23cm、厚さ14cm、柩の長さ4cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) (壺) 山妙錦童女

(右側) 天保八酉年

(左側) 十月二十三口

100 (41) 天保十年 (1839) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ47cm、幅20cm、厚さ18cmである。台石は42cm×38cmの矩形を呈し、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 空根雛童子

(右側) 天保十亥年

(左側) 八月廿七日

101 (42) 延享三年 (1746) 成人男性 (第75図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ63cm、幅32cm、厚さ22cmである。台石は一段目が一辺70cm、高さ25cm、二段目は一辺48cm、高さ20cm、凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 瀧岩恵忠信仕

(右側) 天保七丙申年

(左側) 十一月十二日

102 (248) 天保十年 (1839) 成人女性 (第75図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ64cm、幅27cm~29cmで上部に向かい僅かに広くなり、厚さ16.5cm、柩の長さ5cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 海屋妙壽信女

(右側) 天保十年亥

(左側) 八月初二日

103 (1) 天保十一年 (1840) 成人女性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ54cm、幅21cm、厚さ13cmである。台石は一辺40cmの正方形を呈し、高さ11cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 大方以心信女

(右側) 天保十一年庚子年

(左側) 九月初八日卒

(右面) (俗名) 妻 行年七十三才

104 (40) 天保十一年 (1840) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ51cm、幅21cm、厚さ16cmである。台石は44cm×46cmのほぼ正方形を呈し、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) (夢) 宅玄雙童子

(右側) 天保十一年

(左側) 子ノ四月十日

105 (229) 天保十一年 (1840) 幼年女性 (第75図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩はもたない。大きさは高さ45cm、幅23cm、厚さ17cmである。

凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 智音童女位

(右側) 天保十一年子年

(左側) 四月十五日

106 (14) 天保十二年 (1841) 成人男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ55cm、幅23cm、厚さ13cmである。台石は44cm×35cm~37cmの矩形を呈し、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面、

側面に次のような刻字がある。

(中央) 齋齡宗壽信士

(右側) 天保十二丑年

(左側) 正月初九日

(右面) (俗名) 行年八十七才

107 (34) 天保十二年 (1841) 幼年男性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ42cm、幅22cm、厚さ11cmである。台石は一辺39cmの正方形を呈し、高さ14cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 冷照童子

(右側) 天保十二年

(左側) 丑八月廿二日

108 (38) 天保十二年 (1841) 成人女性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ55cm、幅26cm、厚さ19cmである。台石は一辺48cmの正方形を呈し、高さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 妙室玄○信女

(右側) 天保十二年丑

(左側) 六月拾二日卒

109 (88) 天保十二年 (1841) 成人女性 (第75図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ47cm、幅21cm、厚さは14.5cmである。台石は一辺45cmの正方形を呈し、高さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 昌桂壽香信女

(右側) 天保十三寅年

(左側) 六月廿五日卒

110 (145) 天保十三年 (1842) 幼年女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ43cm、幅18cm、厚さ12cmである。台石は70cm×52cm、厚さ15cmで粗い矩形をなすが、表面は繁形されている。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 霜葉童女

(右面) 天保十三寅年

(左面) 十一月廿一

111 (45) 天保十四年 (1843) 成人女性 (第76図)

墓標台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ61cm、幅26cm~28cmで上部に向かい僅かに広がる。厚さは16cmである。台石は45cm×49cmの方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 法雲妙善信女

(右側) 天保十四癸卯年

(左側) 正月十二日卒

112 (249) 天保十四年 (1843) 成人男性 (第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたな

い。大きさは高さ58cm、幅26cm、厚さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 大方成器信士

(右側) 天保十四年〇

(左側) 四月二十六日

113 (254) 天保十四年 (1843) 成人男性 (第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ57cm、幅27cm、厚さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 圓水智鑑信士

(右側) 天保十四卯年

(左側) 四月十日卒

(右面) (俗名) 行年六十五才

114 (217) 弘化二年 (1845) 成人女性 (第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類で、柩をもたない。大きさは高さ62cm、幅28cm、厚さ17cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 春雲智青信女

(右側) 弘化二乙年

(左側) 二月初四日

(右面) (俗名) 妻 行年六十三才

115 (213) 弘化四年 (1847) 成人女性 (第76図)

集積された墓の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類であり、柩をもたない。大きさは高さ52cm、幅24.5cm、厚さ12cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 爲着禪定尼

(右側) 弘化四〇年

(左側) 十月廿八日

116 (60) 嘉永元年 (1848) 成人女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ54cm、幅28cm、厚さ16cmである。台石は一辺41cmの正方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 雪巖妙白信女

(右側) 嘉永元戌申年

(左側) 十二月二十二日卒

(右面) (俗名) 母

117 (159) 嘉永元年 (1848) 成人男性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ74cm、幅27cm、厚さは18cmである。台石は一辺60cmの正方形を呈し、高さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。※嘉永元年の干支は「戌申」でないとおかしい。「申寅」は安政元年(1854)の干支であり、誤って刻字されたものと考えられる。

(中央) 鐵関宗透信士

(右側) 嘉永元申寅年

(左側) 二月二十五日

(右面) (俗名) 行年六十五才

118 (75) 嘉永二年 (1849) 幼年女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。朝込みをもつが、左半部が剥落している。墓本体の大きさは高さ47cm、幅22cm、厚さ15cmである。台石は40cm×39cmのほぼ正方形を呈し、高さ17cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字があるが左半部は剥落のため不明瞭である。刻字に墨入がされている。

(中央) ○○妙(枕?) 童女

(右側) 嘉永二酉酉年

(左側) ○○日○

(右面) (俗名) 娘

119 (100) 嘉永七年 (1854) 成人男性 (第76図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ53cm、幅22cm、厚さ15cm、柩の長さ8cmである。台石は一段目が56cm×55cm、高さ16cm、二段目は46cm×43cm、高さ22cmで共にほぼ正方形を呈す。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 心誠無三禪定門

(右側) 嘉永七龍(雙) 申寅年

(左側) 二月二十一日寂

(右面) (俗名) 行年六十五才卒

120 (208) 嘉永七年 (1854) 成人女性 (第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓石型式は頭部が丸いがD-2類といえよう。柩をもたない。大きさは高さ66cm、幅27cm、厚さ14cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 飯元 桐林知秋信女

(右側) 嘉永七〇年

(左側) 七月廿五日

(右面) (俗名) 妻 ○十六才

121 (9) 安政二年 (1855) 幼年男性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ40cm、幅20cm、厚さ12cmである。台石は自然石に近く、正面と表面が整形されている。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。朝込み内の刻字に墨入がされている。

(中央) 秋桂素盆童子

(右側) 安政二乙卯年九歳 ○○氏(朝込みの右、後補)

(左側) 七月十五日 (俗名)

122 (15) 安政二年 (1746) 成人女性 (第76図)

墓標は現位置を移動していたが位置関係からみて、図示した台石と組み合うものと判断した。墓標の形状は粗い成形で上部が尖る山形をなす(G類)。正面に平滑に整形され台形の朝込みをもつ。大きさは高さ62cm、幅は下辺で30cmである。厚さは15cm~18cmでほぼ均一。台石は本来矩形と考えられるが左側を欠損している。表面は整形されている。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 秋月智淨信女

(右側) 安政二〇〇

(左側) 七〇月〇〇〇

123 (203) 安政二年 (1855) 幼年男性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ39cm、幅17cm、厚さ12cmである。台石は29cm×33cmの方形をなし、高さ11cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 心相明〇童子 〇〇氏 (朝込み下、後補)

(右側) 安政二年〇〇 (俗名)

124 (256) 安政二年 (1855) 幼年男性 (第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ52cm、幅27cm、厚さ15cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 露月機千童子

(右側) 安政二乙卯年

(左側) 八月十九日〇

(左面) (俗名) 〇才

125 (160) 安政四年 (1857) 嬰兒女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ34cm、幅17cm、厚さは17.5cmである。台石は一辺30cmの正方形を呈し、高さ13cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 秋水嬰兒

(右面) 安政四巳年 七月八日

(左面) (仮名) 娘夏

126 (50) 安政五年 (1858) 幼年女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類であるが、墓本体の整形はやや粗い。大きさは高さ39cm、幅18cm～22cmで上部に向かい広くなる。厚さは11cmである。台石は一辺37cmの正方形を呈し、高さ17cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 妙 智童女

(右側) 安政五年

(左側) 午六月一日

(左面) (俗名) 娘

127 (33) 安政六年 (1859) 成人男性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ64cm、幅30cm、厚さ29cmである。台石は52cm×56cmの方形を呈し、高さは11cmと低い。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 本空如然信士

(右側) 安政六未年

(左側) 八月廿一日

(右面) (俗名) 夏 行年三十一才

128 (53) 安政七年 (1860) 幼年女性 (第76図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ50cm、幅23cm～25cmで上部

に向かい僅かに細くなる。厚さは14cmである。台石は部分的に欠損するが一辺44cmの正方形を呈し、高さ15cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 春(陽?) 童女

(右側) 安政七申未〇

(左側) 二月八日卒

(左面) 行年四才 (俗名) 娘(娘?) (俗名)

129 (91) 文久元年(1861) 成人男性(第76図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。基本体の下面はやや窪む。大きさは高さ64cm、幅27cm、厚さ20cmである。台石は一段目が65cm×64cm、高さ23cm、二段目が一辺44cm、高さ24cmで、共に正方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 寂岸惠浄居士

(右側) 文久元年酉歳

(左側) 六月廿日

(左面) (俗名) 豆

130 (246) 元治元年(1864) 成人女性(第76図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ58cm、幅28cm、厚さ21.5cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。なお、右側面に墨書が確認できるが、判読不明。

(中央) 妙因信女

(右側) 元治元子年

(左側) 十月二十六日

131 (99) 慶應元年(1865) 成人女性(第77図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ47cm、幅24cm、厚さ16.5cmである。台石は一段目が40cm×33cm、高さ19cm、二段目が56cm×51cm、高さ17cmの方形を呈す。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 心光妙三信女

(右側) 慶應元乙丑歳

(左側) 十二月二日寂

(左面) (俗名) 祖母 保壽六十八歳

132 (97) 慶應三年(1867) 幼年女性(第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ41cm、幅19cm～21cm、厚さ15cmである。台石一辺39cmの正方形を呈し、高さ15cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 蓮光智葉童女

(右側) 慶應三卯歳

(左側) 三月廿九日

(右面) (俗名) 子

133 (163) 慶應三年(1867) 成人女性(第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ55cm、幅29.5cm、厚さ15cmである。台石は54cm×40cmの長方形を呈し、高さ23cmである。表面は墓本体を受ける

深さ1.5cmの剣込みと納穴もつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 春翁妙觀信女

(右側) 慶應三丁卯歳

(左側) 三月一八日

(左面) (俗名) 母

134 (35) 慶應四年 (1868) 成人男性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩はもたない。大きさは高さ41cm、幅20cm、厚さ14cmである。台石は36cm×32cmの方形を呈し、高さ13cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 露楊童子

(右側) 慶應四辰歳

(左側) 閏四月五日

135 (212) 明治二年 (1869) 成人男性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ52cm、幅26cm、厚さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 梅宗全義信士

(右側) 明治己巳歳

(左側) 十月廿八日

(左面) (俗名) 夏 七十六〇

136 (273) 明治二年 (1869) 成人男性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ50cm、幅24cm、厚さ15cm、柩の長さ7cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 鐵 (船) 妙運信女

(右側) 明治二巳歳

(左側) 八月二日〇

(右面) (俗名) 娘

137 (43) 明治三年 (1870) 成人女性 (第77図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ57cm、幅27cm、厚さ17cmである。台石は一段目が一辺61cm、二段目は一辺42cmで共に正方形を呈す。高さはそれぞれ18cm、21cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 梅巖恵玉信女

(右側) 明治三庚歳

(左側) 十月廿二日卒

(右面) (俗名) 母 六十七歳

138 (219) 明治三年 (1870) 幼年男性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ41cm、幅20cm、厚さ13cm、柩の長さ6cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 恵哉童子

(右側) 明治三庚午歳

(左側) 六月廿一日卒

(右面) (俗名) 孫

139 (37) 明治五年 (1872) 幼年女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ38cm、幅18cm、厚さ14cmである。台石は一辺33cmの正方形を呈し、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に朱が入れられている。

(中央) 梅陰自香童女

(右側) 明治五壬申歳

(左側) 十月十二日卒

140 (69) 明治五年 (1872) 成人女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類位牌形である。柎をもつ。大きさは高さ54cm、幅25cm、厚さ18cmである。台石は48cm×45cmの方形を呈し、高さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 善園妙意信女

(右側) 明治五壬申歳

(左側) 八月廿八日

(右面) (俗名) 妻

141 (277) 明治六年 (1873) 成人女性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柎をもつ。大きさは高さ50cm、幅24cm、厚さ16cm、柎の長さ4.5cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 桂巖妙秋信女

(右側) 明治六癸酉年

(左側) 八月廿四日卒

(左面) (俗名) 妻 保壽五拾貳歳

142 (22) 明治九年 (1876) 成人女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ55cm、幅26cm、厚さ15cmである。台石は48cm×43cmの方形を呈し、高さ15cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 春岳宗壽信女

(右側) 明治九子年

(左側) 四月廿壬日 五月十九日 (日)

(左面) (俗名) 娘

143 (23) 明治十年 (1746) 成人女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ54cm、幅27cm、厚さ16.5cmである。台石は一辺47cmの正方形を呈し、高さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 松室妙壽信女

(右側) 明治十丁丑年

(左側) 十二月廿一日

144 (164) 明治十年 (1746) 成人男性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ59cm、幅28cm、厚さ20cmである。台石は一辺64cmの正方形を呈し、高さ13cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 清雲宗源信士

(右側) 明治十丁丑年

(左側) 四月二日卒

145 (94) 明治十一年 (1878) 成人女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ51cm、幅25cm、厚さ15cmである。台石は43cm×37cmの方形を呈し、高さ14cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 寒岩恵松信女

(右側) 明治十一年

(左側) 旧十二月四日亡

(右面) (俗名) 妻 (俗名)

146 (31) 明治十二年 (1879) 成人男性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ54cm、幅26cm、厚さ、17cmである。台石は46cm×44cmの方形を呈し、高さ22cmである。凝灰岩で造られている。正面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 實楓了覺信士

(右側) 明治十二己卯年

(左側) 三月五日

(右面) (俗名) 亶 八十才

147 (209) 明治十二年 (1879) 成人男性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柄はもたない。大きさは高さ54cm、幅25cm、厚さ15cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 鐵山恵心信士

(右側) 明治十二己卯年

(左側) 四月八日卒

(左面) (俗名) 亶 保 (壽?) 拾壹歳

148 (278) 明治十二年 (1879) 成人女性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柄をもつ。大きさは高さ48cm、幅24cm、厚さ16cm、柄の長さ5cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 関室宗音信女

(右側) 明治十二己卯年

(左側) 七月〇日卒

(右面) (俗名) 娘 (俗名)

149 (21) 明治十三年 (1880) 成人男性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ53cm、幅27cm、厚さ19cmである。台石は46cm×42cmの方形を呈し、高さ7cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 清林信士

(右面) 明治十三年四月十日 伊村房五郎祖父

150 (48) 明治十四年 (1881) 成人男性 (第77図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ58cm、幅27cm、厚さ20cmである。台石は一段目が69cm×68cm、二段目は42cm×40cmと共にほぼ正方形を呈し、高さはそれぞれ24cm、11cm以上である。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) (禪) 堂淨果信士

(右側) 明治十四辛己年

(左側) 旧三月十五日卒 (ス?)

(左面) (俗名) 夏

151 (61) 明治十四年 (1881) 幼年女性 (第77図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ46cm、幅20cm、厚さ15cmである。台石は一辺34cmの正方形を呈し、高さ16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 菊英童女

(右側) 明治十四辛年

(左側) 旧九月八日卒

(右側) (俗名) 娘 (俗名)

152 (210) 明治十四年 (1881) 成人男性 (第77図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ60cm、幅27cm、厚さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 冬巖永雪信士

(右側) 明治十四辛己歲

(左側) 一月廿九日卒ス

(右面) (俗名) 夏

153 (74) 明治十五年 (1882) 成人男性 (第78図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ63cm、幅27cm、厚さ21cmである。台石は一段目が一辺67cm、二段目は一辺49cmの正方形を呈し、高さはそれぞれ18cm、21cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(中央) 香山清光信士

(右側) 明治十五年午年

(左側) 旧正月十日卒

(右面) (俗名) 夏 保壽五拾八歲

154 (90) 明治十五年 (1882) 成人男性 (第78図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ66cm、幅27cm、厚さ19cmである。墓本体の下面はやや窪む整形がみられる。台石は一段目が62cm×60cm、二段目は47cm×43cmで共にほぼ正方形を呈し、高さは17cm、22cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 慈海宗源信士

(右側) 明治十五壬午歲

(左側) 旧七月廿日

(左面) (俗名)

155 (93) 明治十九年 (1886) 成人男性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ54cm、幅29cm、厚さ16cm、柩の長さ5cmである。台石は一辺45cmの正方形を呈し、高さ15cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 靈雲道眼信士

(右側) 明治十九年

(左側) 旧二月三日 (木?)

(左面) (俗名) 夏

156 (32) 明治二十年 (1887) 成人男性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ56cm、幅26cm、厚さ17cm、柩の長さ6cmである。台石は42cm×44cmのほぼ正方形を呈し、高さ15cmである。中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) (靈) 峰木白信士

(右面) 明治廿丁亥年

(左面) 旧十二月二日 (俗名) 夏 行年六十一才卒

157 (46) 明治二十年 (1887) 成人男性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ60cm、幅30cm、厚さ17cmである。台石は45cm×37cmの方形を呈し、高さ19cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(中央) 同會

(右側) (無?) 外清高信士

(左側) 本覺常照信士

(右面) (無) 明治二十年亥年 旧九月十七日卒 (俗名)

(左面) 本 明治二十一年子年 旧九月初七日卒 (俗名) 夏

158 (89) 明治二十年 (1887) 成年男性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ57cm、幅24cm、厚さ14cmである。台石は44cm×41cmのほぼ正方形を呈し、高さ20cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 誠岩玄義信士

(右面) 明治二十丁亥年

(左面) 陰五月廿五日

159 (46) 明治二十一年 (1888) 成人男性 (第78図)

156に詳網。

160 (274) 明治二十一年 (1888) 成人女性 (第78図)

墓標は現位置を保つものではなく台石を欠く。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ59cm、幅27cm、厚さ19cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(正面) 真月妙光信女

(右面) 明治二十一年四月

(左側) (俗名) 妻 (俗名) 夏

161 (6) 明治二十四年 (1891) 成人女性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ53cm、幅27cm、厚さ19cmである。台石は44cm×40cmの方形を呈し、高さ22cmである。台石の裏面は凹状に整形されている。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 心相明信女

(左面) 明治廿四年正月廿三年 (俗名) 祖母

162 (218) 明治二十四年 (1891) 幼年男性 (第78図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ44cm、幅20cm、厚さ13cm、柩の長さ5cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 智嶺童子

(右面) 明治廿四年 十月十九日

(左面) (俗名) 長男 (俗名) 丁

163 (150) 明治二十五年 (1892) 成人女性 (第78図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。柩をもつ。大きさは高さ60cm、幅28cm、厚さ21cm、柩の長さ4cmである。台石は一段目が61cm×56cm、二段目は44cm×42cmの方形を呈し、高さは35cm、27cmである。二段目の中央に柩穴をもつ。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(正面) 寂室智光信女

(右面) 明治廿五年十二月十一日 (俗名) 母 (俗名) 丁

164 (279) 明治二十五年 (1892) 幼年男性 (第78図)

集積された墓標の一つであり、現位置は不明である。墓標型式はD-2類である。柩をもたない。大きさは高さ38cm、幅20cm、厚さ15cmである。凝灰岩で造られている。墓石正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 春暁童子

(右面) 明治廿五年正月廿九日

(左側) (俗名) 子 (俗名)

165 (200) 明治二十七年 (1894) 成人女性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ51cm、幅25cm、厚さ18cmである。台石は一辺40cm、高さ19cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。

(正面) 真相妙園信女

(左面) 明治二十七年五月十八日 (俗名) 母 (俗名)

166 (57) 明治二十九年 (1896) 成人女性 (第78図)

墓標は台石二段をもつ。墓標型式はD-2類である。墓本体の大きさは高さ48cm、幅24cm、厚さ17cmである。台石は一段目が50cm×54cm、二段目は39cm×37cmの共に正方形に近い方形を呈し、高さはそれぞれ13cm、16cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。刻字に墨入がされている。

(正面) 真相妙傳信女

(右面) 明治廿九年四月九日

(左面) (俗名) 祖母 (俗名) 塔

167 (10) 明治三十一年 (1898) 幼年男性 (第78図)

墓標は台石一段をもつ。墓標型式はD-2類である。大きさは高さ42cm、幅24cm、厚さ17cmである。台石は32cm×38cmの矩形を呈し、高さ18cmである。凝灰岩で造られている。正面、側面に次のような刻字がある。正面・右側面の刻字に墨人がされている。

(正面) 春峰知性童子

(右面) 明治三十一年正月六日

(左面) (俗名) 子 (俗名) (丁?)

その他の墓 (第79図)

この墓地の最も東部は東に向かい徐々に下っていくが、その縁辺に五輪塔が3基位置する。五輪塔は西側を掘削、平坦に造成した範囲に置かれていた。

168 (165) は、高さ79cmである。各部位の高さは、空・風輪が32cm、火輪が15cm、水輪18cm、地輪14cmとなっている (A-1類)。

169 (166) は、高さ86cmである。各部位の高さは、空・風輪が30cm、火輪が17cm、水輪が20cm、地輪が19cmとなっている (A-1類)。

170 (167) は、高さ76cmである。各部位の高さは、空・風輪が27cm、火輪が11cm、水輪が21cm、地輪が17cmとなっている (A-1類)。

171 (225) は、一石五輪塔である (A-1類)。大きさは高さ56cm、幅25cmであるが、火輪の隅端を欠く。水輪に「パン (金剛界大日如来)」の種子が墨書されている。

川野墓地の変遷

川野墓地は南側を道路建設で削られており、墓標の全てが確認されたわけではない。しかし現存する墓標から墓地形成の過程をみていくことは可能と思われる。墓標に刻まれた没年に基づき50年単位で墓地形成の推移を示すと次のようになる。

I期 (1703~1747) : 1~16

最古の墓標は元禄16年の1 (253) であるが、原位置は不明。2 (119) は宝永5年で、墓地中央東寄りのE-III区に位置する。墓標の分布については2箇所をまとまりを認めることができる。まず1箇所は2を中心としてE・F-III・IV区に2・7・8・11~13の6基がまとまる。他の1箇所は調査区西部のB・C-III区にみられる4・6・10・15の4基のまとまりである。墓標形式は自然石に近い形態 (G類)、頭部が弧状を呈する形態 (D類)、頭部が切妻状に三角形を呈する (B類) の各形態があるがD類が最も多い。墓標 (成人墓) の大きさについては、G類では38cm、60cm、B類では58cm、69cm、D類は54cm~94cmと幅があるが高い傾向を示すといえる。厚さ10cm前後で薄い。正面の顔込みは12が板碑状を呈し、頭部が三角形をなす。享保年間では宝珠形が退化した形状が顕著に残る。台石は7の2段を除けば、前面と上面を整えた程度の粗い成形で仕上げられたものが殆どである。幼児の墓には地蔵が用いられている。

II期 (1752~1798) : 17~59

墓標は幼年10基、成人女性14基、成人男性18基の32基である。墓標の分布は、I期の2箇所を中心とした広がりを示す。東部ではE・F-III・IV・V区、西部ではA・B・C-I・II・III区に分布する。西部においてこの墓地で名字の初見となるA家の墓標 (41) が確認される。墓標形式は無縫塔 (A類) のほか、B・C・D・Eの各類型がみられる。墓標の大きさは、A類 (22) が高さ44cm、径24cm、B類では高さ56cm~69cmで平均64cm、幅27cm~30cmで平均28.5cm、厚さ10cm~16cmで平均24cmである。C類は高さ46cm~58cmで平均50cm、幅26cm~32cmで平均28.3cm、厚さ13cm~22cmで平均17cmである。D-1類は高さ59cm~87cmで平均67.2cm、幅22

cm～37cmで平均29.4cm、厚さ9cm～24cmで平均13.8cmである。D-2類は高さ47cm～70cmで平均59.7cm、幅21cm～32cmで平均25.8cm、厚さ9cm～22cmで平均15.1cmである。E類は高さ54cm、幅、厚さ共に25cmである。G類は高さ56cm～62cmで平均58.3cm、幅24cm～35cmで平均27.7cm、厚さ12cm～17cmで平均14.7cmである。この中ではD-1類の20、34は墓標本体が頭部に比べ下端の幅が広がる特徴をもつ。E-2類の26は頭部が台状に造り出された形態の初見である。幼児の墓には地蔵と小型のD類が用いられている。

Ⅲ期（1801～1849）：60～118

墓標は幼年20基、成人女性14基、成人男性21基の58基である。墓標の分布は、西部では、Ⅱ期の墓標の配置にあわせて西側および北側に規則的な造墓がみられる。東部ではⅡ期の範囲に墓標の増加はみられない。むしろ北部のE・F-Ⅱ区と南東部のF-V・Ⅵ区に新たな墓標が設けられ墓地の広がりが認められる。墓標形式はC・D・Eの各類型がみられる。墓標の大きさは、C類が高さ45cm・50cm、幅21cm・26cm、厚さ12cm・16cmである。D-1類は高さ59cm・64cm、幅26cm・29cm、厚さ16cm・22cmである。D-2類は高さ45cm～74cmで平均59.3cm、幅21cm～32cmで平均25.5cm、厚さ12cm～22cmで平均16.2cmである。E類は高さ50cm～76cmで平均63.3cm、幅20cm～27cmで平均24.3cm、厚さ20cm～26cmで平均23.5cmである。この中ではE類の83・87はⅡ期にみられる形態であるが、正面の割込みが2段の頭部をもち段の左右の境で鋭角に切り込む特徴をもつ。さらに87は割込みの下部が頭部と同様に2段となる。このような割込みの特徴はこの時期の他の墓標形式においても顕著となる。幼児の墓には地蔵と小型のD類が用いられているが、地蔵（C類）は76（1818年）を最後にみられなくなる。

Ⅳ期（1854～1867）：119～133

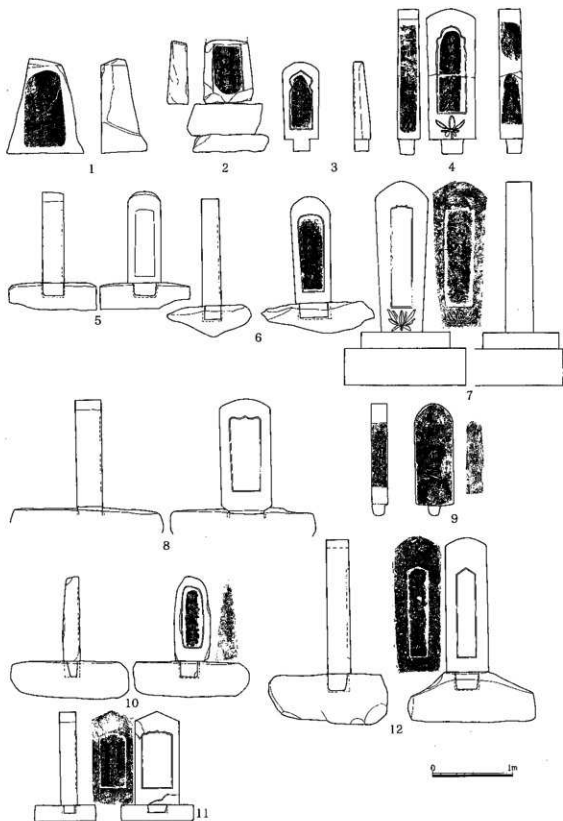
幕末の13年間に造られた墓である。幼年7基、成人女性5基、成人男性3基の14基で構成される。墓標の分布は、西部の空隙地とⅢ期に新たな墓地造営がみられた北部と南東部に確認できる。墓標形式はD・Gの各類型がみられる。墓標の大きさは、D-2類が高さ47cm～66cmで平均58.1cm、幅22cm～30cmで平均26.9cm、厚さ14cm～29cmで平均18.9cmである。G類は高さ62cm、幅30cm、厚さ18cmである。

Ⅴ期（1868～1898）：134～167

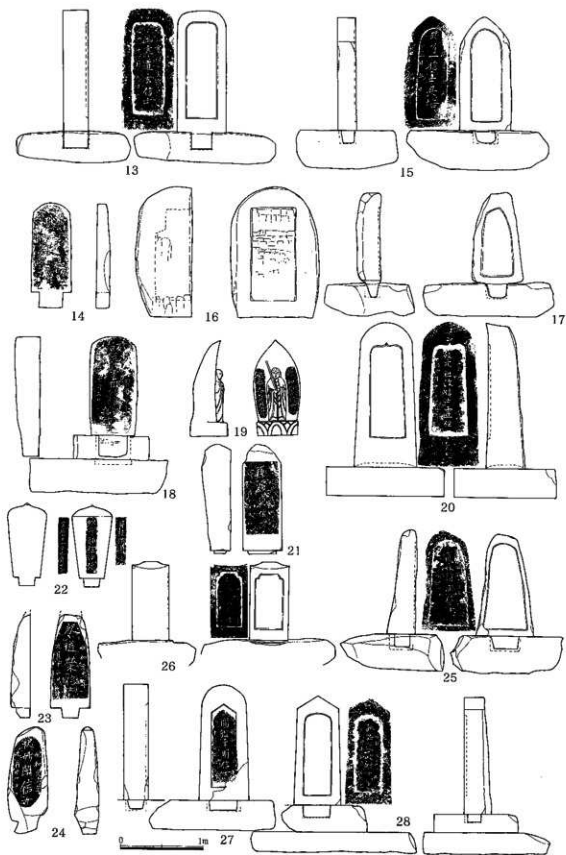
明治元年から明治31年までの10年間に造られた墓である。幼年7基、成人女性13基、成人男性14基の34基で構成される。墓標の分布は、西部でA家の墓地が西へ新たな広がりを示す。最後の墓が造られる。A家の墓域では北東にあたる場所にD家、C家の墓が既存の墓の間に造られる。調査区の中央部と東端部にB家の墓地が設けられる。墓標形式はD-2類のみで高さ48cm～66cmで平均55.2cm、幅24cm～27cmで平均26.3cm、厚さ14cm～21cmで平均17.3cmである。このなかで144は墓標の右側面に「熊本鎮臺○○○○ 高中マメハラタカカイニ而〇死」と刻まれており、被葬者が西南役に参戦し、戦死した人物であることを示している。

明治31年以降の新たな墓の造営は確認されないため、この墓地の形成は終えたものといえる。終焉の理由については、当時の政策により「墓地及埋葬規則」等で法的な規制を受け、新規の墓地造営が他所で行われたことも一因となろうが、墓地空間が限界に達していたことが主因と考えられる。

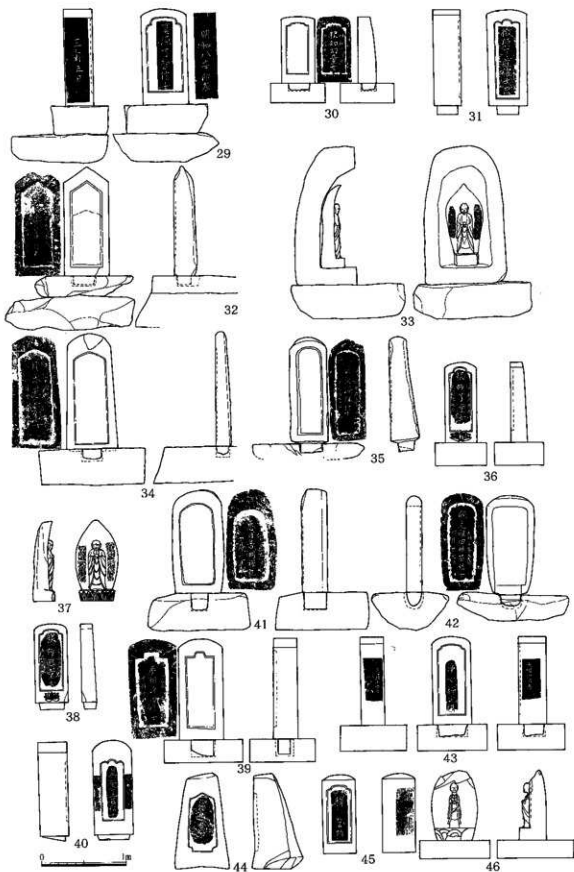
家族墓の形成については、名字を刻む墓標で原位置を保つ例が21基ほど残っており、累代の墓地空間の占地を想定する材料となる。名字はA、B、C、Dの4家が存在する。このうち初見はA家で1783年の没年をもつ。同家の被葬者であることが明らかな7名の墓標は、墓地入り口に最も近い西部域においてみられる。このため前代から引継ぎ、代々この墓域を占有したものであろう。この墓域に他家の墓標がみられるようになるのは明治期に入ってからである。



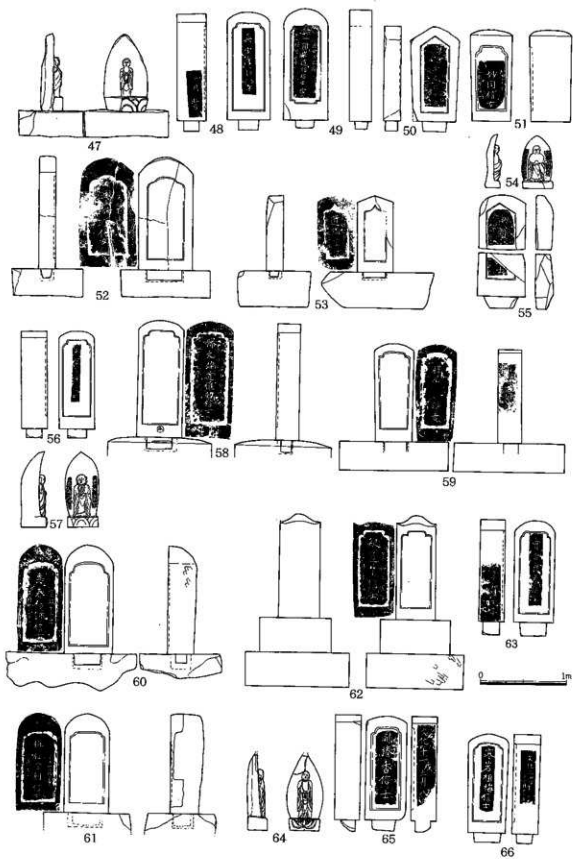
第69圖 墓標実測図 (1)



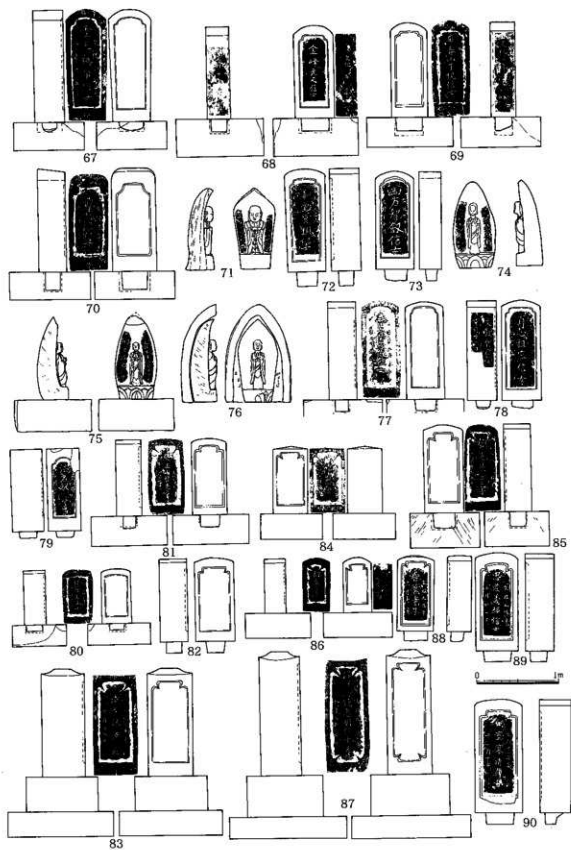
第70图 墓標実測図(2)



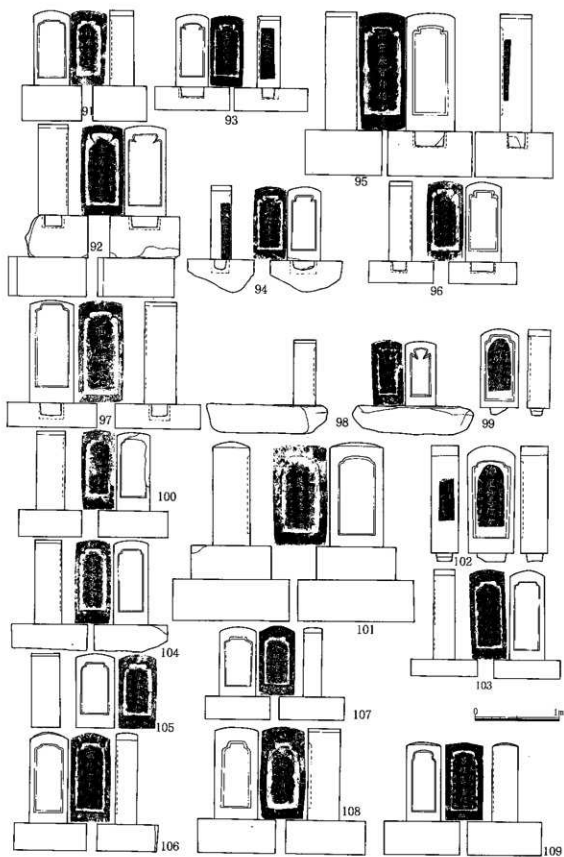
第71図 墓標実測図(3)



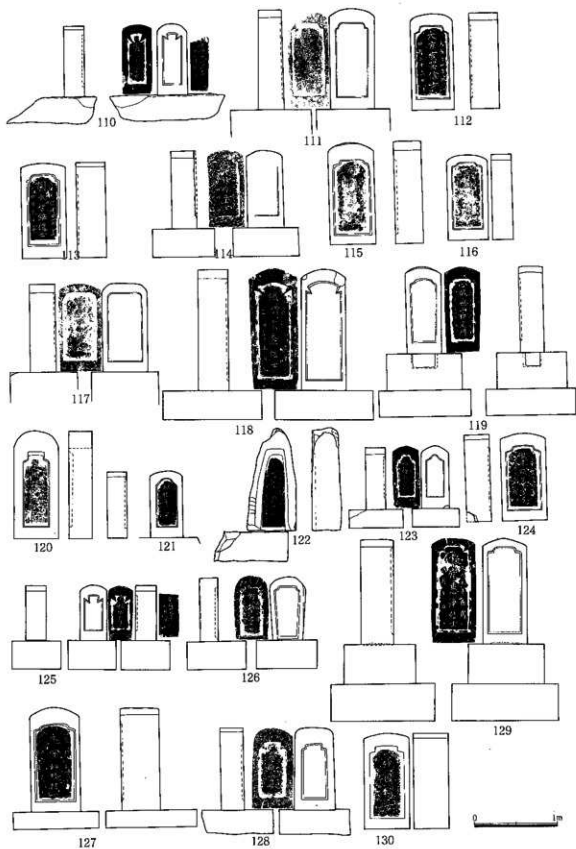
第72圖 墓標実測圖(4)



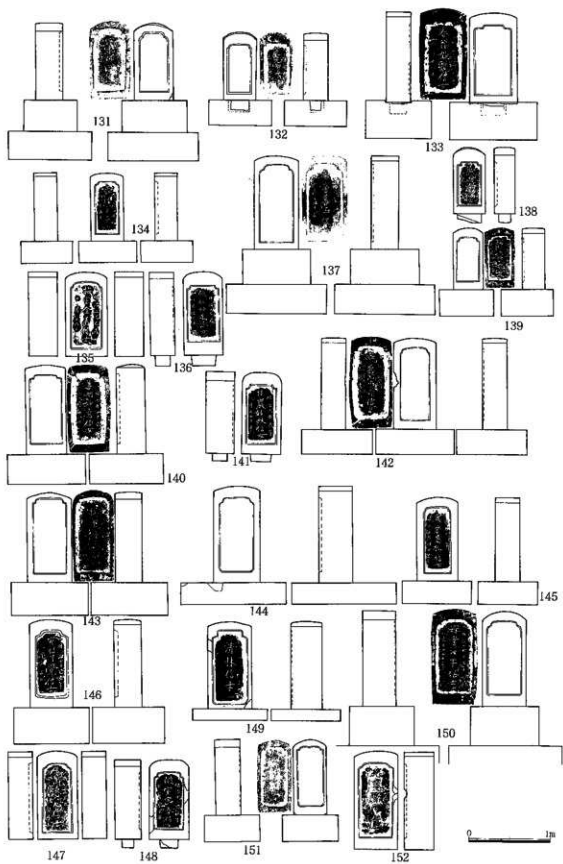
第73図 墓標実測図 (5)



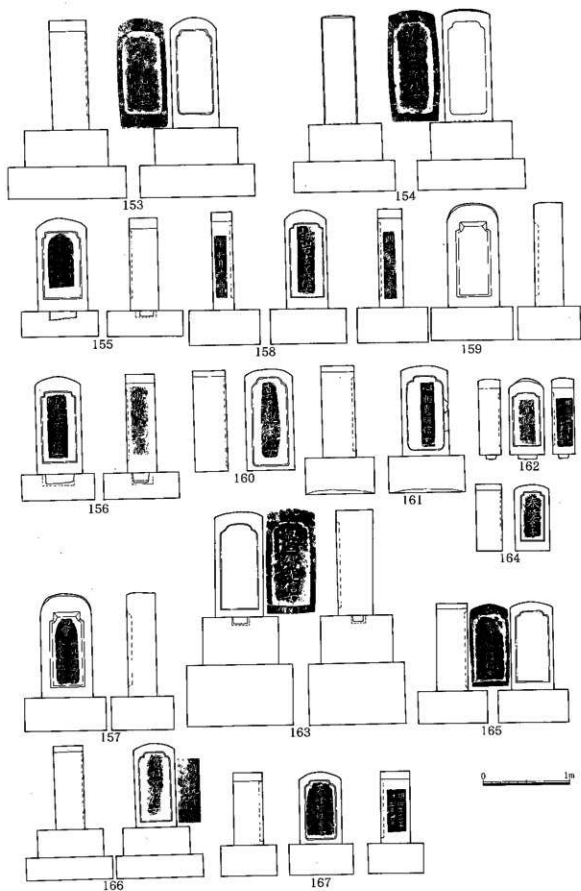
第74 菱椀実測図 (6)



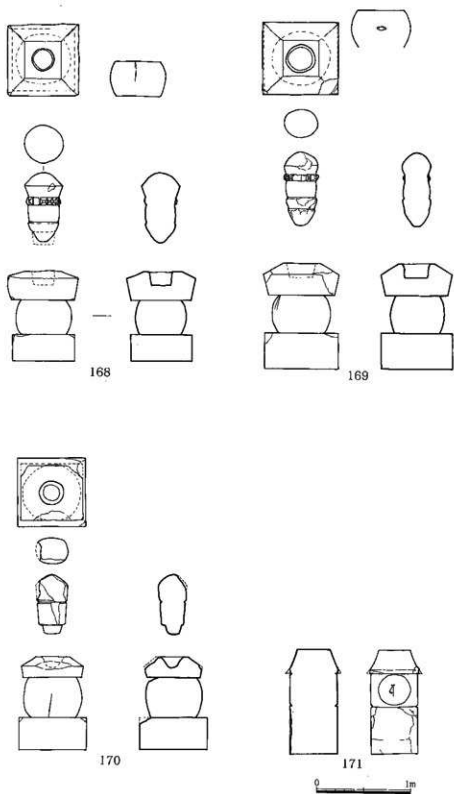
第75図 墓標実測図(7)



第76图 墓標実測图 (8)



第77図 墓標実測図 (9)



第78图 墓槨実測图 (10)

順列	実測番号	西暦	年号	月日	型式	戒名	俗名	性別	年齢	原位置	備考
1	253	1703	元禄16年	1月24日	G	寂室誓常信士		男		×	
2	119	1708	宝永5年	6月19日	G	観妙幽信女		女		○	上部欠損
3	260	1710	宝永7年	5月〇日	D-1	妙〇童女幽霊		女		×	
4	19	1714	正徳4年	9月29日	D-2	心性妙安信女霊位		女		○	
5	269	1720	享保5年	2月〇2	D-2	浄誓守貞?大姉		女		×	
6	55	1722	享保7年	7月初4日	D-2	妙〇信尼		女		○	
7	129	1724	享保9年	1月25日	D-2	釈妙泉信女不退位		女		○	台座二段
8	131	1726	享保11年	11月1日	D-2	恵林壽性信女		女		○	
9	79	1727	享保12年	陸月16日	D-2	了徹信士		男		×	
10	81	1727	享保12年	12月18日	G	釋妙智信女		女		○	
11	207	1731	享保16年	2月21日	B-2	竹翁道節信士		男		○	
12	124	1738	元文3年	1月4日	D-2	解因〇〇信女		女		○	
13	109	1743	寛保3年	11月9日	D-2	幽寒道玄信士		男		○	
14	259	1743	寛保3年	12月25日	B-2	祖〇〇心居士		男		×	
15	83	1746	延享3年	3月5日	B-2	〇一信士		男		○	
16	224	1747	延享4年	3月8日		〇〇童女		女		×	221とセット?
17	73	1752	宝暦2年	11月24日	G	釈尼妙悦		女		○	
18	135	1752	宝暦2年	7月2日	D-2	雲樹妙除信女		女		×	
19	235	1752	宝暦2年	7月11日	C	釋知誓信女		女		?	
20	67	1754	宝暦4年	4月10日	D-1	祖改信士		男		○	
21	230	1760	宝暦10年	8月14日	B-2	釋妙〇信女		女		×	
22	231	1761	宝暦11年	5月23日	A-3	妙音師絃沙弥				×	月柱掘開徒
23	238	1764	明和元年	9月13日	G	釈道榮信士		男		×	
24	271	1764	明和元年	9月11日	G	釈竹閑信女		女		×	
25	29	1769	明和6年	9月21日	G	叢林祖潤信士		男		○	
26	127	1769	明和6年	2月初5日	E-2	釈春岩信士	○	男		○	
27	64	1771	明和8年	10月29日	D-2	圓鑑素明信士	○	男		○	
28	65	1771	明和8年	8月17日	B-2	弧峰道峻信士	○	男		○	
29	116	1771	明和8年	3月5日	D-2	真源了智信士		男		○	
30	134	1771	明和8年	4月28日	D-1	釈知幻童女	○	女		○	
31	227	1771	明和8年	9月25日	D-2	徹照了道信士	○	男		×	
32	24	1773	安永2年	4月7日	B-1	南窓慧薫信女		女		○	
33	54	1773	安永2年	2月12日	C	智英童女		女		○	
34	52	1775	安永4年	8月21日	D-1	月峯?慈照信女		女		○	
35	11	1776	安永5年	7月27日	D-1	羅曼淨休信士		男		○	
36	136	1776	安永5年	5月29日	D-1	釈妙了童女		女		○	
37	236	1776	安永5年	6月4日	C	釋遊西童子		男		×	
38	262	1776	安永5年	5月20日	D-2	釈妙遊童女		女		×	
39	85	1779	安永8年	10月10日	D-2	夢相淨圓信士		男		○	
40	233	1779	安永8年	8月26日	D-2	眞榮了實信士	○	男		×	
41	62	1780	安永9年	4月7日	D-2	恵日普明淨尼		女		○	
42	2	1783	天明3年	4月27日	D	碩田祖岳信士	○	男		○	

川野遺跡墓標一覽表 1

埋葬順	実別番号	西暦	年号	月日	型式	戒名	俗名	性別	年齢	原位置	備考
43	86	1784	天明4年	1月14日	D-2	浄心禪定門		男		○	
44	255	1784	天明4年	8月16日	G	無明童子		男		○	
45	268	1784	天明4年	12月20日	E	輝○○折	○	男		×	
46	112	1785	天明5年	7月5日	C	妙葉信女		女		○	
47	130	1785	天明5年	7月5日	C	妙哲信女		女		○	
48	239	1785	天明5年	6月晦日	D-2	真空淨觀信士		男		×	
49	258	1785	天明5年	権?月5日	D-2	圓岩澗相信士靈		男		×	
50	272	1785	天明5年	2月10日	B-2	素忠信十靈		男		×	
51	215	1787	天明7年	4月22日	E	妙円信女		女			
52	103	1787	天明7年	7月13日	D-2	徽山妙澗信女		女		○	
53	105	1787	天明7年	10月22日	B-2	道鑑童子	○	男		○	
54	237	1788	天明8年	6月18日	C	釈實心童子		女		×	
55	263	1788	天明8年	12月24日	D-1	浄國○○○士		男		×	
56	228	1790	寛政2年	7月24日	D-2	真空了源信女		女		×	
57	276	1793	寛政5年	9月8日	C	年満?童子		男		×	
58	49	1795	寛政7年	10月8日	D-2	瑞蓮権の信士	○	男		○	
59	47	1798	寛政10年	10月8日	D-2	釋尼○○妙善		女		○	
60	12	1801	寛政13年	1月23日	D-1	惠春妙跡信女	○	女		○	
61	13	1802	享和2年	3月22日	D	桃仙全利信士	○	男		○	
62	147	1803	享保3年	2月15日	E	祝蓮了信士	○	男		○	
63	234	1803	享保3年	7月17日	D-2	實○良考信士		男		×	
64	275	1803	享保3年		C					×	戒名等は別
65	265	1804	文化1年	2月8日	D-2	椿香信士	○	男		×	書
66	250	1806	文化3年	12月12日	D-2	寒岩相傳信士		男		×	
67	148	1807	文化4年	8月25日	D-2	靈光相印信女	○	女		○	
68	59	1808	文化5年	1月25日	D-2	金峰元又信士	○	男		○	
69	104	1808	文化5年	2月17日	D-2	香山了悦信士	○	男		○	
70	156	1808	文化5年	12月19日	D-2	別法教圓信士	○	男		○	
71	220	1808	文化5年	6月6日	C	露光童子		女		×	
72	247	1809	文化6年	7月21日	D-2	善覺良○信士		男		○	
73	244	1812	文化9年	9月12日	D-2	幽方智辨信士		男		×	
74	4	1818	文政元年	1月17日	C	瀧水童子		男		×	
75	106	1818	文政元年	8月26日	C	圓岩澗光信女		女		○	
76	221	1818	文政元年	12月12日	C	惠階童子		女		×	
77	58	1820	文政3年	12月28日	D-2	靈庭宗儀信士		男		×	
78	257	1821	文政4年	7月26日	D-2	月心相容信女	○	女		×	
79	264	1821	文政4年	10月5日	E-3	釈○○西	○	男		×	
80	149	1825	文政6年	7月23日	D-2	桂芳童子		男		○	
81	102	1824	文政7年	4月27日	D-2	玉山智光童子	○	男		○	
82	110	1824	文政7年	8月17日	D-2	○月妙光信女	○	女		?	
83	151	1824	文政7年	7月16日	E-2	釈順道	○	男		○	
84	70	1825	文政8年	6月25日	E-1	釋惠燈	○	男		○	
85	101	1826	文政9年	6月15日	D-2	兜景童子				○	

川野遺跡墓標一覽表2

経緯度	式部番号	西暦	年号	月日	型式	戒名	俗名	性別	年齢	座位	備考
86	152	1826	文政9年	9月12日	D-2	幻室童子	○	男		○	
87	158	1826	文政9年	10月27日	E-2	心鏡惠明僧士	○	男		○	
88	216	1826	文政9年	6月7日	D-2	智無童子		男		×	
89	245	1826	文政9年	5月初1日	D-2	忠忍義紹僧士	○	男		×	
90	252	1828	文政11年	11月10日	D-2	○室夢清信○				×	
91	44	1829	文政12年	11月28日	D-2	行香童子	○	男		○	
92	110	1829	文政12年	12月朔日	D-2	圭芳智白童女	○	女		○	
93	153	1829	文政12年	12月5日	D-2	宝林惠榮?童子		男		○	
94	157	1829	文政12年	12月20日	D-2	知進童子	○	男		○	
95	154	1832	天保3年	11月26日	D-2	靈巖智印信女		女		○	
96	108	1833	天保4年	9月12日	D-2	秋忍露菊童子		男		○	
97	71	1834	天保5年	12月12日	D-2	西来禅意僧士	○	男	76		
98	144	1836	天保7年	1月15日	D-2	知香童女		女		○	
99	266	1837	天保8年	10月23日	D-2	楓山妙錦童女		女		×	
100	41	1839	天保10年	8月27日	D-2	祖確童子	○	男		○	
101	42	1839	天保7年	11月12日	D-2	洞岩惠忠僧仕	○	男	73	○	
102	248	1839	天保10年	8月初2日	D-2	海屋妙壽信女		女	75	×	
103	1	1840	天保11年	9月初8日	D-2	大方以心信女		女	73	○	
104	40	1840	天保11年	4月10日	D-2	(梵)宅玄叟童子	○	男		○	
105	229	1840	天保11年	4月15日	D-2	智音童女位	○	女		×	
106	14	1841	天保12年	1月初9日	D-2	○歸宗再僧士	○	男	87	○	
107	34	1841	天保12年	8月22日	D-2	冷照童子		男		○	
108	38	1841	天保12年	6月22日	D-2	妙室玄○信女	○	女	20	○	
109	88	1842	天保13年	6月25日	D-2	昌桂壽香信女		女	88	○	
110	145	1842	天保13年	11月21日	D-2	霜菜童女	○	女		○	
111	45	1843	天保14年	1月12日	D-2	法雲妙壽信女		女		○	
112	249	1843	天保14年	4月26日	D-2	大方成器僧士	○	男	49	×	
113	254	1843	天保14年	4月10日	D-2	圓水智鑑僧士	○	男	65	×	
114	217	1845	弘化2年	2月初4日	D-2	春雲智背信女		女	63	×	
115	213	1847	弘化4年	10月28日	D-2	烏羅禪定尼					
116	60	1848	嘉永元年	12月22日	D-2	靈巖妙白信女		女		○	
117	159	1848	嘉永元年	2月25日	D-2	謙閑宗透僧士	○	男	65	○	
118	75	1849	嘉永2年		D-2	○○妙枕童女		女		○	
119	100	1854	嘉永7年	2月21日	D-2	心誠無三禪定	○	男	63	○	
120	208	1854	嘉永7年	7月25日	D-2	桐林知秋信女		女	○6	×	
121	9	1855	安政2年	7月15日	D-2	秋桂業益童子		男	9	○	
122	15	1855	安政2年	7月○○○	G	秋月智淨信女		女		×	
123	203	1855	安政2年		D-2	心相明○童子	○	男		○	
124	256	1855	安政2年	8月19日	D-2	蓮月機先童子	○	男		×	
125	160	1857	安政4年	7月8日	D-2	秋水嬰兒		女		○	
126	50	1858	安政5年	6月1日	D-2	妙智童女		女		○	
127	33	1859	安政6年	8月21日	D-2	本空如然僧士	○	男	31	○	
128	53	1860	安政7年	2月8日	D-2	春(陽)童女	○	女	4		

川野遺跡墓標一覧表3

順号	実部号	西暦	年号	月日	型式	戒名	俗名	性別	年齢	原位置	備考
129	91	1861	文久元年	6月〇日	D-2	寂岸惠淨信士	〇	男		〇	
130	246	1864	元治元年	10月26日	D-2	妙因信女		女		〇	
131	99	1865	慶應元年	12月2日	D-2	心光妙三信女		女	68	〇	
132	97	1867	慶應3年	3月29日	D-2	蓮光智葉童子		男		〇	
133	163	1867	慶應3年	3月18日	D-2	香翁妙観信女		女		〇	
134	35	1868	慶應4年	4月5日	D-2	雲禪童子		男		〇	實際は明治
135	212	1869	明治2年	10月28日	D-2	楊宗全義信士	〇	男	76	×	2年
136	273	1869	明治2年	8月2日	D-2	藤(船)妙蓮信女		女		×	
137	43	1870	明治3年	10月22日	D-2	梅巖惠玉信女		女	67	〇	
138	219	1870	明治3年	6月21日	D-2	惠巖童子		男		×	
139	37	1872	明治5年	10月12日	D-2	梅陰自香童子		女		〇	
140	69	1872	明治5年	8月28日	D-2	善園妙慈信女		女		〇	
141	277	1873	明治6年	8月〇4日	D-2	桂巖妙秋信女		女	52	×	
142	22	1876	明治9年	4月20日	D-2	春岳宗壽信女		女		〇	
143	23	1877	明治10年	5月19日	D-2	松室妙壽信女		女		〇	
144	164	1877	明治10年	12月21日	D-2	青雲宗源信士	〇	男	27	〇	
145	94	1878	明治11年	4月2日	D-2	寒岩惠松信女	〇	女		〇	銘文有り
146	31	1879	明治12年	12月4日	D-2	實相了覺信士	〇	男	80	〇	
147	209	1879	明治12年	8月13日	D-2	蓮山惠心信士	〇	男	21	×	
148	278	1879	明治12年	4月8日	D-2	蘭室宗首信女	〇	女		×	
149	21	1880	明治13年	7月〇日	D-2	清林信士		男		〇	
150	48	1881	明治14年	4月11日	D-2	禪堂淨果信士	〇	男	84	〇	
151	61	1881	明治14年	3月15日	D-2	菊英童子	〇	女		〇	
152	210	1881	明治14年	9月8日	D-2	冬巖永雪信女	〇	男	62	×	
153	74	1882	明治15年	1月29日	D-2	春山清光信士	〇	男	58	〇	
154	90	1882	明治15年	1月10日	D-2	慈海宗源信士	〇	男		〇	
155	93	1886	明治19年	7月20日	D-2	慈雲道眼信士	〇	男		〇	
156	32	1887	明治20年	2月3日	D-2	雲峰木白信士	〇	男	61		
157	46	1887	明治20年	12月2日	D-2	(無)外清高信士	〇	男		〇	
158	89	1887	明治20年	9月17日	D-2	誠岩玄義信士		男		〇	正面右
159	46	1888	明治21年	5月25日	D-2	本覚常照信士	〇	男		〇	
160	274	1888	明治21年	9月初7日	D-2	真月妙光信女	〇	女	×		正面左
161	6	1891	明治24年	5月	D-2	心相想明信女		女		〇	
162	218	1891	明治24年	1月23日	D-2	雲觀童子	〇	男		×	
163	150	1892	明治25年	10月20日	D-2	寂室智光信女	〇	女		〇	
164	279	1892	明治25年	12月12日	D-2	春菴童子	〇	男		×	
165	200	1894	明治27年	1月29日	D-2	真相妙圓信女	〇	女		〇	
166	57	1896	明治29年	5月19日	D-2	相妙傳信女	〇	女		〇	
167	10	1898	明治31年	4月10日	D-2	春峰知性童子	〇	男		〇	
168	165			1月7日	A-1					〇	
169	166				A-1					〇	五輪塔
170	167				A-1					〇	五輪塔
171	239				A-1					〇	五輪塔

川野遺跡墓標一覧表4

第7章 久木小野遺跡（久木小野神社）

第1節 遺跡の概要

リアス式海岸を持ち広い沖積平野のない臼杵市では、阿蘇溶結凝灰岩に覆われた台地状の河岸段丘の上に、旧石器時代から現代に至るまで人々の生活の舞台となってきたことをうかがわせる多くの遺跡が見られる。中臼杵川沿いでも多くの台地が旧石器あるいは縄文時代などの周知遺跡となっており、久木小野集落の台地上も旧石器時代等の遺跡の包蔵地である久木小野遺跡として周知されている。そのうち、昭和48年に発掘調査の行われた東台遺跡では、旧石器時代および縄文時代早期・後期の遺物が出土している。また、今回の調査と同時期に発掘調査の行われた下の山の尾根上からも、旧石器時代・縄文時代早期・中世・近世の各時代の遺物が出土している。また久木小野地区には、集落の東側に「久木小野マンダラ石」と呼ばれる県指定文化財の線彫り板碑群がある。

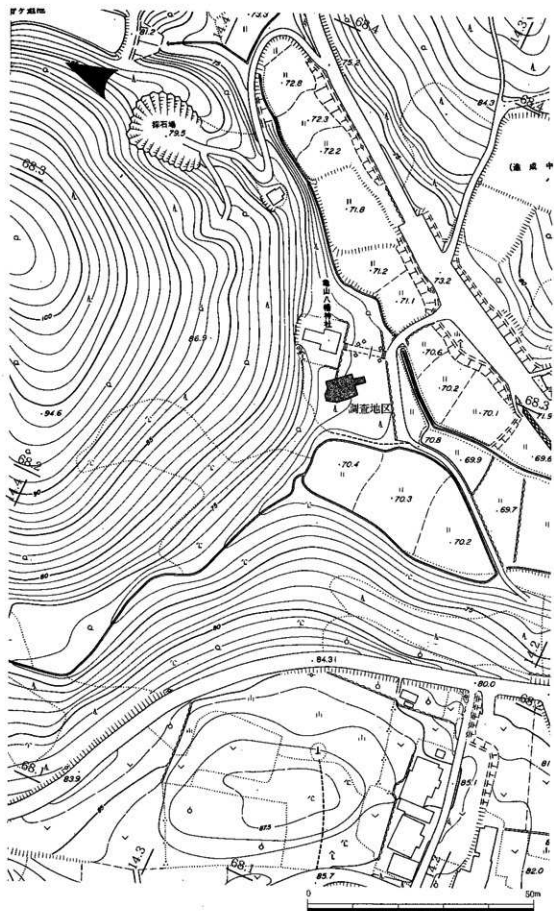
久木小野神社は、久木小野と末広川に面した落合の二つの集落の鎮守社となっており、龜山八幡社が正式な名称である。現在神主は福良天満社の神主が兼任しており、神社に関する資料も福良神社に保管されている。神社の創建年代は不明であるが、創建にまつわる次のような伝説が伝えられている。「丹生の莊の里人が、広内峠で榎の大木にとまっていた白鷺を射たところ、白い御幣になって龜山に舞い降りたので、これを祭って神社を建てた」というものである。現在の社地は山の上にあったものを移転したものだとも伝えられているが、その場所は不明である。地元では「ご神木を伐ると久木小野は倒れる」といわれているとのことだが、工事にかかる場所にあった何本かのご神木はお祓いをしたうえで伐採された。伐られたご神木は、年輪の数から古いものはおよそ230年、多くは80年前後であった。また、花崗岩製の鳥居には「延享3年丙寅歲（1746年）」とある。

当遺跡は東九州自動車道建設に伴って発掘調査が行われた。年度当初の計画では調査地には含まれていなかったが、境内から中世の土師質土器などが採集されたことから、隣接する大字古小野の川野遺跡の調査と合わせて発掘することになった。初め調査区の中央に2メートル×8メートルのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認したところ、縄文時代および中世の土器等が出土した。南側は近年になって攪乱されていたため、山の斜面に近い北側の8メートル×11メートル程の部分を人力で掘り下げた。その結果縄文時代前期から中世の遺物が、表上下の柔らかい黄褐色の土層中から出土した。遺物を包含した層は1層でその下は岩盤であった。調査区北西の一角のみ表土の上層が異なっており、この堅く締った灰褐色の土層からは銅銭数枚とチャートの剥片1点のみが出土した。

第2節 遺構と遺物

縄文前期土器（第83図）

縄文前期と見られる土器は1から17で、いずれも壱式の深鉢型土器である。1は口縁部で4条の間隔のやや広いみずばれ状の突帯をもち、口縁部は内側に鉤状に屈曲する。内外面ともに二枚貝条痕を施し、やや荒いナデが施されている。2も2本の隆起帯を広い間隔で張り付けているが、稜線が鋭い。調整は内外面ともに二枚貝による調整のちナデを施すが、内面のナデが荒く条痕が明瞭に残る。3も貝条痕の上に3本の粘上ひもを間隔をあげて張り付ける。稜線は鋭さを欠き、やや荒いナデ仕上げであることなど、1とよく似た特徴を持ち、同一個体の可能性がある。4も2本の隆起帯を間隔をあげて施す。1本は剥落して不明だが、もう1本はやや高く高い隆起帯で丁寧な作りである。外面のナデは丁寧であるが、内面は深い貝条痕が残っている。5は2本の隆起帯



第79圖 久木小野遺跡周辺地形圖

を間隔をあげずに張り付ける。後縁は鋭く外面のナデは丁寧だが、内面は深い条痕が残る。6は丸みを帯びたカマボコ状を呈する2本の隆起帯を狭い間隔で張り付ける。外面のナデは丁寧だが、内面は深い条痕が残る。7は高く太い3本の突帯を間隔をあげずに張りつける。後縁は鋭く丁寧なつくりである。外面はやや丁寧なナデを施すが、内面は剥離のため不明である。8は細く後縁の鋭い隆起帯を1本持ち、外面には丁寧なナデが施されている。内面には深い貝殻条痕が残る。9～17はいずれも胴部の破片で内外面ともに条痕が残る。16は胴部の屈曲部とみられる。

縄文中期土器 (第83図)

18と19は縦の捺糸文が施されており、縄文中期に位置づけられる。19は頸部とみられる。

縄文後期土器 (第84図、第85図)

第84図はいずれも三万田式とみられる土器の口縁部である。このうち20は深鉢型土器の緩い波状口縁の波頂部付近とみられ、口縁がやや内側に内傾する。波頂部の下に隆起を作り、さらに凹線文を施している。21～25は浅鉢型土器の口縁部で、21は口縁が内側に屈曲し、3本の凹線を施したものである。復元口径22.3cmを測る。22も同様の器形で、4本の沈線と細線による文様をもつ。復元口径は22.2cmである。23～25もそれぞれ2～3本の凹線または沈線と、細線を施された口縁部である。いずれも大きく内傾するが、25は特にそれが著しい。26～39はいずれも深鉢型土器の口縁部である。26と27は口縁端部が内側に屈曲し、屈曲部の内側に沈線を施す。28、29は口縁部の外側が肥厚したものである。縁を斜めにし、内側の角を鋭角にしている。31と34は縁の角度が緩やかになったもので、32は波状口縁で同様の断面を持つものである。33は縁の傾斜がほとんどみられない。35は口縁端部の厚みが少し薄くなったもので、内側に沈線を持つ。36～39は沈線をもたない口縁部である。このうち、37、38は外側に向かって縁が傾斜するが、39は内側に向かって傾斜をつけ、縁が水平になるようにしたものである。

第85図は頸部、胴部および底部である。40～42は精製浅鉢の頸部から胴部である。40は胴部に稜をもって屈曲し、くびれた頸部から口縁部が開く。頸部のくびれと胴部の屈曲部の間に3本の凹線文を施している。41は胴部のもっとも張り出した屈曲部に細線文、その上に3本の沈線を施したものである。42は2本の凹線とその上に細線文をもつ。43～46は粗製深鉢の胴部である。47～51は底部である。47と48は底が平坦なもの、51は上げ底状を呈し底がやや薄くなったものである。

石器 (第87図)

石器はスクレイパー・石鏃・擦石などが出土した。図示したもの以外に黒曜石やチャートの剥片が多数出土している。

石鏃 1～6は石鏃である。1は姫島産黒曜石製の石鏃で、やや深い抉入がある。2はサスカイト製で、浅い抉入がある。3は脚の部分とみられる。材質は黒っぽい黒曜石であるが、これも姫島産かと思われる。4はチャート製の石鏃の脚部である。5はやや荒い作りの石鏃で材質はサスカイトとみられる。6は大変複雑な作りの石鏃で特に裏面はわずかに調整がみられるだけである。石鏃でないか、あるいは未製品の可能性もある。石材は珪質岩か。

半月型石器 7は半月型石器で、石材は姫島産黒曜石である。

スクレイパー 8はチャート製のスクレイパーと見られる石器である。

擦石・敲打石 9は敲打石、10・11は擦石である。

中世遺物 (第86図)

土師質土器 1～4は土師質土器で、いずれも底部は糸切りである。1は復元口径が12.6cm、底径7.8cm、器高は3.6cmを測る。立ち上がりかやや緩やかである。2は1とほぼ同じ口径、

器高であるが底径が9.0cmと大きく、立ち上がりがやや急である。3は1と同様の立ち上がりである。4は1、2と同じ高さで、立ち上がりは2に近いが口径がやや小さく口縁に向かって開ききみである。

小皿 5～12は底部糸切りの土師質土器皿である。5は復元口径10.6cm、器高が1.3cmを測る。立ち上がりがやや緩やかで、内側に緩くカーブする。6も同様の器形とみられる。7は復元口径が7.0cmと小ぶりで緩やかなS字状のカーブを描いて立ち上がる。8は立ち上がりが急で器高が2.2cmとなる。9～11は復元口径が9.2～9.9cm、器高1.3～1.6cmのもので、いずれも立ち上がりがシャープである。器壁が口縁部に向かって薄くなり、断面の形状が三角形になっている。12は立ち上がりの角が丸くなったもので、器壁がやや厚い。このほか図示できなかった小皿や坏の破片が多数出土している。

土鍋 13、14は土鍋の口縁部である。13は口縁部が内側にすぼまり、そこから口縁端部が外に開く形状のものである。復元口径22.0を測る。14は体部が外側に開き、そこからさらに口縁部が外に向かって少し折れる。

青磁碗 15は青磁碗の底部である。

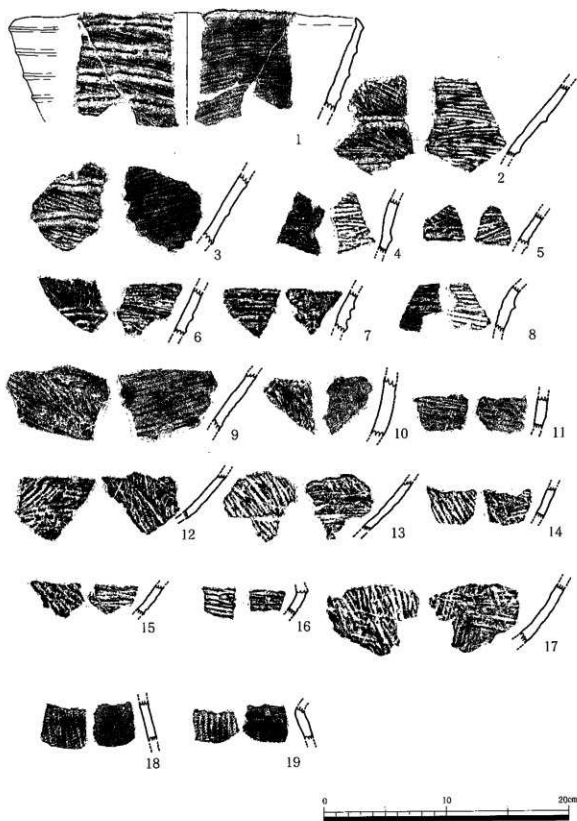
天目茶碗 16は天目茶碗の体部である。

第3節 小結

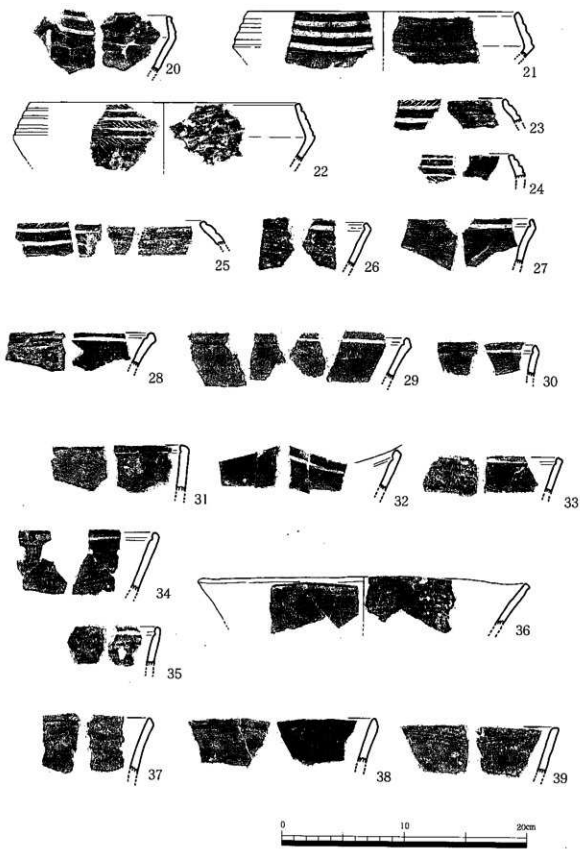
裏山の斜面に近い部分の上層とそれ以外の部分とで土層が全く異なっていた。これは現在の神社が建てられた際に敷地及び境内の整地が行われ、その際に別の場所から土を持ち込んだためである可能性が高い。その際に受けた擾乱で縄文時代の遺物と中世の遺物が同じ土層から見つかることになったと思われる。ただし神社を囲む石垣を見ると本殿部分の石垣と全体を囲む石垣とで違いが見られ、さらに全体を囲む石垣にも南側と北側とで違いがあり、神社が現在の位置に建てられた後も何度か改修あるいは拡張が行われたことがうかがえる。今回の調査対象が境内南側の一角のみであるため、土の持ち込みが神社創建当初のことなのかどうかは分からないが、この土に根を下ろしたご神木の樹齢が230年前後であることや、花崗岩製の鳥居に「延享3年」(1746)とあることから、18世紀の中頃には現在に近い姿に整備されていたものと考えられる。

神社の裏山の斜面には近世あるいは近代のものと思われる畑の石垣があり、その上に溜め井や、何らかの施設があったとみられる石垣のあとがみられた。さらに調査区外には五輪塔などの石材が散乱しており、石垣の一部にも五輪塔の一部が再利用されていた。今回の調査と同時期に神社の移転工事が行われ、それに伴って臼杵市が行った神社裏手の斜面の発掘調査でも五輪塔の一部が見つかっている。これらのことから、神社の裏山が中世には墓地として利用されていたと考えられる。今回の調査で銅銭の出土した位置も墓域であったことが考えられ、30cm程の範囲でまとまって出土した渡来銭は土壌墓内に埋納されたものである可能性もある。

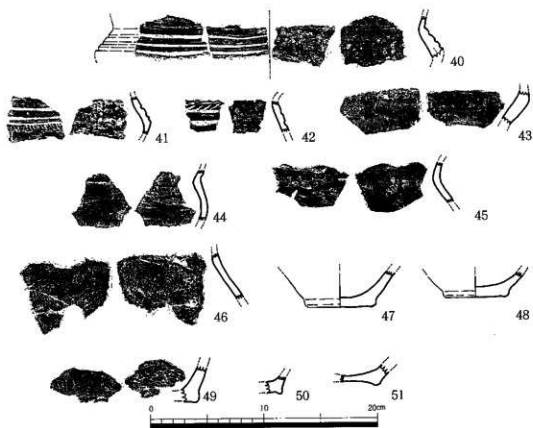
これらのことから、この神社の境内周辺は中世には墓地として利用され、近世になってから神社が建てられたと考えられる。かつては裏山にあったという神社が後に現在地に移された際に、敷地の造成のために縄文および中世の遺物を包含する土が持ち込まれたものであろう。



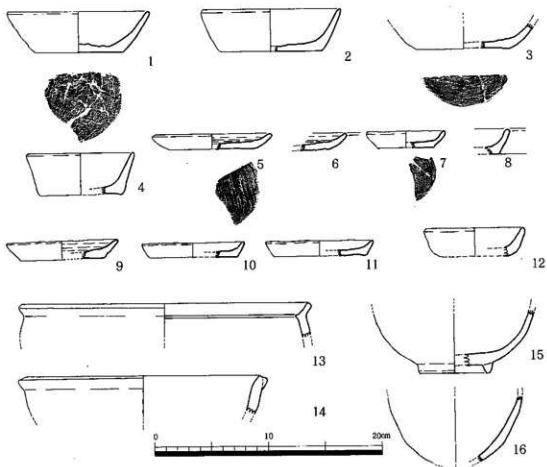
第80圖 久木小野遺跡出土縄文土器(1)



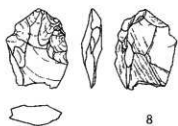
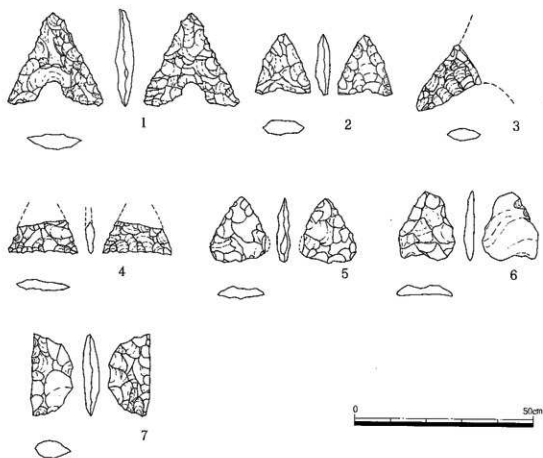
第81圖 久木小野遺跡出土縄文土器 (2)



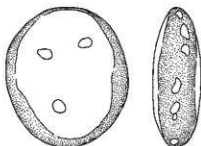
第82図 久木小野遺跡出土縄文土器 (3)



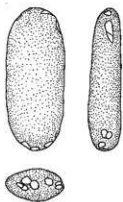
第83図 久木小野遺跡出土中世土器



8



10



9



11



第84図 久木小野遺跡出土石器

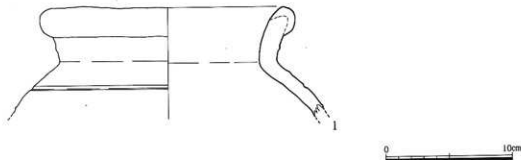
第8章 平岩遺跡

遺跡は津久見市大字上青江に所在する。津久見市西部の臼杵市との市境に近い標高約50mの丘陵部に位置する。

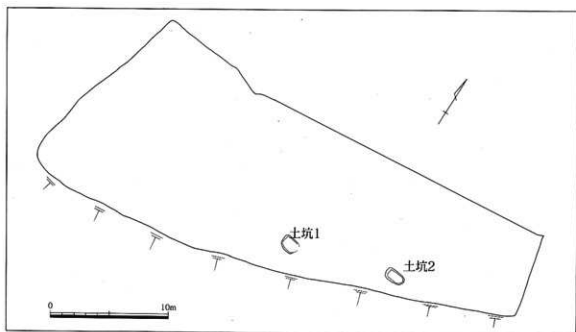
調査は東向き斜面の15,000㎡を対象として、全域にトレンチを設定して遺構の存否確認を行う方法で実施した。この結果、斜面中腹に土坑2基を確認した。土坑1はほぼ長方形を呈し、東西方向に長く、北81度西を指向する。東辺を現在の溝で切られ欠いており、東西方向の現存長1.3m、南北1.2mである。底面は平坦をなし、確認面からの深さ0.18mである。土坑内から備前焼が出土している。土坑2は短辺がやや丸い長方形を呈す。東西方向に長く、北91度西を指向する。東西方向の長さ1.8m、西辺1.15m、東辺0.9mと西辺がやや広がっている。床面は平坦であり、確認面からの深さ0.3mとなっている。土坑内から径20cm程度の石や土師質・瓦質土器など破片が出土している。出土遺物のうち、1は土坑1から出土した備前焼の壺である。口縁部から胴上半部が残る。口縁部は短く端部で肥厚する。復元口径18.4cmである。ロクロによる整形である。胎土に砂粒が多く含まれ長石・石英がみられる。焼成は良好で堅緻、色調は灰褐色を呈す。



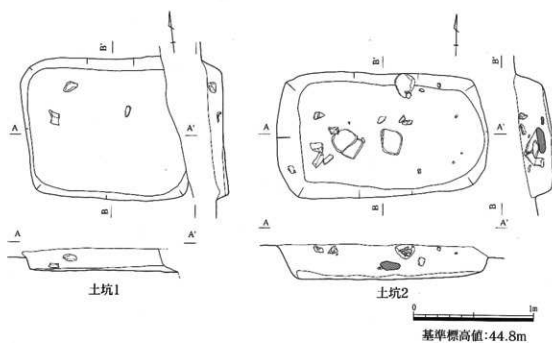
第85図 平岩遺跡周辺地形図



第86図 平岩遺跡出土遺物実測図



第87圖 遺構分布圖



第88圖 土坑實測圖

第9章 大野川下流域における水田開発の動向

—大分市清水遺跡の埋没水田の検討を通じて—

愛媛大学法文学部 田崎 博之

はじめに

大分県一の河川である大野川は、全長128.4kmにもおよぶ。その下流域に区分される大分市戸次地区から下流では、東西を鶴崎台地と丹生台地に挟まれた幅2~3kmほどの細長い沖積低地が形成されている。また、大津留地区で、大野川は乙津川と分流する。沖積低地の東側を流れる大野川には支流がほとんど見られないのに対して、西側を流れる乙津川には鶴崎台地から中尾川・狭間川・清水川・北鼻川などの小河川が合流し、鶴崎台地に深く狭隘な開析谷を発達させている。

1994年の発掘調査で埋没水田遺構が発見された清水遺跡は、乙津川西岸の狭間川が乙津川と大野川が造る沖積低地に流れ込む地点に立地する。本稿では、遺跡周辺の微地形を検討するとともに、発掘調査で得られた堆積土層データから埋没微細地形を復元し、その変遷過程で営まれた埋没水田の性格や構造、変遷を検討し、大野川下流域における水田経営の様態を考える。

1 周辺の微地形と遺跡分布

大分地域に分布する第三系および第四系の地質については、最近、吉岡敏和ほか、これまでの研究を整理している(吉岡ほか,1997)。それによると、大野川下流域では、鶴崎台地と丹生台地の本体は、中位段丘・高位段丘堆積物、大在層、滝尾層、片島層、東植田層、伴田層で構成され、北鼻川が沖積低地に流れ出る周辺に低位段丘堆積物が部分的に分布する。沖積層では、鶴崎台地や丹生台地の開析谷には谷床堆積物、大野川・乙津川の周囲には旧河道埋積堆積物や自然堤防堆積物が見られ、その間を谷床および背背湿地堆積物が埋めている。海岸部には東西方向にのびる浜堤堆積物が分布する(図1)。

その中でも、清水遺跡周辺における低位段丘および沖積層からなる地形面では、1961(昭和36)年に国土地理院によって撮影された航空写真の実体視と現地踏査によって、以下の①~⑤の微地形面を読み取ることができる(写真1、図2)。

- ①：北鼻川の両岸で西から東へ向かってのびる低位段丘面。
- ②：中位段丘・片島層から構成される鶴崎台地を中尾川・狭間川・清水川・北鼻川が開析する狭隘な谷底面。
- ③：鶴崎台地の裾部から東へ向かってのびる沖積面Ⅰ。
- ④：③および①よりも1m前後低い中尾川・狭間川・清水川・北鼻川が乙津川に合流する付近に見られる沖積面Ⅱ。
- ⑤：乙津川と合流する北鼻川西岸の自然堤防面。

この中で、①の低位段丘面は、浸食性の段丘面で、北鼻川の両岸に限って分布し、その裾部に展開する③の沖積面Ⅰとの比高差はかなり小さい。③の沖積面Ⅰは、砂礫や玉石を主体とする砂礫層といった大野川および中尾川・狭間川・清水川・北鼻川が運んできた河床堆積物から構成される。最上部は、砂礫混じりの黄褐色~黄橙色土層や、直径20~40cmの玉石や大小の礫が混じる黒茶褐色~黒褐色の砂礫層や粘質土層が覆う。中尾川北岸の沖積面Ⅰ縁辺に営まれた横尾貝塚や横尾遺跡第82次調査では、その中位で鬼界アカホヤ火山灰層(K-Ah;約6300年前に噴出)を挟むことが確認され、沖積面Ⅰ上面に開析された浅谷が縄文時代後期に埋積することが確認されている(賀川光夫ほか,1967、高橋,1982、大分市教育委員会,2001a)。

また、清水川と北鼻川の間の比較的広い範囲に見られる沖積面Ⅰ上には、谷状の窪地が南西から

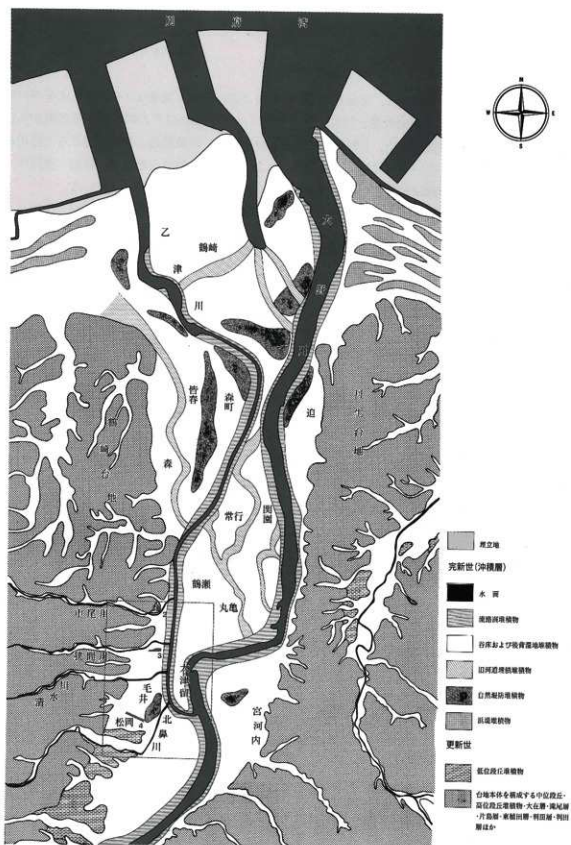


図1 大野川下流域の低位段丘～沖積層の分布 (縮尺 1/50000)
 1: 横尾遺跡82次調査地点、2: 横尾貝塚、3: 清水遺跡、4: 毛井遺跡A地区
 (吉岡ほか,1997から作成。清水遺跡周辺を囲む枠内は、図2および写真1の範囲)

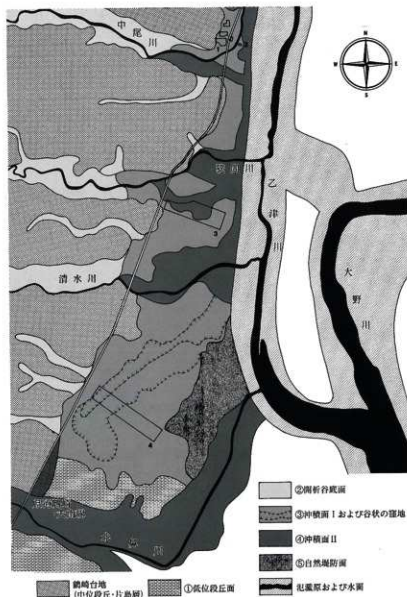


図2 清水遺跡周辺の微地形 (約1/10000)
 1: 横尾遺跡82次調査地点、2: 横尾貝塚、3: 清水遺跡、
 4: 毛井遺跡A地区

北東に向かっのびる。この谷状の窪地を横断するように調査された毛井遺跡A地区では、調査区西半部で検出された谷状の窪地に沿って中世～近世の溝が発見されている。それより0.5m前後高く自然堤防面に近い東半部では、古墳時代中期の竪穴式住居跡と土壘が営まれていた。沖積面Ⅰの最上部を構成する黄褐色土層の直上からは縄文時代晩期の頁岩製の局部磨製石斧が出土し、調査区内で黒色磨研の浅鉢が採集されており、谷状の窪地が、この頃までに現在の深さまで埋没したことが考えられる(後藤, 2001)。

④の沖積面Ⅱは、砂礫や砂、シルト質土から構成されている。中尾川・狭間川・清水川・北鼻川が造る旧河道面で、沖積面Ⅰとの関係から縄文時代後期以降に形成されるものと考えられる。②の開析谷底面と比べて、地形傾斜がやや緩やかな地形面である。

以上の微地形面の分布の中で、清水遺跡の調査区は、狭間川南岸の沖積面Ⅰと沖積面Ⅱの境界部に位置する。調査区南半部の沖積面Ⅰでは、弥生時代後期の円形竪穴式住居跡・小児用土器棺墓、古墳時代後期の方

形竪穴式住居跡、奈良時代後期の掘立柱建物、平安時代前期の土師器集積遺構が営まれていた。調査区北半部には沖積面Ⅱが湾入し、奈良時代以降の水田遺構が発見されている(付図1)。

2 埋没微細地形の変遷過程と水田遺構

清水遺跡における今回の発掘調査では、調査区西部のH・I・V・VI区と、東北部のP・Q・II・III区の2ヶ所で水田遺構が発見された。本報告第4章での報文と対応させて、西側の水田を西部水田域、東北部の水田を東部水田域と呼ぶこととする。

また、発掘調査の最終段階では、水田遺構の立地環境を検討するために、調査区のG・H区、K区、O・P区に南北方向の第1・6トレンチ、第3トレンチ、第2トレンチ、III・IV区に東西方向の第7・4・5トレンチが設定され、堆積土層データを記録するとともに、第1・2トレンチのそれぞれ2ヶ所で、土壌をサンプリングし、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析が実施されている(図3)。さらに、微細地形の分析を行うため、第1・6トレンチと第2トレンチに沿って南北方向、第7・4・5トレンチに沿って東西方向で、前述の土層図を挿入した地形断面図を作成した(付図1)。これらを参照しながら、埋没微細地形を復元し、その変遷過程の中でどのような時点で水田が拓かれるかを

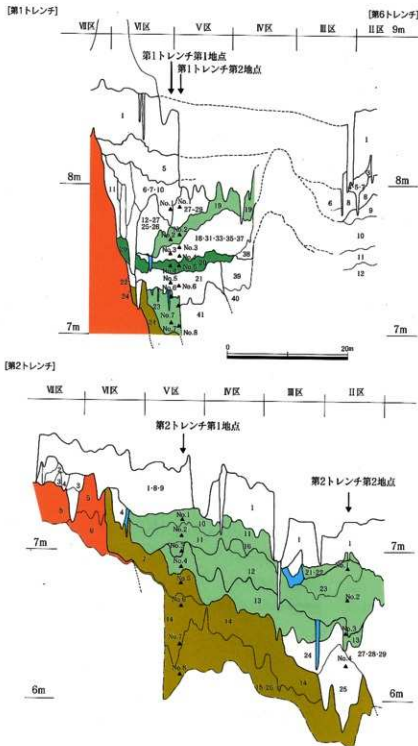


図3 清水遺跡の土層断面図(縮尺 水平方向:1/500、垂直方向:1/20。
▲は花粉・珪藻・植物珪酸体分析試料採取地点および採取試料No.)

考える。

〔西部水田域〕

西部水田域では南北に第1トレンチ、その北側に第6トレンチが設定され、堆積土層が観察されている(図3-上段)。水田遺構が確認された第1トレンチの堆積土層を基準として、埋没微細地形の変遷をトレースしてみよう。

まず、第1トレンチ南端のⅦ～Ⅵ区にかけては、沖積面Ⅰを構成する直径20～40cmの玉石や大小の礫が混じる黒茶褐色土層が北に向かって急激に落ち込む。その上層には、沖積面Ⅰから流れ込んだ24層(礫や砂が多く混じる黒灰色粘質土層)が堆積する。また、沖積面Ⅰの落ち際には、22層(小礫が若干混じる灰褐色細砂層)が分布し、22層最下面ないしは24層との層界から8世紀後半代の須恵器の甕小片が出土した。

これらの堆積土層の上層には、23層(砂混じりの暗灰色粘質土)が堆積する。流水がある沼沢地の環境で堆積したものと考えられる。上面を覆う21層(青灰色砂層)との層界で溝の断面、その両側で畦畔の高まりも確認でき、平面的にも溝(溝-1・2・3)や畦畔を検出できた。植物珪酸体分析(第1トレンチ第1地点試料No.6、第2地点試料No.7)でイネ属の機動細胞珪酸体が多産することからも、水田遺構と判断される。西部水田Ⅱである。

さて、西部水田Ⅱが営まれた23層は、第1トレンチ中央部のⅤ・Ⅵ区の境界付近で途切れ、41層(暗灰色粘質土層)に変わる。西部水田Ⅱに伴う溝-1の埋土中位～上位は礫混じりの黒灰色粘質土で埋積され、西部水田Ⅱが北側を狭間川によって削り取られ廃絶し、沼沢地化することで41層が堆積すると考えられる。その後、21層(青灰色砂層)、さらにそれを削って40層(砂混じりの暗灰色粘質土層、第6トレンチ12層と対応)、39層(暗黒色砂質土)が堆積する。40層は北側に向かって高くなっており、調査区南半部の低位段丘沿いに、狭間川氾濫状態の幅25m前後、深さ50～60cmの浅い谷状の窪地が形成されていることがわかる。

その谷状の窪地は、

〔沼沢～湿地環境で堆積したと考えられる20層(黒灰色粘質土層)〕

↓
〔38層(黒灰色砂質土層)、および18層(暗灰色細砂層)・31層(粗砂が若干混じる灰褐色砂層)・33層(暗灰色細砂層)・35層(赤茶褐色粗砂層)・37層(暗灰色粗砂層)の砂層や砂質土層〕

↓
〔湿地環境で堆積する19層(砂混じりの黒灰色粘質土層)〕

↓
〔11層(小礫・粗砂が若干混じる黄灰色砂質土層)・12層(灰色粗砂層)・13層(灰褐色粗砂層)・14層(黄灰色砂質土層)・15層(灰色砂層)・16層(暗灰色砂質土層)・17層(粗砂を含む暗灰色砂質土層)・25層(黄灰色粗砂層)・26層(灰褐色粘質土層)・27層(茶褐色粗砂層)・28層(黄灰色砂質土層)・29層(暗灰色砂層)の砂層や砂質土層を主体とする土層群〕

↓
〔段丘沿いに狭間川から分岐したと考えられる小さな自然流路を含む6層(明灰色砂質土層)・7層(粗砂を含む灰褐色砂質土層)・10層(黄灰色粗砂層)の砂層や砂質土層の土層群〕

↓
〔5層(粗砂・小礫が若干混じる灰褐色粘質土層)〕

のように、砂層や砂質土層、粘質土層が互層状態で堆積し、氾濫性の砂層の堆積と沼沢～湿地化が繰り返され、次第に埋積していく過程を復元できる。

そうした繰り返しのなかで、湿地環境で堆積した19層(砂混じりの黒灰色粘質土層)は、植物珪酸体分析(第1トレンチ第1地点試料No.2、第2地点試料No.2)によって水田層であることが指摘されている。西部水田Ⅰである。水田域の最も低い場所にあたるⅥ区中央部北よりで、西部水田Ⅰに伴うと考えられる暗灰色細砂で埋まる溝(第1トレンチ18層)を断面で確認できた。

【東部水田域】

東部水田域では調査区を南北に横断する第2トレンチが設定されている（図3-下段）。トレンチ南側のⅥ・Ⅶ区では、沖積面Ⅰを構成する5層（黄褐色土層）や6層（明灰色砂質土層）がⅥ区南側付近で急激に落ち、Ⅴ区とⅣ区の境界付近でさらに落ち込む。トレンチ中央～北半部のⅡ～Ⅴ区では、トレンチ下面で14層（小礫混じりの黒茶褐色土層）や15層（大礫や砂が混じる暗灰色粘質土層）・26層（大礫が多量に混じる暗黄褐色土層）、7層（黒茶褐色土層）が見られる。これらは、沖積面Ⅰを構成する砂礫層が流れ込んで再堆積した土層群で、狭間川が造った旧河道底に堆積した土層群である。なお、15・26層が北側へ向かって高くなり、加えて現地形の航空写真の判別や地形断面から、この旧河道の幅はⅤ・Ⅵ区から第2トレンチ北側の道路までの50mほどと考えられる。

この旧河道の中は、

【最も低い第2トレンチ北半部のⅡ・Ⅲ区に堆積する25層（黒茶褐色土層）】



【沖積面Ⅰ沿いに堆積する24層（礫・粗砂が混じる茶黒褐色土層）】



【有機物を多く含む河畔堆積物である27～29層（黒色泥土層）】



【13層（小礫が混じる暗黄褐色粘質土層）や、12層（灰色砂が混じる暗黄褐色粘質土層）・23層（粗砂混じりの灰褐色粘質土層）】



【21層（灰色粘質土層）、22層（黄灰色粘質土）】



【10層（暗灰色粘質土層）、11層（暗灰色粘質土層）】

が堆積していく。珪藻分析では、13層（第2トレンチ第2地点試料No.3）と12・23層（第2トレンチ第2地点試料No.2）は、流水不定性や止水性種珪藻化石が産するので、水の流れ込みがある沼沢～湿地環境で堆積したものとされる。11層（第2トレンチ第1地点試料No.2）は、水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂する沼沢地やさらに水深が浅い湿地に優先的に見られる沼沢湿地付着群の珪藻化石がみられ、同じく沼沢～湿地環境下での堆積土層である。河道内の河畔に泥土が溜まり、その後湿地化していき、沼沢地の環境に変化するとともに、次第に平坦な地形面が形成されていく過程を復元できる。また、各層ともに耐乾性の強い陸生珪藻が産出しており、沼沢～湿地が時々水が干上がり、好気的な環境に変化したことが指摘されている。

さて、13層と12・23層では、植物珪酸体分析でイネの機動細胞珪酸体が多産することから水田層であることが報告されている。粘質土層やシルト質粘土層が重なって堆積しており、平面的には水田遺構を検出できていないが、Ⅱ・Ⅲ区境界部では水路と考えられる溝の断面が13層と12・23層の層界で確認された。そこで、下層の13層を東部水田Ⅲ、上層の12・23層を東部水田Ⅱと呼ぶでおく。

一方、第2トレンチ北半部のⅡ・Ⅲ区では、21層（灰色粘質土層）上面で疑似畦畔を検出できた。疑似畦畔の切り合い状況からは少なくとも3時期の水田が想定できる。21層の直上には、現代の水田層である1層がのり、耕土層は削平されたものと考えられる。しかし、第2トレンチ中央付近のⅣ・Ⅴ区で見られる10層（暗灰色粘質土層、第2トレンチ第1地点試料No.1）と11層（暗灰色粘質土層、第2トレンチ第1地点試料No.2）では、イネの機動細胞珪酸体が多産し、レベル的には10層と11層は21層の上面に相当するので、21層上面で検出された疑似畦畔は、10・11層の水田に伴う畦畔が転写されたものと考えられる。東部水田Ⅰとする。

3 西部水田と東部水田の時間的關係

清水遺跡では、沖積面Ⅱで、西部水田Ⅰ（第1トレンチ19層）、西部水田Ⅱ（第1トレンチ23層）、そして東部水田Ⅰ（第2トレンチ10・11・21層）、東部水田Ⅱ（第2トレンチ12・23層）、東部水田Ⅲ（第2トレンチ13層）が営まれていた。

西部水田Ⅱでは水田面を検出でき、水田層より下位に堆積した22・24層から出土した遺物などによって、8世紀後半の水田遺構と考えられる。その下層に堆積する第1トレンチ24層（礫や砂が多く混じる黒灰色粘質土層）、第3トレンチ南端の14層（砂混じりの黒灰色粘質土層）、第5トレンチ5層（硬質の黄灰色粘質土層）、第2トレンチ14層（小礫混じりの黒茶褐色土層）や15層（大礫や砂が混じる暗灰色粘質土層）・26層（大礫が多量に混じる暗黄褐色土層）、7層（黒茶褐色土層）は、沖積面Ⅰから流れ込んだ玉石や礫が多く混じる土層群で、第5トレンチと第2トレンチの間で、東側に向かって0.5～1mほど急激に落ち込む（付図1）。その落ち込みの最下底面に堆積する第2トレンチ24層（礫・粗砂が混じる茶黒褐色土層）や25層（黒茶褐色土層）は、第5トレンチ4層（粗砂混じりの暗黄灰色粘質土層）と対応し、第3トレンチ南端の2層（砂混じりの黒灰色粘質土層）、第4トレンチの10層（粗砂が混じる黒灰色粘質土層）が堆積する。第4トレンチの5層（黒灰色砂質土層）と第1トレンチ38層（黒灰色砂質土層）と一連の土層群であり、西部水田Ⅱを覆っている。こうした層序関係から、少なくとも東部水田域で最も古い東部水田Ⅲは、西部水田Ⅱよりも後出するものと整理できる。

また、第1トレンチでは、西部水田Ⅰが廃絶した後、段丘沿いに狭間川から分岐したと考えられる小さな自然流路を含む6層（明灰色砂質土層）・7層（粗砂を含む灰褐色砂質土層）・10層（黄灰色粗砂層）や5層（粗砂・小礫が若干混じる灰褐色粘質土層）の砂や砂質土を主とする土層群が旺盛に堆積する。第5トレンチでも、7層（粗砂混じりの暗灰色砂質土層）や8層（暗灰色砂層）と、同様の土層群が見られる。西部水田Ⅰの廃絶後も、狭間川による堆積が依然として繰り返され、沖積面Ⅰに沿ってほぼ平坦な地形面が形成されていったと考えられる。

これに対して、東部水田域は、西部水田域よりも1m前後低く、同じ沖積面Ⅱでも最も新しい狭間川の旧河道内にあり、西部水田域付近の埋積が終息した後に、新たに開析された地形面である。こうした埋没微地形の形成過程から考えても、東部水田域の各水田は西部水田Ⅰが埋没した後に営まれたことになる。

一方、東部水田Ⅰでは、少なくとも3時期にわたる疑似畦畔が検出されているが、10層からは古墳時代～古代の土器細片が若干出土している。しかし、Ⅵ区北半部で18世紀代の溝が第2トレンチ10・11層（東部水田Ⅰ）に接するように検出され、これが東部水田Ⅰに伴う水路と考えると、東部水田Ⅰの疑似畦畔を検出時に出土した18世紀後半～19世紀前半の陶器製杯とあわせ、東部水田Ⅰが拓かれた時期を18世紀後半代に求めることができよう。

以上、西部水田Ⅱ（8世紀後半）→西部水田Ⅰ→東部水田Ⅲ→東部水田Ⅱ→東部水田Ⅰ（18世紀後半）の水田の変遷過程を整理できる。

4 水田と性格と構造

清水遺跡では、狭間川が造る旧河道面である沖積面Ⅱで、8世紀中頃～18世紀後半に水田が営まれている。西部水田域では、狭間川の旧河道内で氾濫性の砂層の堆積と沼沢～湿地化が繰り返されている。西部水田Ⅱが営まれた第1トレンチ23層は、流水がある沼沢地の環境で堆積したものであるが、植物珪酸体分析ではタケ亜科の機動細胞珪酸体が多く見られるのに対してヨシ属は少ない。西部水田Ⅰも同様である。沼沢～湿地の状態では堆積した土層が自然排水が急速に好転することでやや乾燥した環境になった時点で水田が拓かれたと考えられる。地下水水位が比較的高い環境に立地す

るという水条件からみると、ともに湿田タイプに属する。

また、東部水田域では、沼沢～湿地の環境下で小礫や砂が混じるシルト質粘土層や粘質土層が重層して堆積するが、珪藻分析では陸生の珪藻が検出され、一時的に干上がった環境にあったことが指摘されている。西部水田域と同じく、自然排水の好転してやや乾燥した状態になった時点で湿田タイプの水田が拓かれたと考えられる。

さて、西部水田Ⅱは、沖積面Ⅱが沖積面Ⅰに沿って湾入する東西13m、南北18mの範囲で確認されている。東西方向に細長い長方形に区画され、7区画を検出できている。いずれも1区画の面積が極端に狭い小区画水田である。伴う3条の溝の中で、沖積面Ⅰから沖積面Ⅱの変換点近くに掘られた溝1は、幅0.5m～0.7mを測り、溝底に薄い砂層が堆積し、その上に礫混じりの黒灰色粘質土が堆積し、頻りに流水があったことがわかる。給水用の水路である。これに対して、田面間に配された溝2・3は、幅0.2m～0.3mを測り、溝底から水田耕作土と共通する弱い砂性の暗灰色粘質土で埋まる。頻りに流水があったのではなく、水が停滞しがちな状態が続いたと推定される。給水を目的として掘られた沖積面Ⅰの落ち際の溝1に対して、水田間に配された溝2・3は余分な用水を排水するためのものであり、西部水田Ⅱには性格が異なる水路が伴うことになる。面的に検出されていないが、西部水田Ⅰでも、沖積面Ⅰに沿って幅25m前後の浅い谷状の窪地が形成され、最も低い場所で暗灰色細砂で埋まる溝（第1トレンチ18層）の断面が確認されている。

東部水田域は、西部水田域と比べて1mほど低く、沖積面Ⅱの中でもより新しい狭間川の旧河道である幅50mほどの谷状の窪地が埋積されていく過程で拓かれた水田である。東部水田Ⅲ（第2トレンチ13層）では、面的に検出されていないが、水田が営まれた谷状の窪地の相対的に低い場所で、水路と考えられる溝の断面を確認できた。また、東部水田Ⅰ（第2トレンチ10・11・21・22層）では、東西15m、南北19mの範囲で少なくとも3時期にわたる疑似畦畔が検出できた。最古段階は南から北に広がる0.5m×1.1m～1m×3.5mの長方形あるいは台形を呈する区画、次の段階には中央部の東西5m、南北3mの範囲に確認され、最も新しい疑似畦畔は前段階と同じく中央部で1m×2.5m程度の方形の区画が想定されている。さらに、東部水田域の北部でも、この3期の畦畔とは異なる区画が見られる。いずれも1区画が極端に狭い小区画水田である。これらに伴う水路と考えられる溝は、沖積面Ⅱが湾入するラインに沿って掘られ、東に向かって伸びさらに北へ反転するように流れる。埋土は、砂礫混じりの灰白色粘質土で、東部水田Ⅰの耕土と近似する。また、沖積面Ⅰの落ち際近くでも、東部水田Ⅰに伴う水路と考えられる溝の断面が確認されている。暗灰色砂で埋まっており、給水を主たる目的に掘られた水路である。

このように、今回発見された水田遺構は、いずれも極端に狭い小区画の湿田タイプの水田で、沼沢～湿地の環境が自然排水の好転によってやや乾燥した状態になった時点で拓かれている。とくに、西部水田Ⅱと東部水田Ⅰでは、用水管理が容易な給水と排水を分離した水路を確認でき、継続的な水田経営を想定できる。

5 大野川流域における奈良時代以降の水田開発

これまで述べてきた清水遺跡の水田遺構の調査成果を踏まえて、周辺の発掘データ、微地形分析の成果などを加えて、大野川下流域における奈良時代以降の水田開発の様態を考えてみたい。

さて、大野川下流域の土地利用の特徴を、1647（正保4）年に作成された『鄉村高帳』（以下、『正保郷帳』）で読み取ると、畑地の多さ、干害の多い日損所や、氾濫被害の多い水損所の多さがあげられる（豊田,1987）。さらに地区別に土地利用の状況を見ると、大野川下流域は以下の5地区に区分できる。

④：現在の鶴崎地区。大野川・乙津川の河口部近くの「正保郷帳」の鶴崎村や三佐村にあたる。

⑤：現在の常行・関園・南・関門・下徳丸・上徳丸・鶴瀬・丸亀・大津留にあたる高田地区。大野川と乙津川に挟まれた洲ヶ在八ヶ村が営まれていた。

⑥：現在の迫から宮河内・新田の大野川東岸地区。「正保郷帳」の迫村や川添地区の宮河内村にあたる。

⑦：現在の皆春・森町・森にあたる乙津川西岸でも河口に近い森町・森地区。

⑧：乙津川西岸でも中尾川以南の毛井・松岡地区。「正保郷帳」の松岡村・成松村・池上村・毛井村にあたる。清水遺跡は、この地区の北半部に位置する。

これらの5地区の中で、町場を形成していた⑥鶴崎地区は除くとして、大野川と乙津川に挟まれた⑤高田地区では、上徳丸村・堂園村・常行村は畑高のみの記載で、下徳丸村や南村では村高に対する田高が占める比率は3%、比較的田高の高い関門村でも14%である。これに対して、⑦毛井・松岡地区では、松岡村・成松村・池上村・毛井村で、村高に対する田高の割合は31~38%、鶴町台地上も含む横尾村では48%、その下流の⑦森町・森地区の森町村では54%である。また、⑥大野川東岸地区の迫村では26%、上流の宮河内村では23%の比率を田高が占める。日損所や水損所は、⑤高田地区では水損所だけが見られ、⑥大野川東岸地区、乙津川西岸の⑦森町・森地区や⑧毛井・松岡地区の村々では、水損所が見られる一方で、日損所もかなりの比率で挙げられている。

同様な田畑比は、1813(文政10)年頃に編纂され、田畑賦税・産物・土地土壤・神社寺院・人口・水利・風俗などが具体的に述べられた「高田風土記」でも読み取れる(豊田・秦・植本,1982)。⑥鶴崎地区の鶴崎村で「田貳町六反五畝 参拾叁町六反六畝」、⑤高田地区でも大野川と丹生台地沿いの関門村の枝村である中瀬村では「田貳町四反五畝余、畑五反余」、同じく百堂村では「田1壹反五畝余、畑四反四畝余、



図4 1914(大正3)年瀬川の地図に示された大野川下流域の土地利用状況
(縮尺 1/50000、アミかけ部分が水田域、黒塗り部分は溜池、『日本列島二万五千分の一地図集成』科学書院「鶴崎」・「家嶋」より作成)

◎大野川東岸地区の迫村では「田参町八反八畝余、畑武拾参町参反余」の比率である。

さらに、1914（大正3）年に測図された地図では、④高田地区では水田がほとんど記載されておらず、◎大野川東岸地区では、丹生台地帯の旧河道である沖積面Ⅱと、台地に開析された谷底面に水田が分布する（図4）。ところが、乙津川西岸の④森町・森地区や◎毛井・松岡地区では沖積低地の全面が水田化されている。④森町・森地区では、鶴崎台地帯に明治大分水路が開かれているとは言っても、水田がほとんど記載されていない④高田地区とは好対照である。このように、近世以降、大野川下流域では、地区ごとに水田経営の様態が異なっていたことがうかがえる。

こうした近世から近代における大野川下流域での土地利用の様態で、まず、④高田地区は、自然堤防と後背湿地が交錯し、「多く真土にて地厚く地味もよく耕に勞す、間にハ赤ぎちの如くもありて、土性ねばく尤耕に勞す、東西の川辺ハ多く小砂・こみ土交りにて和らかにはあれど、地薄にて下畑なり」（『高田風土記』州ヶ在ハヶ村 堂園村の項）と述べられているように、水田を開田するには不向きな土地であり、畑地の比率が圧倒的に多く、水田が拓かれたとしても、後背湿地のごく限られた範囲であったと考えられる。

また、◎大野川東岸地区では、丹生台地の壓近くまで大野川が迫り、合流する小河川もほとんどなく、沖積面Ⅱはあまり発達していない。1914年測図の地図の土地利用の状況から、「正保郷帳」・『高田風土記』の村高に占める田高比率や田畑面積から考えられる開田地は、主に台地に開析された狭隘な谷底面であった可能性が高い。近世以前については、今後の発掘調査が待たれるが、これまでの大分県域における土地開発史研究では、台地に開析された谷内でも湧水点近くでの限定され小規模な水田経営が指摘されてきた（小柳、1994、田中、1994ほか）。最近では、日田市高瀬遺跡群の野間地区M区で、台地上の比高差2～3mの浅い谷状の窪地内の湧水点近くで8世紀代の水田が発見されている（田中、2001）。大野川下流域でも、◎大野川東岸地区の丹生台地に開析された谷底、そして清水遺跡が位置する◎毛井・松岡地区西側の中尾川・筑間川・清水川・北鼻川が造る開析谷でも、同様に湧水を利用した水田を想定できよう。

ところで、清水遺跡では、沖積低地でも狭間川が造る旧河道面である沖積面Ⅱに、8世紀後半以降、水田が営まれ続ける。清水遺跡の沖積面Ⅰ上では18世紀後半以降の溝が発見されており、沖積面Ⅰ上の水田化が進むのは当該期以降であると考えられる。また、同じ沖積面Ⅰに立地する毛井遺跡A地区では、20条ほどの溝が発見され、16世紀末～17世紀初頭の津州窯系青花が出土したSD-20は、幅4mほどを測り、地形傾斜に平行するように南北方向にのび、調査区の北側で直交方向に折れる。周辺には、SD-20と直交あるいは併行する幅が狭い溝が数条掘られ、水田に伴う水路とされている。沖積面Ⅰ上の谷状の窪地の水田化はやや先行する可能性も残るが、水田化が本格化するのには、やはり清水遺跡の調査成果から18世紀以降と言えよう。清水遺跡第2トレンチでは、第1地点試料No.2（11層＝東部水田Ⅰ）と第2地点試料No.3（13層＝東部水田Ⅲ）での花粉分析の結果から、ソバの栽培が指摘されている。沖積面Ⅰは水田化される以前には畑地に利用されていたと考えられる。

このように、乙津川西岸でも◎毛井・松岡地区では、8世紀～18世紀の大野川下流域における水田域の広がりは沖積面Ⅱの分布とほぼ重ね合わせて考えることができる。しかし、沖積面Ⅱの分布は、中尾川・筑間川・清水川・北鼻川の両岸に限られている。そのため、水田経営は比較的小規模であったことが推定される。また、沖積面Ⅱは、各河川の旧河道面にあたり、清水遺跡の堆積上層データから読み取ったように、河川氾濫による砂礫の堆積が旺盛であったり、湿地～沼沢化するなど、環境変化が著しい。水田経営は非常に不安定であり、水田を拓くことができる環境に変化した時点を見逃さず、小規模な水田を継続して営んでいく姿を復元できる。

さて、乙津川西岸でも④森町・森地区では、乙津川の支流はほとんどないが、大野川や乙津川が

運ぶ旧河道埋積堆積物、自然堤防堆積物や後背湿地堆積物が広い範囲に見られ、沖積面Ⅱがモザイク的に分布する。この地区では、鶴崎台地帯に東西二町、南北約六町の一町方格の地割りが知られている。方格地割りは部分的であり、地割りが施工された時期も明らかでない。ただし、2001年度から発掘調査が進められている大分川下流域の稲田地区では、古墳時代～中世の水田遺構が発見され、沖積面Ⅰに相当する微高地上の水田化は中世段階に始まっているようである（大分市教育委員会、2001b）。方格地割りをこの時期のものと考えれば、同じ乙津川西岸でも、沖積面Ⅰにおける水田開発は◎毛井・松岡地区よりも先行することになる。

まとめ

大野川下流域では、これまで大分県内の発掘調査成果や近世文書の検討から、鶴崎台地や丹生台地に開拓された狭隘な谷底の湧水点近くで小規模な水田経営が想定されてきた。今回の清水遺跡の調査では、沖積低地の中でも沖積面Ⅰの間に形成された沖積面Ⅱ（旧河道面）における水田経営の様態を明らかにできた。そうした沖積面Ⅱは、沖積面Ⅰに挟まれるため、大野川や乙津川の氾濫を直接に被らない場所でもあるが、水田は沼沢～湿地下で堆積した粘質土層が自然排水の好転する時点で拓かれる。環境変化に機敏に対応した開田である。また、比較的用水を得やすい環境にある湿地タイプの水田であり、用水の効率的な利用を図るために、給水と排水を分離した水路を備え、継続的な水田経営が行われている。しかし、沖積面Ⅱでは砂層や砂質土層、粘質土層が互層状態で堆積し、氾濫性の砂礫や砂層の堆積と沼沢～湿地化が繰り返されることが確認されている。その点では、限られた沖積面Ⅱの中でも、開田が可能な地点で小規模で移動性にとむ水田経営が続けられたと言えよう。

こうした清水遺跡で復元できた水田経営の様態は、同様な土地環境にある周辺の毛井・松岡地区の全域で敷衍化できるものと考えられる。しかし一方で、他の地区では土地環境の違うことから、異なった水田開発の動向が想定される。大野川下流域の水田開発は一律的なものではなく、それぞれの地区ごとの土地環境に適合した水田開発が進められている。

【謝辞】 調査および本稿を執筆するにあたり、大分県教育庁文化課の渋谷忠章・小林昭彦・田中裕介・吉田寛の諸氏、日本地研株式会社の田口修氏には、さまざまな便宜をはかっていただいた。記して感謝いたします。

【参考文献】

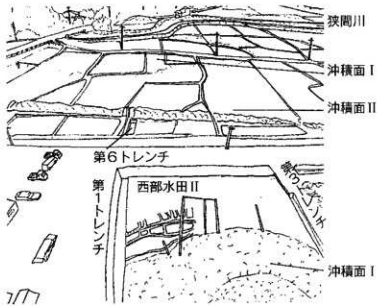
- ・大分市教育委員会（2001a）『第2回横尾遺跡現地説明会資料—第82次発掘調査地点—』
- ・大分市教育委員会（2001b）『玉沢地区条理跡現地説明会—第3次調査1区！』
- ・大分大学教育学部（1977）『大分川—自然・社会・教育—』
- ・賀川光夫・小田高士雄・橋昌信（1967）『野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査』（大分県文化財調査報告書13）大分県教育委員会
- ・後藤一重編（2001）『毛井遺跡A地区』（大分県文化財調査報告書121）大分県教育委員会
- ・小澤和宏（1994）『国東桂川上流域の開発史』（大分県地方史）第154号 大分県地方史研究会
- ・高橋信武編（1982）『横尾貝塚発掘調査概要—県道鶴崎-大南線改良工事に伴う発掘調査の概要—』大分県教育委員会
- ・田中裕介（1994）『日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史』（大分県地方史）第154号 大分県地方史研究会
- ・田中裕介編（2001）『日田市高瀬遺跡群の調査3』（一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 冊）大分県教育委員会
- ・豊田寛三（1987）『第一章 三 正保郷鎮にみえる大分・海部郡』大分市史 中 大分市
- ・豊田寛三・兼政博・橋本譲司編（1982）『豊後国村明細帳（九）』（大分県地方史叢書—）大分県地方史研究会
- ・長谷義隆（1999）『スポーツ公園付近の地形と地質』『スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書』（大分県文化財調査報告書103）大分県教育委員会
- ・吉岡敏和・星住英夫・宮崎一博（1997）『大分地域の地質』（地質調査研究報告（5万分の1）地質図幅）地質調査所



写真1 清水道跡周辺の1961年撮影航空写真（約1／10000）



写真2 西部水田域と狭間川が乙津川に合流する地点に造る沖積低地（南から）



第89図 地形分類図



写真3 第1トレンチ(西部水田域)の西壁土層断面(横から)



写真4 第2トレンチp-V区西壁土層断面



写真5 第4トレンチ北壁土層断面